目を閉じればあなたに逢える

ぱくどら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
目を閉じればあなたに逢える

【Ｎコード】
Ｎ０９５３Ｅ

【作者名】
ぱくどら

【あらすじ】
夢の中にある街、夢幻郷。夢幻郷に足を踏み入れてしまった主人公・来夢。親友とある男子の恋模様を描く【現】の世界。夢幻郷で出会った時人との関係を描く【夢】の世界。【現】と【夢】その狭間で揺れ動く来夢の心の成長と恋の物語。※縦書き読み推奨★ＰＤＦ小説ための目次はプロローグの前書きに移動しました★

【プロローグ】（前書き）

もし、毎日同じ夢を見たとして……
そんな夢の中でいきなり「ようこそ」なんて言われたら……
あなたは一体どうしますか。

◆　◆

・注意書き
本作は字数が多い作品となっています。そのため、縦書き読み推奨とさせていただいております。ＰＣ版小説家になろうではＰＤＦ小説ネットというものがあり、そちらで縦書き読みできるようになっています。もちろん、横書きの状態でも読める作品です。携帯からも縦書き読みができるようですが、字数が多いため携帯からの縦書き読みはおすすめいたしません。

★ＰＤＦ小説のための目次★【プロローグ】３Ｐ～【１】７Ｐ～【２】１２Ｐ～【３】１６ｐ～【４】２２Ｐ～【５】３０Ｐ～【６】３６Ｐ～【７】４２Ｐ～【８】５１Ｐ～【９】６０Ｐ～【１０】６５Ｐ～【１１】７３Ｐ～【１２】８４Ｐ～【１３】９２Ｐ～【１４】９８Ｐ～【登場人物紹介】１０５Ｐ～【１５】１０８Ｐ～【１６】１１４Ｐ～【１７】１２４Ｐ～【１８】１２６Ｐ～【１９】１３４Ｐ～【２０】１４１Ｐ～【２１】１４８Ｐ～【２２】１５５Ｐ～【２３】１６２Ｐ～【２４】１７０Ｐ～【２５】１８２Ｐ～【２６】１８８Ｐ～【２７】１９７Ｐ～【２８】２０５Ｐ～【２９】２１５Ｐ～【エピローグ】２２０Ｐ～

【プロローグ】

何も見えない真っ黒な空間に、見覚えのない人が目の前に立っていた。ひざまずき不安で泣いている私に、微笑みかけながら手を差し伸べてきた。色白の手で、手首には白く輝く腕輪をはめている。私は恐る恐る手を伸ばし、その人の手を握った。

「ようこそ、夢幻郷へ」

しん、とする空間にその人の低い声が消えていく。優しそうなその顔にほっとする私を、その色白の腕で私を立ち上がらせた。私の足は、久しぶりに立ったのようにふらふらとし、私はバランスを崩し尻餅をつきそうになった。だが、その人が間一髪のところで私の身体を支えた。……よく見ると逆の手には、腕輪と同様に白く輝く指輪をはめていた。

その美しい指輪と腕輪に私の目は釘付けとなった。

「美しいだろう。この夢幻郷には少々眩しいものかもしれない。しかし、この輝きにも負けないぐらいここは素晴らしい世界だ」

その人は目を細め私に優しく微笑みかけた。と、同時に私の頭の上に手のひらを乗せた。すると、黒い世界に亀裂が走り、私の目の前に世界が広がった。しかし、その世界は見覚えのある風景だった。だが、何かがおかしい。

「……恐れることはない。この世界は自由なのだから」

私の様子を悟ったのか、落ち着きのある声だった。しかしそう言ったその人は、自由という言葉とは裏腹に遠くを見つめ、どこか寂

しそうな様子だった。この世界が普通とは違うというのは、一目瞭然だった。私はその疑問をその人にぶつけた。

「どうしてこんなにも暗いのでしょうか。それに人の気配も感じられない」

私の小さな声は、物音一つ聞こえない空間にすぐさまかき消された。

「それは、この世界は夢だから。君は夢幻郷に招待されたんだ」

【プロローグ】（後書き）

ありがとうございます。

ファンタジーにしようかと迷ったのですが、高校が舞台となりそうですので学園とさせていただきました。

拙い文章ながらも、誤字脱字は最低限のマナーとしてないように努力します。もし見つかりましたらご一報ください。

読んだ、の一言でも結構ですので感想をお願いいたします。飛んで喜びます。

【現】1．前触れ

私、木元来夢（きもとらいむ）が住む坂都市は海に近い都市で、人口も多い。しかし、私が通う市立坂都高等学校（しりつさかとこうとうがっこう）は郊外にあり近くにある高いビルは数えるほどしかない。車が通る数も少なかったものの、この春オープンした“ドリームフィールドパーク”という大型のテーマパークのおかげで多く人を見かけるようになった。行ってみたいのは山々なのだが、高校2年に進級し、所属しているソフトボール部の活動がますます忙しくなっている。朝から夜までずっと練習だった春休みは、体力に自信のある私でも少々きつく、休みの日は家で熟睡してしまっていた。どんな春休みだったかと聞かれると、クラブか寝ていた、としか答えられそうになかったが、春休み以降、人に言うと笑われそうな体験をしている。

◇　◇

朝練が終わると急いで着替えて、ＳＨＲが行われる2年1組の教室へ息を切らしながらもなんとか到着した。

――八時二十五分。我ながら、余裕の時間。

じんわりとおでこに滲む汗をタオルで拭いながら、自分の席に座った。

「おはよ、らむ」

席に着くと、すぐさま静山香織（しずやまかおり）が声をかけてきてくれた。

「おはよ、香織。って、らむって言われると某漫画のキャラクターがどうしても浮かぶんだよね。らむって呼ぶの香織だけだよ？」

「いいのいいの。全然おかしくないもの。それに、呼んでいるのが私だけなら、なんか特別みたいでいいなぁ」

ふふっとニコニコしながら笑うこの女の子は、私の大親友の香織。身長１６５ｃｍ、背中の真ん中辺りまで伸びている艶のある髪、身

長の割りに小さな顔、スタイル抜群の身体、おまけに学年トップの頭脳。学年の中では一番有名人で、男女問わずナンバーワンの人気者らしい。……そんな人の友達である私はちょっと鼻が高い。
「今日もクラブあるの？なんか日を追うごとに日焼けしているように見えるよ」
じーっとぱっちりとした目で香織が私の顔を観察する。
「あるよ、毎日。一応日焼け止め塗っているんだけど、効かないのかなぁ。春休みちょっと油断しちゃったかなぁ」
「春の紫外線は強いらしいよ。そういえば、春休みはクラブか寝ていたことしかないってらむ言ってたね」
時計を見ると数分でチャイムが鳴りそうだ。言おうか言うまいか悩み、少し間を空けた。視線が泳いでいたのか、その様子を見た香織が首をかしげた。
「どうしたの？なにか忘れ物したの？」
「いや、あー、どうしようかな。言ったら笑われそうだなぁ。でも聞いてほしいな」
「なに、もったいぶって。逆に気になっちゃうんだけど」
「じゃ、じゃあ聞いてくれる？！あのね……」
思わず頬が緩み話を始めようとした瞬間、二人の間に男子の声が割って入ってきた。
「おい」
声のする真横を見ると、坊主頭で香織よりも背の高い男子が私を睨みつけている。
「池口くん。おはよう」
そんな様子を気づいているのか気づいていないのか、香織は普段どおりに挨拶をした。予想外の挨拶だったのか、睨みつけていた視線をはずした。すると、照れくさそうに下向き加減で、似合わない小さな声で「っちす」と言った。
「なによ、いきなり」
そう言った私に対し、この坊主頭は再び私を睨みつけた。こいつ

は池口勝(いけぐちまさる)。坊主頭が語っているように野球部員。日焼けは私よりもひどいが、その割には整った顔をしているのでそこそこ人気者らしい。おまけにクラスの学級委員までやっているので、ますます人気に火がついている。が、私はこいつのどこのいいのか理解できない。

「おまえ、グランド整備に使うトンボ、勝手に野球部のやつを使っただろ」

「え。……あ、そういえば拝借したような。それがどうかしたの？」

「おまえが使ったあと、誰が気づいて誰が後始末したと思う？」

池口の様子から、答えを聞くまでもない。きっと池口が片付けたのだろう。野球部とソフトボール部のグランドは隣同士で、よくお互いのボールが行き交う。そのたびに返しているのだが、なぜかその時に私と池口はよく顔あわせとなる。その結果よく教室でも口げんかをしてしまう。

「ごめんごめん。片付けてくれたんでしょ？サンキュー」

ひとまず笑ってごまかした。すると丁度チャイムが鳴った。睨んでいた池口だったが、ため息を漏らしさっさと自分の席へと戻っていった。

「らむ。らむが言いかけた話、昼休みに聞かせてね」

「あ、うん。もちろん」

自分の席に戻りながら、長い髪を揺らし手を振る香織に、私も手を振りかえした。

眠い授業を必死に耐え、待ちに待った昼休みとなった。授業が終わると同時にかばんから弁当を取り出し、香織の席へと向かう。香織は手に財布を持ち、二人一緒に食堂へと行く。私は1年のときから自宅から弁当を持参しているが、香織は売店でパンかおにぎりを買っている。そしてそのまま食堂の外にあるベンチに適当に座り、昼食を食べるのが私たちの日課となった。

「……リアルな夢を見る？」

口を動かしていた香織だったが驚いたのか笑ったのか、苦しそう

にむせ始めた。
「そうなの。なんだか、夢の中にもう一つの街があるみたいに、もうすっごいリアルなの！……大丈夫？」
咳が止まったの見計らい、香織はペットボトルの口を開け一口飲んだ。
「……どんな話かと思ったら夢っていうから、なんだか拍子抜けしちゃって驚いちゃった」
「ま、まぁ言っても笑われるって思ってたけど。でも、一日だけならともかくここの所毎日同じ夢なんだよね」
香織は小さな口で、先ほど売店でかったカレーパンをおいしそうに食べている。
「ちなみに、どんな……夢なの？」
そう言われてご飯を運んでいた箸を止めた。いつも見る夢を思い出してみた。
「とにかくこの周辺の街そのままなの。だけどね、誰もいなくて私一人きり。で、毎回毎回誰かいないのか探している夢」
「そうなの」
あまり興味が沸かないのか、ペットボトルを再び開けぐびぐびと飲んでいた。
「……ま、あまり気にしなくてもいいんじゃないのかな。きっと偶然だよ」
「うん、そうだよね」
私は残っていたご飯を再び口へと運んだ。

クラブが終わるのは、いつも日が沈んだあとだ。たまに寄り道をするが、今日はまっすぐ家へと帰った。夕ご飯とお風呂を済ませ、部屋に戻るとベッドの上に倒れこんだ。疲れがたまっている身体に、さらに蓄積されていくクラブでの疲労。目を閉じると、数分も掛からないうちに深い眠りへと誘われた。

【夢】2．出会い

いつもと違う感覚だ。私は今夢を見ているのだと、はっきり意識しているのに身体は起きている感じだ。恐る恐る腕に力を入れ、右腕を上へとゆっくりと動かしてみた。

――動いた。

このまま上半身を起こしてみた。

――起き上がれた。

夢なのか、夢ではないのか、いまだにはっきりとしないが目を開けてみることにした。夢なら覚めるはずだ。ゆっくりとまぶたを開けた。が、自分の部屋ではなく真っ暗な世界が目の前に広がっていた。黒一色だ。自分の手さえも見えないほどの暗さ。自分の存在さえあるのかどうかわからないほどだ。自分の部屋なのか確かめようと、床に手を触れてみるが布の感覚はなく、冷たくも暖かくもない硬い手触りだった。一体どうなってしまったのか。わけのわからない状況に、じわじわと恐怖が襲ってくる。

――誘拐？監禁？それとも、もう私は死んでしまった？

良くない考えが頭の中をぐるぐるしていると、真っ暗な世界に二つの灯りが見えた。小さかった灯りが、こちらに近づいているのか次第に大きくなっている。灯りが近づいてくると、その灯りが人であるということがわかった。どうやら身に着けているアクセサリーが光っているらしかった。逃げたい気持ちが強かったが、自分がどこにいるのかがわからないため動くことができない。

そうこうしている内に、その人は私の目の前に立ち止まった。思わず強く目を閉じた。

「初めまして、木元来夢さん」

男性のような声だった。殺気を感じない声に、恐る恐る目を開け、目の前にいるその人を見上げた。全身を覆うローブを身に付け、左手首に白く輝いている腕輪を、右手中指には同様の指輪を身につけ

ていた。そのアクセサリーのためなのか、その人の周りに淡い光がまとわりついているかのように見える。色白の肌に流れるようにきりっとした目つき。短髪で白髪の髪は短く逆立っていた。鼻筋も通り悪くない顔だ。

「大丈夫です、私はあなたをとって食おうとは思っていませんよ」

そう言うと、一歩私に近づいてきた。思わず後ずさりした。

「やはり信用してくれませんよね」

すると腕組みをし、なにやら考え込んでいる。

なにか考え付いたのか、納得した表情で再び一歩近づいてきた。すかさず後ずさりをする。

「今この状況を簡単に説明します。まず、私ですが、あなたの敵ではありません。あなたにとって私は怪しい格好でしょうが、これは私の正装ですのでご了承ください。次にこの真っ暗な空間ですが、これはあなたの夢の中だからです。私があなたに触れてもよろしいのであれば世界を開きます。……おっと、触れるのはここですのでご安心を」

その人は自分の頭をつんつんと指で示した。終始にこやかに話しているが、どうも腑に落ちない。どもらないように、震える身体を必死に抑え声を絞り出した。

「夢の中ってどういうことよ……。それにどうして私の名前を知っているの」

その人は短くうなり声をあげると、ため息をついた。

「……わかりました。世界を開かせていただけるのでありましたら、質問にお答えしましょう」

そう言い終えると、つかつかと私に歩み寄ってきた。私は緊張のあまり動くことができない。もうだめだ、と思い強く目を閉じた。

――あぁ私の人生短かったな。

が、しかし。その人は私のすぐ前で立ち止まると、すぐに触れようとはしなかった。

「本当に何にもしませんって。……怖がらずどうか目を開けて下さ

い」
恐る恐る顔を見上げてみると、その人は少し困った顔をしている。どうやら本当に頭以外は触れないらしい。一つ息を吐いたその人は、私の前にひざまずいた。
「あなたを痛めつけるようなことは今後一切ありません。どうか私の言葉を信じてください」
まっすぐなその瞳に、思わずゆっくりとうなずいた。
――さっきからの口調といい、悪い人ではなさそうだよね……。
「では、よくご覧になってください」
そう言うと私の頭に右手をそっと乗せた。すると、今まで真っ暗だった空間に亀裂が走り、その亀裂から新しい空間が広がってきたのだ。その亀裂はあっという間に広がり、私の周り全てを覆った。
「こ、これは……私の部屋？」
真っ暗だった空間から姿を現した世界は、さきほどよりも少しだけ明るい私の部屋だった。明るいといってもたぶん夜だろう。明るいと感じるのは、さっきの空間があまりにも真っ黒だったためだ。その人は右手を私の頭から離すと、一歩下がり、おもむろにお辞儀をした。
「私の名前は時人（ときと）。この世界は、夢幻郷（むげんきょう）。ようこそ、夢幻郷へ」
聞きたいことが頭の中でまとまらず、口を開けたまま声がうまく出せない。すると、突然目の前がぼやけ始めた。どこからともなく聞こえるベルの音が頭の中にがんがんと響き、目の前にいる時人の姿がどんどんと小さくなっていく。が、時人はにこやかに手を振った。
「おや、時間のようですね。いってらっしゃい」

★　★

うるさい目覚まし時計の音のほうへ、無意識に手が伸びていた。
――ゆ、夢？！

時計を止め、思わず飛び起きた。
朝日が差し込む部屋は独特の淡い光に満ちている。部屋は私が寝る前と同じ状況で変わった様子もない。一つだけ違っていたことは、時人と名乗った青年が触れた私の頭に、その感触を残っていることだった。

【現】3．嫌がらせ

今日の朝練は集中して行えなかった。昨晩見た夢をはっきりと覚えているせいだ。時人と名乗る青年が頭を触った感触が、今でも残っている。

頭に手を当てたまま、教室へと入っていった。席に座ると、すぐさま香織が来てくれた。

「おはよ。……どうしたの。頭痛いの？」

「おはよ。いや……頭は痛くないよ。香織こそなんか声に張りがない気がするけど」

そう私が言うと、香織は少し沈痛な面持ちで少し黙った。

「……あのね、ちょっと相談したいことがあるんだけど」

「え、相談？」

香織はどことなく元気がなく、うっすらとくまができているように見える。

「あ、待って。私の席真ん中だしさ、香織の席で聞くよ」

「う、うん」

香織の席は窓側の一番後ろの席で、隣の席はあの池口の席だった。池口はまだクラブから帰っていないようだったのでその椅子に座った。

「で、どうしたの。顔色もよくないみたいだけど」

しょんぼりとしたまま、香織は机の中から何かを取り出そうとしている。一体なにが出てくるのかと、ちらっと机の中を覗き込もうとすると香織がその物を机の上に取り出した。

「うわっ、なにこれ」

思わず顔をしかめた。香織が取り出したノートの表紙に黒のマジックペンで大きく「バーカ」という書かれていた。そのノートを手に取りページを開いてみると、中のページは刃物のようなものでズ

タズタにされ読めなくなっている。ノートの後ろには、黒のマジックペンで大きく「あんたのこと大嫌い」と書かれてあった。
「ひどい！ちょっと、先生のところに行ってくる！」
「ま、待って！」
ノートを持って立ち上がった私を、香織が私の腕をつかみ止めた。
「どうして？これ、単なるいたずらなんかじゃないよ。明らかに嫌がらせじゃない！香織は黙って耐えるの？」
顔を俯かせ何度も頭を横に振った。
「じゃあさ、犯人を捕まえてちゃんと謝らすべきだよ」
「……だから、らむに相談したの」
あまりの香織のか細く弱々しい声に、興奮した私の頭は一気に冷めた。
「信用できる人、らむしかいないから。……私、らむ以外の人を信じていないの」
「えっ？ど、どうして。香織は学年の間じゃあすっごい有名人で人気者なんだよ。休憩中だって、授業中だって、みんな香織のことすっごい頼りにしてるじゃない」
香織は伏目がちに、私の言葉を聞いていた。
「それってさ、香織のこと一目置いてるからじゃないかな。みんなから意識されてるって私にとっちゃすごい羨ましいことだよ？私はさぁ、頭も悪いし色気はないし、勉強もできないからどうでもいい存在みたいで……」
「なんだ、自分でわかってんじゃん」
聞き覚えのある声が聞こえた。振り返ってみると、学校かばんとスポーツバックを掲げた池口が立っていた。
「どけろよ。おまえがそこにいたらかばんが置けないだろ」
「うっさい！ちょっと黙ってて」
一喝するも池口は怖気づく様子もない。ただ、私が立ち退くのを待っているようで突っ立っている。そんな様子の池口を無視し、そっと香織の肩に手を置いた。香織はゆっくりと顔を上げた。表情は

暗い。
「打ち明けてくれてありがとう。……確かにこんなことされたら信じたくても信じられないよね。……香織が嫌なら先生には言わない。でも、このノートは絶対許せない……だから私なりに犯人を捜してみるよ」
香織は頷き、小さな声でありがとうと呟いた。と、丁度チャイムが鳴り、しぶしぶ自分の席へと戻った。戻りながら香織の席を振り返ると、ちょうどノートを机の中にしまおうとしている。隣に座る池口はそのノートを横目でちらりと見ると、驚いた表情を浮かべていた。

私と香織が二人っきりになれるのは、朝か昼休みの時間しかない。というもの、授業の合間合間の休憩時間は香織の周辺に必ず誰かがいる。同じクラスの人だったり、別のクラスの人だったり、時には上級生下級生までもが香織の元へとやってくる。いろんな人に話しかけられる香織は、嫌がる様子もなく笑顔でみんなと接していた。時々手紙を渡してきたり宿題を見せてとやってくる人もいるが、嫌がる様子もなかった。本当に優しい子なのだ。
だが、今日は違っていた。話しかけられてもあいまいにしか返事をせず、素通りに近い対応をしていた。みんなもいつもと違う雰囲気の香織を感じとったのか、話しかけてくる人は少なかった。
「誰か心当たりいないの？」
ご飯を運びつつ目の前に座る香織に話しかけた。相変わらず表情が暗い。
「うーん……いないかな」
「そっか」
言葉数も少なく、黙々とカレーパンを食べている。
「……なんでいきなりこんなことされたのかなぁ。香織に限ってこんなことはないと思うけど、誰かにひどいこと言ったりなんかした？」

「ないと思う。……そういえば、今の席になってからおかしなことが起きてるかも」
「おかしなこと？例えば？」
香織は買ってきたパックのジュースを飲み干した。
「みんなに貸してた宿題のノートの答えが消されてたり、もらった手紙がゴミ箱の中に入ってたり……」
「え……おかしいって思わなかった？」
「間違えて消しちゃったのかなとか、ゴミと間違えて入れちゃったのかなとか思ってたの。今思えばおかしいよね」
そういうと香織は残りの一口サイズのカレーパンを口の中に入れた。
――香織って時々天然よね。
つっこみの言葉を飲み込み、咳を一つしてから相槌を打った。
「そっか……あの席になってからかぁ。ひとまず、前々から狙われてたってことだよね。……くそー現場を押さえられたら私がビンタの一つでもやるんだけどな！こんな風にさ！」
往復ビンタのする真似をしてみせると、くすくすと声が聞こえた。
「ほんと、らむが味方だと心強いよ。ありがとう」
「いいっていいって！お守りいたしますよ、香織様」
いつもどおりの香織とはいかないものの、笑みを見せる香織にほっとした。

犯人を捜す、と香織に言ったもののどうやって捜せばいいのか、頭の中でぐるぐると考えた。当然クラブに身が入らず、何度もエラーをし監督から注意された。が、監督の言葉さえ頭に入らなかった。
クラブが終わりその帰り道、坂都高校を出て道路の向かい側にあるカフェ“ママレード”へ寄った。
「こんばんわ。ケーキセットお願いします」
「いらっしゃい。はいはい、少し待ってちょうだいね」
来店した私を笑顔で迎えてくれたのは、ママレードの店主上村愛（うえむらあいこ）

子さん。通称、あいさん。花柄のエプロンに黄色のバンダナをつけた上品なおばあちゃん。今年六十五歳らしいのだが、しわが少なくきれいな肌をしている。
「はいどうぞ。遅くまでクラブがんばってるのねぇ。おばあちゃん関心するわ」
　カウンターに座った私の前に、コーヒーとイチゴのショートケーキを出してくれた。
「ありがとうございます！……あ、そうだ。なんか悪い話しているやついませんでした？」
「悪い話？……坂都生で？」
「そうです。ママレードって坂都の中じゃすっごい人気のお店なんです。だからもしかしたら、あいさんが何か聞いているんじゃないかなぁと」
「ふふ、そうね確かに毎日たくさんの高校生が寄っていってくださるわね。照明も暗くて小奇麗でもないこんなお店に……。最近じゃこんな喫茶店もないでしょう」
　確かに、照明もさほど明るいものではないし、お店のなかも木材を基調としていて古ぼけた感がある。ふと、あいさんが立っているカウンターの後ろの写真立てに目が留まった。若いあいさんと、逆光で見えないが制服を着た人と一緒に写っている。ママレードは創業３０年ぐらいだと聞いたことがあった。
「確かに最近のカフェとは違うけど……そこがみんないいんだと思いますよ。それに、あいさんのケーキすっごいおいしいですもん」
　といいつつフォークで一口ケーキを口に入れた。甘すぎずあっさりとして、ふわふわのスポンジとイチゴのすっぱさ、香りが口の中に広がる。思わず頬が緩む。
「ふふ上手ねぇ。……あ、悪い話をしている人だったわね。うーんそうねぇ。いろいろな話は聞くけれど……それらしいことは聞き覚えがないわねぇ」
「そうですかぁ」

「ごめんなさいね。どうしてそんなことを聞くのかは知らないけれど、明日からおばあちゃんも聞き耳立てておくから」
あいさんは微笑みながらウィンクをした。

【夢】4．夢幻郷

ママレードから家に帰り、いつものようにベッドの上に倒れこんだ。

――あー犯人捜しどうやればいいのかなぁ。

と、考えているうちに眠気が私を襲ってきた。眠気に耐え切れず、もう寝ようと布団の中に潜り込む。すると、ふとあの声が甦った。

『ようこそ、夢幻郷へ』

夢で逢ったあの青年ふっと頭の中に浮かんだ。思わず目を見開いたが、やはり眠気には勝てず数分も立たないうちに夢へと誘われた。

――あんなの夢に決まってるよ……。

★　★

気づくと暗い私の部屋にいた。夜なのだろう、暗くてうっすらと物が見えるほどだ。寝ていた私はなぜかベッドの横に立っていた。上下のジャージ着ていて、さっき寝たときの格好だった。

ふとベッドを見下ろしてみた。が、見たものに驚き思わず尻餅をついた。

「うわ！な……なんで私がいるのよ！」

紛れもなく私だった。すやすやと目を閉じ寝ている。大声を上げたのにも関わらず、びくともしない。本当に私なのかどうか、触れようと手を伸ばしたその時、突然横の窓のほうから声が聞こえた。

「まだ触るな！」

大声に驚き、伸ばしていた手を止めた。見ると窓から昨日の青年が覗いていた。

「……すいません、声がしたので来て見ました。また会えましたね来夢さん。覚えていらっしゃいますか、私、時人です」

白髪のつんつん頭でにっこりと笑う青年、時人。忘れるはずもない。
「覚えてるよ。……っていうか何で前に出てきた人が、そのままま た夢で出てくるのよ」
お尻をさすりながら立ち上がり、窓のほうを向いた。時人は開いた窓枠に肘をつき、にこにこと私の様子を眺めている。
――あれ、もしリアルな夢なら私の部屋も2階じゃないの。……なんでこの人外から窓枠に肘をついてるのよ。
疑問に思い窓へ歩み寄り、そっと時人の足元を覗いてみた。
「うわ！浮いてる！」
紛れもなく時人は浮いた状態で、窓枠に肘をついていた。驚きのあまり思わず後ずさりをしたが、バランスが崩れまた尻餅をついてしまった。そんな様子を眺めていた時人は、ふっと吹きだすと口に手を添えクスクスと静かに笑い始めた。
「ちょ、ちょっと！あなた失礼な人ね！人がこけることがそんなにおもしろいことなの？夢のくせして、馬鹿にしないでよね！」
「あ、いや……馬鹿にしたわけじゃありません。絵に描いたような驚きの仕方で……少し笑いがこみ上げてきました」
――どっちにしろ私を見て笑ったんじゃない！
イライラする感情を抑え、痛むお尻をさすりながら立ち上がり、窓の向こうで浮いている時人に強い口調で質問した。
「これは夢なんでしょ。……どうしてまたあなたがいるのよ。それに、この寝ている私はどういうこと？はっきり言って、今夢を見ているっていう感じがしないんだけど。それに今なんであなた浮いてるのよ！」
時人はすぐには言葉を発せず、黙って窓枠に足を掛け、私の部屋へと入ってきた。入ると横のベッドで寝ている私をじっと見つめたあと、こちらを向いた。
「前にも言ったとおりここは夢幻郷です。……夢であって、夢ではない……という感じでしょうか」

「夢であって夢じゃない？どういう意味？」
今までにこやかに話していた時人だったが、今は真剣な表情となっている。
「来夢さんの現実な世界が表、となるならば、この夢幻郷の世界はその裏ということです。現実な世界と全く変わらない風景でしょう」
うっすらと見える私の部屋は、確かに一寸たりとも変わった様子はない。あの部屋がそのまま夜を迎えているという感じだ。さらに、時人は続けた。
「夢と感じないのは、来夢さんが夢幻郷へと踏み入れたからです。本来寝てしまうと意識もなくなりますよね。しかしながら、一度夢幻郷に踏み入れると、その寝るとなくなる意識が夢幻郷へ来るのです」
いまいち理解ができず、小首をかしげた。
「簡単に言うと、寝て見る夢が自動的に夢幻郷へ来ることになるのです」
「……見る夢が……ここに来ることになる……？じゃ、じゃあ今この世界が夢なら、どうして私自身がそこにいるのよ！それに夢なのにどうして現実と同じ構造なの！」
こんなに大声を出しても、ベッドの上に横たわる私は少しも動かず起きる様子もない。時人はベッドの横に片ひざをつけ、寝る私の顔を覗き込んだ。
「……何度も言いますが、ここは夢幻郷……夢の世界です。寝ることにより、現実から意識がなくなります。その現実から離れた意識がこちらの世界に来るのです。現実にいるほとんどの人は、この夢幻郷の存在を知らないでしょう。ですが、この世界はその意識で作られたものなのです」
「い、意識？意識だけでどうやってこんな世界が作られるのよ。寝ているだけじゃない」
「いえいえ。もちろん起きると、起きている間、この寝ている来夢さんは夢幻郷から消えます。ですが、次に夢幻郷に現れるとき同時

に、来夢さんが記憶した意識のとおりに変化します。……なんでしたら試して見ますか」
　そう言い終えると、時人はこちらを向き手招きをした。私は素直にそれに従い、時人の近くに寄った。すると、時人は隣の空いたスペースに招いた。
「こちらへどうぞ。さっきなぜ触るなと言ったのか、その理由をお見せします。……では、ご自身でこの寝ている来夢さんを触れてみてください」
「え？あなたさっき、いきなり大きな声上げて『触るな！』って言ったじゃない」
「まぁまぁ、気になさらずどうぞどうぞ」
　ごまかすかのように、にこにこと笑っている。が、正直なところ、本当に私なのか試したいと思っていた。一呼吸入れ、目の前に寝ている私にそっと触れてみた。
　すると、昨日の夢の終わりのように目の前がぼやき始めた。
――ちょっと！どういうことよ！……って声が出ない。
　口を動かしているものの、声が出ない。口をぱくぱくさせている私を目の前に、時人は笑顔を崩さない。
「……なにかを変化させてきてくださいね」
　手を振る時人が最後に見えた。

★　　★

　思わず飛び起きた。
――こ、ここは……私の部屋よね。
　周りをきょろきょろと見渡したが、間違いなく私の部屋だった。部屋の中は相変わらず暗い。が、先ほどまでいた時人の姿はいなかった。
　何気なく枕元に置いてある目覚まし時計を手に取った。

――三時半！朝練があるのに早く寝なきゃ！……ええい、学校の準備してから寝よう！
眠たい目を必死に開け、なんとか準備ができた。スポーツバックと学校かばんを机の上に置き、さっさと布団に潜り込んだ。ちらりと窓を見ると、開いていた。どうやら閉め忘れていたらしい。
――もうめんどくさいやぁ。寝ちゃおう……。

★　★

「おかえりなさい」
はっと気づくと、目の前に時人が立っていた。笑顔で私を迎えた。
「お、かばんを机の上に置きましたね。ほら、見てください。来夢さんが動かした通りでしょう」
時人が指差す方向に目を向けると、確かに私が置いたとおりにかばんがあった。ふと、投げ置いた目覚まし時計も見てみると倒れたままの状態だった。時計のすぐ隣には私がすやすやと寝ている。
「……もしかして、私が自分に触ると夢から覚めるってこと？で、でもあのかばんはあなたが動かしたのかもしれないじゃない」
ふう、と時人はため息をついた。
「来夢さんは本当に私を信用してくださらないですね……。では見ててください」
そう言うと、時人は投げ置かれ倒れている目覚まし時計を左手で触った。
「言っていませんでしたが、この夢幻郷では現実のものを一切動かすことはできません。……ほら、こんなにも力を入れているのにこの時計は動かない」
力を入れているのだろう、左手の甲に筋が浮き出ている。
「……ちょっと代わって」
そう言うと時人は素直に場所を譲った。腕の力に自信がある。両

手で倒れている目覚まし時計に力を入れた。が、びくともしない。
本当に動かないようだ。
「ね、私の言った通りでしょう。少しは信じてくれました？」
「少しね……」
そういうと時人はにっこりと笑った。
「この夢幻郷のことはお友達にあまり言わないでくださいね。あまり言うとあれですから……」
「あれってなによ」
時人はすぐには答えず、窓に向かうとその窓枠に座った。
「来夢さんの頭がおかしいと思われると、かわいそうですから」
と、心配する言葉とは裏腹に満面の笑顔だ。
「余計なお世話よ！もう香織には一度笑われ……て」
香織という言葉でぴんときた。
――香織で思い出した！私、寝る前に犯人捜しをどうしようかって悩んでたんだ！
自分で自分の頭をぽかぽかと殴った。
――私って薄情な奴！
「あの、いきなりどうしたんですか？」
私は時人を睨んだ。睨むと笑い顔が一瞬怯んだ。
「あなたがいきなり現れるもんだから、香織の犯人捜しのことすっかり忘れちゃったじゃない！私をからかう暇があるんだったら、あなたも少しは手伝いなさいよ！」
「……香織？あぁ来夢さんのお友達ですね。でも、なんですかその犯人捜しとは」
「昨日、香織のノートに悪質ないたずらがされてたのよ。香織はすっごい優しくていい子だから、犯人の目星がつかないの。でも早く見つけないと香織も不安だろうし……あの子優しい分傷つきやすいから。あぁでもどうしたら……」
「なるほど」
時人は考えるかのように腕組みをし、少し目を閉じた。

「まぁ夢の中のあなたに頼んだってしょうがないよね……」
ため息をつくと、時人はすっと目を開けた。
「……ひとまずその問題を解決しましょう。手伝います」
「え、あ、ありがとう」
冗談を言っているとは思えない真剣な顔つきに、疑いの余地はなかった。
――でも、『ひとまず』ってなに……。
「……そういえば、どうして浮くことができるの？夢でも重力あるみたいだし……。」
私はその場でジャンプをしてみせた。間違いなく重力はある。
「時人さんって何者？」
すると、真剣な表情から一変し、またにこっと微笑を見せた。
「……その質問はまた今度にしましょう」
「え、ちょっとどういうことよ」
が、また前のときと同じようにベルの音がガンガンと頭の中を響き渡り、私の視界はぼやけてしまった。
「では、いってらっしゃい」
最後に見たのは、またしても笑顔で手を振る時人の姿だった。

【夢】４．夢幻郷（後書き）

ここまでお読みくださいましてありがとうございます。

少々この物語とは関係のない話になってしまいますが、お許しください。

私、俗に言うケータイ小説ではなく、本当の小説というものを書きたいと思っています。……今書けているのかは置いておきます。

この小説家になろうさんのサイトではＰＤＦ小説という本格的な縦書きで読めるというものがあります。この物語をどうしてもこのＰＤＦ小説で載せたいと思っていました。そして、編集した結果見事ＰＤＦ小説に変換されていました（泣）

しかしながらその結果、横書き表示で読むと字がごちゃごちゃとなり見にくいものとなりました……。横書きで読んでいらっしゃった方申し訳ありません。携帯でこの物語を見ていらっしゃる方は余計に読みづらくなったかもしれません。

ですが、縦書き表示だと多少は見やすいと思います。ですので、勝手ながらあらすじに縦書き読み推奨とさせていただきました。

縦書き読みを推奨することによって、読者様が離れるかもしれませんが覚悟の上です。読者様が一人であろうともこの物語は完結させるつもりです。

長々となってしまいましたが、これからも『目を閉じればあなたに逢える』をよろしくお願いします。日々文章力・表現力を向上させていきたいと思います。意見感想お待ちしております。

【現】5．手紙（前編）

今日は朝からバケツをひっくり返したように雨が降っていた。当然クラブの練習は中止になり、各自自主練となった。そのことを知らなかった私は、いつものように早く学校についたため教室でぼーっとしていた。

――だれか連絡してくれればよかったのに。

思わずため息をついた。八時にもなっていなかったためか、教室には私をいれて三、四人しかいない。暇だったのでジュースを買いに教室を出た。

どの教室も人が少ないのか、話し声さえ聞こえてこない。いつも騒がしい学校が嘘のようだ。物静かな廊下を歩いている最中、にぎやかな声が階段の下のほうから聞こえてくる。

「……って誰が言ってたの聞いたんだけど」

聞き覚えのある声だ。

「マジで！めっちゃウケる！」

これも聞き覚えのある声だ。

「美加、声が大きいって！めっちゃ響いてるじゃん」

この大きな声も聞き覚えがある。

――この声の主は……もしかして、あの三人組かな。

階段を降りていくとその三人組にばったりと会った。私と会うと三人とも驚いた表情をした。

「うわぁ、木元さん！おはよー。めっちゃ早いね！今日もクラブがあるの、大変だねー」

髪をうっすらと茶髪に染め、肩まで伸びる髪に軽めのパーマをしている。スカートを短くし、ひざ上十センチぐらいまで上げている。私より二周りくらい大きなバストで、すこし制服がきつそうだ。グロスをつけ、ふっくらとした唇でにっこりと笑うこの女の子は、亀田冷子（めだれいこ）さん。色気がにじみ出ている人だが、クラスの女子の学級委

員をしている。
「おはよ。いや、さすがにこの雨だとないよ」
苦笑いを浮かべると、冷子さんの左隣にいた長髪でストレートパーマをかけた女の子が間髪入れずに口を開ける。
「マジでぇ。じゃあなんでこんなに早くいんの？」
この女の子は、山田美加（やまだみか）さん。
一重で口調が少しきつい印象があるため、私は怒られている感覚になるときがある。風紀委員をやっているのでなお怖い。
「……誰も連絡くれなかったの」
「うっわ、マジで。それ最悪じゃない」
三人組の中で一番声が低い、この声の主は江口未希（えぐちみき）さん。たれ目で少しぽっちゃりしている。いつも髪型はおだんご頭で、この江口さんと山田さんと一緒に風紀委員をしている。
「でも、クラブなくなってラッキーだねー。じゃ、またあとでねー」
かわいい笑顔で亀田さんが手を振った。
「うん。じゃね」
手を振り返すと、早々と階段を上り始めた。冷子さんの左右ぴったりに二人もついて行っている。この三人はいつも一緒だ。
私も、自販機へ再び歩み始める。
自販機はいつも昼食時間に行くベンチのすぐ近くに設置してある。教室からは少し離れた場所になってしまうが、良い時間潰しになる。目当てのジュースを買い、ペットボトル片手に教室へと戻っている最中、クラスの下駄箱でおかしな動きをしている男子を見つけた。何か下駄箱の中に紙を入れている。
――ラブレター？あれ、でもあそこってうちのクラスだよね……。
ま、いいか。
大して興味もなかったので、そのまま教室へと戻った。
戻ってみると、さっき会ったあの三人組はいなかった。代わりに、池口がぼーっと外の様子を眺めていた。時刻は八時十分。ちらほらと人が教室へと集まりだし、ざわざわとし始めていた。

「おはよ。やっぱり野球部も今日練習なかったんだね」
窓の手すりに寄りかかりうつぶせになっていた池口は、私の声に反応し顔だけこちらを向いた。
「おはよう。こんなどしゃぶりであるわけないだろ。筋トレだけで早く終わったよ」
そう言うと再び外に顔を向けた。特に池口と話すこともなかったので、自分の席へと戻ろうとした。
「なぁ、静山さんのノート、あれどういうことだよ」
思ってもない言葉に足を止めた。
――そういえば、こいつ香織のノート見てたんだった……。
あの驚いていた顔が浮かんだ。たまたま池口は見ていたのだ。すぐに振り返り、池口の隣に歩み寄った。
「……あんまり大きな声で言わないで。香織すっごく気にしてるんだから。誰がやったのかわからないけど、悪質な嫌がらせみたい。昨日そのせいで元気なかったんだから……」
小さな声で言うと、誰か聞いていなかったか周りを見渡した。幸いにも聞いている人はいなさそうだ。
「このことを誰にも言わないで。香織、みんなを信用していないみたいだから」
「……みんな？それって俺も含まれてんの？」
池口は寄りかかっていた手すりから身体を離し、自分の席へと座った。
「さぁ……とにかく、誰にも言わないで」
「わかったよ。誰にも言わない」
そう言うと池口は机に顔を伏せた。すると、丁度タイミングよく香織が教室へと入ってきた。見ると、手にかばんのほかに手紙を持っている。
香織が教室に入ると、教室にいたほとんどの人が香織に向かって声をかけた。香織は声をかけてきた一人一人に挨拶をし、変わりない笑顔を見せた。香織がいると空気が華やかに見える。普段、朝の

教室にいない私にとっては珍しい光景だった。
「あ。おはよ、らむ。今日はさすがのソフトボールも、この雨じゃ練習なかったのね」
「おはよ。うん、ないない。……ところでさ、その手に持ってる手紙はなに？」
香織は机の上にかばんを置くと、その手紙を私に渡してきた。
「これ、下駄箱の中に入ってたの。でも、昨日の今日だから開けづらくて」
下駄箱に手紙、というワードで、先ほどの下駄箱の怪しい動きをしていた男子をふと思い出した。
「さっきうちのクラスの下駄箱で、手紙を入れてた男子がいたよ。これ、その人からのラブレターじゃない？」
「え、そうなの？」
「ほらっ開けてみようよ」
手紙を香織へ返そうとしたが、香織は手を横に振りそれを拒否した。
「いいよ。らむ代わりに開けてみて見て」
「それじゃあ」
白く四角い手紙の封を切り、紙を取り出した。紙は二つに折りたたんであった。香織も気になる様子で、私が取り出した紙をじーっと見つめている。隣の池口は、いつの間にか顔を上げひじをついていた。
「人のラブレターなんてはじめて見るなぁ。ま、さっそく……」
頬が緩みつつもぺらっと紙を広げた。が、私の予想とは反した。
「なっなにこれ！」
ラブレターではなかった。その紙には大きな字で二言書いてあった。
『ばーか！死ね！』

驚きのあまり言葉が出てこなかった。なぜ香織にこんな手紙を出すのかという疑問とともに、罵られた香織を思うと悲しくなった。
「どうしたの……？なにが書かれてあったの？」
香織が不思議な顔をし、紙を覗き込もうとした。私は慌てて紙を手紙の中へしまいこんだ。
「な、なんでもないよ！……すっごくくだらない文章だったからさ、ちょっとびっくりしちゃった。こんな手紙、香織が見るまでもないよ」
「え。そうなの？……どうしたの、なんか目が潤んでるよ」
ショックのあまり涙がこみ上げてくる。必死に堪えた。堪えても言葉が出ない。どんな顔をすればいいのだろう。こんな言葉を書かれた手紙を知って、香織の前で笑顔を作れるわけがない。私は目を伏せ、なにか良い言葉を探そうとした。すると、隣に座っていた池口がいきなり立ち上がった。立ち上がったと思った途端、私が手に持っていた手紙を奪い取った。
「ちょ、ちょっと！」
奪い取った手紙からすぐさま紙を取り出し、文面を見た瞬間池口は驚きの表情を浮かべた。
「池口くーん。今日は野球部なかったんだねー。おはよー」
と、どこからともなく池口の後ろから亀田さんの声が聞こえた。にっこりと笑う亀田さんの横には、山田さんと江口さんもいる。
「あれー、その手紙なにー？もしかしてラブレター？」
「……なんでもねぇよ」
覗きこもうとした亀田さんだったが、池口がその紙をびりびりに破った。思わず私と香織があっと声を上げた。破った紙をぐしゃぐしゃに丸めた池口は、顔だけこちらを向けた。口元を緩め、落ち着いた声で言った。
「静山さん、ほんとくだらない文章だった。それに差出人が書いてない手紙なんて気持ち悪いでしょ。これ、俺が処分しておくよ」
そう言うと池口は教室を出て行った。私は池口が手紙を処分して

くれたことに内心ほっとした。
「香織ちゃん、おはよー。木元さんとはさっき会ったよねー」
「あ、おはよ。亀田さん」
その場に残っていた三人組が声をかけてきた。香織は笑顔で挨拶をした。
「さっきの手紙って、なんなのかなー。池口くんほんともてるよねー」
「あ、今の手紙は私の下駄箱の中に入ってたの。私は見てないんだけど、らむが言うにはくだらないことが書いてあったみたい」
「くだらないこと？ふーん。そっかー」
亀田さんはにっこりと笑顔を作った。横にいる山田さんと江口さんはじーっと私を見てきた。なぜか威圧感がある。
「ほんと静山さんてかわいいよねー。頭もいいし、スタイルもいいし、人気者だよねー」
「そんな……。亀田さんのほうがすっごく色っぽくて、学級委員までやっててすごいなぁて思うよ」
「ほんとーありがとー。池口くんも学級委員やってるから私もやろうかなぁって思っただけなんだけどねー」
ふふと笑う亀田さん。
「池口くんてかっこいいよねー。私アタックしちゃおうかと思ってるんだけど、静山さんどう思う？」
「え……。いいと思うけど」
「わぁうれしー。静山さんが応援してくれるなんてー。今度一緒に遊ぼうねー。じゃねー」
手を振り、去る三人組に私と香織は手を振った。
「……香織にしか話振ってくれなかったね。というか、池口のために学級委員やるとか……よくやる」
「亀田さんって池口君のこと好きなんだね」
外は相変わらず激しく雨が降り続いていた。

【現】6．手紙（後編）

雨脚は昼を過ぎても衰えず、昼食は教室で食べることにした。
「雨止む気配ないね。すっごい降ってる」
香織は窓から見える暗く黒い雲を恨めしそうに見つめている。どんよりとした雲は大粒の雨を降らせ、昼とは思えないほど世界を暗くしていた。
「この調子だとクラブはないなぁ。ま、別にいいんだけど」
教室には天気のせいもあるのか、人が多かった。いつも教室にいないため普段がどういう状況なのかわからなかったが、ざわざわと騒がしい。と、そこへ一人の生徒の声が響いた。
「静山さーん。お客さんがきてるよ！」
声がする方を見てみると、その生徒がこちらを向き手招きをしていた。
「誰だろう。ちょっと行ってくるね」
「あ、私も行く！」
今朝の手紙のことが過ぎり、香織のあとを追った。
行ってみると、ドアの向こうに眼鏡をかけた一人の男子が立っていた。見覚えがない人だった。
「あの……静山ですが、なんでしょうか」
香織の後ろからこっそり覗いた。ぽっちゃりとした体型に、分厚い眼鏡。小奇麗とは言いづらいボサボサの頭。……あまり良い印象とは言えない。どうやら香織もこの人のことを知らないようだった。その人は深呼吸をすると、堰を切ったようにしゃべりだした。
「ぼ、僕は三年一組の新拓政二（しんたくせいじ）と言います！初めまして！お、お食事中すいません。し、静山さんを初めて知ったのは学校成績の順位が発表されたときでした。こ、こう見えても僕は三年のトップなのですが、ふと二年のトップが女性であると知りました。す、少し気になって、先日このクラスを覗いたところ偶然静山さんを見かけま

した！ひ……ひ……一目ぼれです！付き合ってください！」
いきなりの告白に、私も含め教室にいたみんなが一斉に驚きの声を上げた。大声でしゃべったせいもあり、クラスのみんなに筒抜けだった。騒がしかった教室が余計に騒がしくなった。私も驚きのあまり声が出ない。会ってそうそういきなり告白というのは見たことがなかった。当の香織本人も、目をぱちくりさせ驚いている。
「あ、あの。急に言われても……」
「あ。す、すいません！一応今朝伺うといった内容の手紙を静山さんの下駄箱に入れたのですが……」
「えっ」
香織と私が同時に反応した。
――今朝……手紙……下駄箱……男。私が見た下駄箱で手紙を入れてたやつって、もしかしてこいつ？
そう思うと、香織の後ろからその男の前に出た。そいつはいきなり現れた私にびくっと驚いた表情をした。
「な、なんだよ。って君誰？」
「新拓さんでしたっけ。私、香織の友達の木元って言います」
そう言い、新拓の胸座を掴んだ。
「ちょっと、お聞きしたいことがあるので来て貰えますか？」
「ら、らむ。ちょっと乱暴なんじゃ……」
「ごめん、香織。ちょっと用事ができた。先にご飯食べてて！」
文句を言う新拓を半ば無理やり下駄箱のところへと連れて行った。行く最中も喚いていたが、気にしなかった。廊下を歩いているとちらちらと見られている気がした。が、視線など気にせず下駄箱へと着いた。外が大雨のせいか誰もいない。下駄箱の屋根のトタンに打ち付ける雨の激しい音が鳴り響く。
「……一体何なんだ！君、静山さんの友達かなんだか知らないけど失礼じゃないか！」
私から解放された新拓は顔を真っ赤にして怒鳴った。捕まれ乱れた制服をきちんと直している。

「どっちが失礼なのよ！私今朝見たのよ、新拓さんがうちのクラスの下駄箱で何かしていたのを！」
「み、見ていたのか」
新拓の顔がますます真っ赤になり、耳まで赤くなっていく。が、そんなのお構いなしに続けた。
「一体どういうつもりであんな手紙書いたのよ！なにが付き合ってください、よ！香織のこと馬鹿にしてんの！」
「な、中身まで見たのか。き、君最低だな！」
「どっちが最低よ！」
向こうは恥ずかしさで顔を真っ赤にし、私は怒りで目の前にいる新拓に殴りかかりそうだった。と、そのとき低く聞き覚えのある声が私を呼んだ。
「木元！……おまえ、でかい声出して何やってんだ」
見ると池口だった。呆れた顔をしながら歩み寄ってきた。
「今、あの手紙を出したやつを問い詰めてたのよ！」
「手紙……。静山さんのやつか」
じろりと池口が新拓を睨みつけた。新拓よりも池口の方が背が高く、上から見下ろしているような形になっている。見るからに殺気を出している池口に怖気づいたのか、新拓は一歩後ずさりをした。
「あんた、なんであんな手紙書いたんだ。確かあんた……三年の成績トップの人だろ。頭でっかちで常識がねぇのか」
怒鳴り声ではないものの、どこか人を威圧するような凄みのある言い方だった。私が見ても相当怒っているとわかる。
「……さっきから一体君たちは何なんだ！僕がラブレターを書いたことがそんなに失礼なことなのか！」
「失礼もなにも、ラブレターで『バーカ』『死ね』って書くやつがどこにいんだよ。それともあんたにとってこれが……」
「な、なんだそれは」
さっきまで大声を上げていた声が、力が抜けたような萎んだ声で言った。

「ぼ、僕はそんな内容の手紙は身に覚えないぞ。僕は今日の昼休憩に教室へ伺うっていう内容しか書いていない」
「……あんた、白を切るつもりなのか」
というと池口は新拓の胸座を掴んだ。力が相当入っているようで、制服のシャツに何本もの皺が入っていた。新拓の顔も苦痛で歪んでいた。
「ちょ、ちょっと！池口やりすぎだって。……書いていないってあんたの白い手紙は私もこいつも見てるのよ」
池口から解放された新拓は苦しそうに咳き込んだ。掴まれていたシャツはぐしゃぐしゃになっている。息を整えながらシャツを直す新拓は苦しそうに言った。
「ぼ……僕の手紙は、白じゃない。……青だ」
その言葉に私と池口は驚きを隠せなかった。なぜなら私たちが見た手紙は青ではなく、白の手紙だったからだ。一体どういうことなのか、目が泳ぎ考えがまとまらない。
「本当に青の手紙だったのか。白じゃないんだな！」
「ほ、本当だ！」
ずれていた眼鏡を直している。この真面目そうな新拓が嘘をついているようには見えない。別の手紙だとするなら、さっきの告白も頷ける。
「君たち、さっきの『バーカ』『死ね』っていう手紙、まさか静山さんにきたのか？それでこの僕を疑ったのか」
怒りなのか、握りこぶしがぷるぷると震えていた。
――私めちゃくちゃ失礼なことを言ってしまったのでは……。
はっと気づいた私だったが、今更言ったことを取り消せない。意を決し頭を深々と下げた。
「ご、ごめんなさい！私今朝新拓さんが下駄箱に手紙を入れているところを目撃して、それで、疑ってしまいました！本当に本当に……ごめんなさい！」
殴られるのも覚悟した。が、何も言ってこないし何もしてこない。

ちらっと顔を上げてみると、歯を食いしばっていた。明らかに怒っている。今にも殴りかかってきそうだ。目をつぶり、拳骨が落ちてきても痛くないように身構えた。が、拳骨も罵声もなく、ただ大きなため息が頭上から聞こえてきた。

「……もういいよ、顔を上げてくれ」

恐る恐る顔を上げると、頭をぐしゃぐしゃと掻いている。ぼさぼさだった髪が余計にぼさぼさになった。

「疑われたのは心外だが、事情を聞いてしまった以上怒るのも怒れないだろう。その事情が静山さんに関わることなら、なおのことだ。……木元さんだっけ、君も静山さんが心配で僕に疑いをかけたんだろ？だったら気にするな。だが、もう少し僕の話も聞いてほしかったな」

「すいませんでした！」

私は改めて頭を下げた。

「そ、それに告白してる最中を邪魔してしまって……」

そういうと新拓の顔が再び真っ赤になった。

「あ、いや、いきなり告白した僕も僕だったんだ。ま、また日を改めてするよ……じゃ、じゃあね」

逃げるように下駄箱から去っていった。黙って様子を見ていた池口が、その背中をじーっと見つめていた。

「ねぇ。新拓さんの手紙がすり替えられてたって考えるのが自然よね」

「え、あぁそうだな。……こうなると誰がやったのかますますわからなくなったな」

「いや……」

ふと頭の中に顔が浮かんだ。

「私、怪しい人知ってる」

「え。誰だよ、それ」

びっくりしたような顔で池口は私を見てきたが、私は答えなかった。黙って教室へと戻った。戻ると香織には手紙のことは言わずに、

なんとか説明をした。私の説明を素直に聞いてくれた香織は告白されたときの心境を話してくれた。少し顔を赤らめて説明する香織に思わず笑ってしまった。本当に素直で純粋な子だと思う。こんな香織をなぜ嫌がらせの対象にするのか、なんとなくだがわかっている。が、直接本人の口から聞きたい。しかし、その人であるという確信がなかった。

夕方になっても雨脚は弱まることはなく、結局クラブは休みとなった。私は寄り道することなくまっすぐ家に帰った。

家での用事を早々に済ませ、日が落ちていなかったがベッドに潜り込んだ。

『手伝います』

目を閉じると、その言葉が蘇ってきた。本当に手伝うのか、どう手伝うのかわからなかったが、藁にもすがる思いで眠りについた。

【夢】7．不思議な力（前編）

あの感覚で目が覚めた。暗い空間、そしてベッドの上にはすやすやと眠る私。夢幻郷だ。夢幻郷だと確認できると、寝る前に机の上に置いたプリントがあるかどうか確認をした。置いたそのままの状況で夢幻郷の一部と化している。

――よし、あとは時人さんが来るのを待つだけ。

待ちきれずに開けておいた窓から顔を出した。すると、遠くの方から二つの灯りが近づいてくる。

「あれ？今日はお出迎えですか。いやぁ嬉しいです」

ふわふわと浮きながら、目の前に時人がやってきた。嬉しそうに笑っている。

「僕はてっきりまだ信用されていないのかと思ってました。でも、今は僕を待っていた、と考えてもよろしいですか？」

「うん。私、時人さんを待ってた。……ちょっと」

手招きをすると、なぜか不思議そうな表情でゆっくりと近づいてきた。

「どうしたんですか、今日は素直というかおとなしいというか……」

部屋の机の前で待っていると、時人も窓枠をまたぎ私の横へとやってきた。すると、さっそく私が用意したプリントに気づいた様子だった。

「お、学習されてますね。前、こんな紙はなかった。……この紙に何かあるんですか？」

「これ、私のクラスの住所録なの」

「住所録ですか。……なるほど、名前の横に住所が書いてあります。でもなぜ私にこれを？」

と、真面目な顔をした時人が私の目をじっと見た。横に並ぶと背の高さがありありと分かる。私よりも頭一つ高い身長で、私は顔を少し見上げる形になっていた。

「時人さん香織の犯人捜しのこと、覚えてる？私、その犯人の目星がついたの。でも、何の証拠もないし動機もあくまでも予想……。本当にその人が犯人なのか、どうやって調べればわかるのか少し悩んだ。でも、時人さんのことを思い出したの。時人さんが『手伝う』って言ってくれた言葉を思い出して、それでもしかしたらって……」

私の考えを探るように、時人は目を逸らすことなく話を聞いていた。

「だから、お願いします。手伝ってください」

いつも笑っている印象のあった時人が、ずっと笑いもせず真面目な顔をして見てくるのでなぜか恥ずかしい。しかし、今恥ずかしいからと目を逸らすと冗談だと思われる気がした。負けじと私も目を逸らさなかった。

そんな風に時人の目を見ていると、いきなり時人がふっと笑った。思わず顔の力が抜けた。

「……そんなに睨まないでください。私は来夢さんを疑っているわけじゃありませんから」

といつものように笑顔になった。口に手を添えくすくすと笑っている。

――私、そんな睨んでいるつもりなかったんだけど……。

目をぱちくりさせている私を見ると、なおさら時人は笑った。真剣な態度を馬鹿にされたような気分になり、カチンときた。

「そんなに笑わなくてもいいんじゃないの！どうなの、手伝うって言葉は嘘なの。はっきりしなさいよ！」

「お、いつもの来夢さんだ」

というと、笑うのをやめ、時人は微笑んだ。

「すいません、決して馬鹿にしたつもりはないです。ただ、あのままの来夢さんで事を進めてしまうと、ずっと何かを背負ったような感じになってしまうのではと思ったものですから」

そういうと時人は再びプリントに目を落とした。

「それで、来夢さんが考える犯人とは、この中のどの方でしょうか

？」
「え、それじゃあ、手伝ってくれるの？」
嬉しさのあまり上擦った声になってしまった。そんな私の声にくすっと笑った時人だったが、またいつもの顔へとなった。
「もちろんですとも。初めに言いましたでしょう、私はあなたの敵ではない、と。信用してください」
「あ、ありがとう！」
笑顔でお礼を言った。ほかに方法を思いつかなかったので本当に嬉しかった。ここでその方法が見つかるのかどうかはわからないが、この独特の雰囲気がそうさせてくれそうだった。
「……やっと笑ってくれましたね。私も来夢さんの笑顔が見れて嬉しいです」
からかうような笑顔でもなく、かと言って真面目な顔でもなく、まるで少年が笑うかのような嬉しそうな表情だった。思わぬ表情に少し見とれてしまったが、すぐ正気に戻った。
「……あ、えっと。私が犯人だと思っているのはこいつ」
私はその名前を指差した。時人はその住所を指で追いつつ確認をした。
「……わかりました。さっそくこの住所へ向かいましょう」

時人はまっすぐ窓のほうへ足早に向かった。私もその後ろをついていく。窓の前に行くと時人は窓枠に足をかけた。
「では行きましょう。あの住所ならすぐに行けます」
「わかった。よろしくね」
私は見送ろうと思った。しかし、私の思いとは裏腹に、時人は左手を私の目の前に差し伸べてきた。
「来夢さんも一緒に行くんですよ。さぁ捕まってください」
にっこりと笑う時人。冗談かと思ったが、私が捕まるまで待っている。
「……もしかして怖いですか？」

「ちょ、ちょっと本当に私も行くの？私この部屋から出られないわよ。ドアは閉まって開かないし、ここから出たら真っ逆さまじゃない」
「確かにドアは開かないですからここから出るしかないですね。ま、行きましょう」
そう言うと、私の手首を掴んだ。無理やりにでもここから出るらしい。が、私は抵抗するように時人の手を振り解こうとした。足を踏ん張り力を入れた。
「い、いやだ！落ちたくない！」
「全くもう。私を信用してくださいって。ほら、行きますよ」
と、踏ん張っていた足元だったがいきなりすべすべと滑るような感覚となった。思わずバランスが崩れると、それを狙ったかのように時人が私を引っ張り上げた。と、同時に私の身体は窓の外へと出てしまった。あっと思った瞬間、ぼよんと弾力のあるクッションのようなものが私を受け止めた。
「私は飛べますのでいいんですが、来夢さんには“雲”を用意しました。筋斗雲みたいでしょ」
声も出ない私を後目に、自慢するかのようにこにこと笑う時人が隣でふわふわと浮いていた。

遅くも早くもないスピードで、私を乗せた雲は進んでいく。その横を泳ぐかのように、時人が並んで進んでいた。
「そういえば、来夢さんは初めて部屋から出ましたよね。どうですか、見慣れた街は」
畳一枚分の広さの雲から、ゆっくりと下を覗いてみる。真っ暗だ。現実の夜だと暗いとは感じないのにそう感じたのは、電灯が一つも灯っていないためだった。それにしても静かだ。今まではこの世界に入ると狭い部屋でしゃべっていたので自分の声が跳ね返っていた。しかし、今は外だ。隣にいる時人の声でさえ、響くことなくすぐに消される感じがする。

「……本当、変な世界。この街もそうだけど、時人さんあなたも相当変な人」
「え、私ですか？」
意外そうな顔をして、自分を指差した。私は時人のほうに向き直り、正座をした。
「……昨日聞きそびれたから今聞くけど、時人さんって何者なの？」
強い口調で言うと、困ったように苦笑いを浮かべた。言うか言うまいか相当悩んでいる様子で、なかなか口を開かない。しかし、このままはぐらかされるわけにはいかない。
「大体おかしいわよ。現実と同じ造りとか言いながら、こんな雲あるわけないじゃない。こんな雲があったら、今頃大ブームよ。こんな雲どこから持ってきたの。それに、この世界も本当におかしい。夢で寝るとみんな来るのなら、どうしてこんなにも静かなわけ？私みたいなやつ、一人ぐらいいるんじゃないの？……この世界のことも時人さんのことも、全部説明して！じゃないと、私、時人さんのこと信用しきれない！」
黙って私の話を聞いていた。私のことをじーっと見たあと、ため息を漏らした。
「……そうですね。名前だけ聞かされて、信用しろというのはさすがに無理があります。説明しましょう」
「観念したのね」
思わず顔の頬が緩んだが、時人は顔を軽く横に振った。
「……全てを説明するのためには時間がなさ過ぎます。ですので、来夢さんがお選びください。私がどういう者なのか知りたいのか、この世界全体のことが知りたいのかを」
「そう出たか……。ま、いいか。寝たら嫌でもこの夢幻郷に来ることができるしね。じゃあね……どうして浮くことができるのか知りたいから、時人さんについて教えて」
「私についてですね。わかりました。驚きすぎて雲から落ちないでくださいね」

と言うと、いつものにっこりとした顔になった。落ちるもんか、と言い返すように深く頷いて見せた。
ふと気になり、ちらりと後ろを見てみた。私の家は小さくなり、見えるか見えないかの距離まで進んでいる。
「まず、どうして浮くことができるのかと言いますと、私はこの夢幻郷の住人だからです」
「じゅ、住人？」
と、さらりと言った時人の声に再び視線が戻った。
「住人って……まさかこの世界に住んでいるでも言いたいの？」
「はは。字の通り、私はここに住んでいるんですよ」
ここは夢幻郷のことだ。しかし、先ほどから進んでいるが街の様子は一向に変わらず静まり返っている。街灯もなく、音もなく、ただ静かに建物が立ち並ぶ。私の様子を汲み取ったかのように、時人は続けて説明を始めた。
「前にも言いましたが、現実の物はこの世界では一切動かすことができません。物として存在はしていますが、この世界ではあくまで存在だけでその意味を成さないです。目の前に食べ物があったとしてもそれは只の飾り、というわけです。じゃあどうすればいいか。簡単です。私が創造すればいいんです」
と言うと右手の人差し指と中指をおでこにあて、何かを念じるかのように動きを止めた。数秒たったとき、急に目を開けその二本の指を私が乗っている雲の前へと向けた。すると、その指の先端から白い光が伸び、その光が当たっている雲の上で白い光の球ができていく。バレーボールほどの大きさになったところで、時人は伸ばしていた二本の指を丸め、握りこぶしを作った。すると、目の前の光の球は徐々に小さくなっていき、その中からなにかが出てきた。
「えぇ！……これ、ケーキじゃない！どうして？どうやって出したの！」
その光の球から出てきたのは、イチゴのショートケーキで、ご丁寧に皿の上にある。そのケーキはなぜか、はっきりと見えた。まる

でケーキから淡い光が発しているように見える。本物なのかどうか確かめるため、そっとクリームに指を伸ばした。ケーキは硬い感触ではなく、生クリームがふわっと指へと乗っかった。
「どうぞ、召し上がってください。毒など入っていませんから」
まじまじと見ていた私は、その言葉を信じ、その指をなめてみた。
「……甘い。こ、これケーキの生クリームだ」
「全部召し上がってください。食べながらでも結構ですので、ひとまず進みましょう」
再び雲と時人が前へと進みだした。

ケーキを出した時人は、その後フォークも同じやり方で作り上げた。フォークもどことなく光を発していた。
「先ほどのように、食べ物、飲み物を創造し作り上げ、食べます。……どうですか、お味は」
「……おいしいよ」
その言葉に満足そうににっこりと笑った。
「味も全て私好みにしてあります。現実の物にはなにもすることができませんが、私は自分の思い描く通りにいろいろな物を創造し作り上げることが可能なのです。今、来夢さんが乗っていらっしゃる雲もそうですし、先ほどの油も私が行いました」
「油？」
残り一口のケーキを乗せたフォークを止めた。
「はい。来夢さんを部屋から出すときに、足を滑らせて引き上げました。びっくりされたでしょう。すいませんでした」
本当に謝る気があるのかないのか、笑顔のまま時人は言った。
「物だけには限らず、この夢幻郷では私はいろんなことができます。だから浮くこともできるんです。わかっていただけました？」
「わかるもなにも、目の当たりにしてるんだから信じるしかないよね……。夢幻郷の住人って時人さんのほかにいないの？」
聞こえていない振りをしているのか、きょろきょろと周りを見渡

し始めた。
「ちょっと！無視？」
「……残念ですが、着きました。ですが、私のことについては説明をしましたよ。……あの家です。行きましょう」
指をぱちんと鳴らすと、私が持っていたフォークと皿が跡形もなく消えてなくなった。突然のことで驚く私を見て、時人はまた、くすっと声を漏らしていた。少しずつ高度を下げていき、その家の玄関の前に降りた。一軒立ての家で、表札には亀田と書かれている。

【夢】7．不思議な力（前編）（後書き）

ここまでお読みいただきましてありがとうございます。よろしければ、ここまでの感想でも結構ですので、メッセージをお願いいたします。作者の励みになります（ノДT）

毎日更新しようと思っていましたが、そうすると推敲がきちんとできていないように思えてきました……。
もし、おかしな表現があったり、誤字脱字がありましたらどんどんお知らせください。直していきたいと思います。

どうか今後もお付き合いのほどよろしくお願いします。

【夢】8．不思議な力（後編）

塀に囲まれた一戸建ての家、塀には花が植えられきれいにガーデニングされていた。新築のような小奇麗で洒落たデザインの家に、少しうっとりとした。

「さて、どこか開いていないか探しましょう。小さな隙間でも結構ですので、あれば教えてください。私は右回りで行きますので、来夢さんは左回りでお願いしますね」

「うん、わかった」

そう言うと、それぞれ逆方向で家の周りを進みだした。暗い中、足元に気をつけながらゆっくり進んでいく。小さな石ころや草は、現実では踏んだり蹴ったりできるが、この夢幻郷ではそれができない。まるでコンクリートの造形のようだ。また、隙間を探すのも一苦労だ。夜のように暗いと言っても、現実ならば街灯なり電化製品の明かりなど小さいながらも光を発するものがあった。しかし、この夢幻郷はそれがまるでない。街の中のはずなのに、山の中に入っているような気分だった。

と、庭のようなところに来た。窓ガラスがあるが、やはりちゃんと閉まっていた。中を覗き込んだが、手前にあるものしか見えず奥が全く見えない。仕方ないので手前で見える範囲のもので目を凝らしてみてみた。

――薄型テレビ……テーブルに椅子……本棚……暖炉……。暖炉？

はっと気づき、窓ガラスの斜め上を見た。暖炉があるということは、その排気を出す煙突があるはずだ。

「あった！時人さん、こっちきて！」

大声で叫ぶも響くこともなく、すぐに静けさにかき消された。声が届いたかどうか不安だったが、時人は上からやってきた。

「ありましたか。あちらには隙間と呼べるものがなくてどうしようかと思ってましたよ」

ふわっと着地した。私はそれを確認すると、その煙突のある窓ガラスの斜め上を指差した。
「ほらっあれ。中に暖炉あって、それと繋がってるみたいなの」
「なるほど。確かに隙間と言えば隙間ですが……。正しくは筒ですね」
確かにその煙突は、大きいものではなく空気を出すための筒状のものだった。ごまかす様に苦笑いを浮かべた。
「ほ、ほかに見当たらなくてさ。でも、あれは間違いなくこの家の中に通じてるよ。……でも入りようがないね」
その筒はソフトボールほどの直径しかなかった。どうやっても無理だ。考え込み黙っていると、時人がにっこりと笑った。
「来夢さん、私は入れないとは言っていませんよ。言ったでしょう、私の思い通りにできると」
「そりゃ確かにさっき言ってたけど、現実の物は動かすことはできないんでしょ？一体……」
「こうですよ」
そう言うと、先ほどと同じように右手の人差し指と中指から光を出し、その光を私に当ててきた。
「ちょ、ちょっと！何するのよ！」
目の前が光によって真っ白になる。痛くも痒くも感じなかったが、目の前が光のせいで何も見えない。
と、次第に光が薄くなってきた。目の前に暗い世界が見えてきたが、先ほどとは風景が異なっていた。
「え……ここどこ？」
先ほどまで足の裏には芝のちくちくとした感触があったが、それを感じない。庭の広いスペースだったはずなのに、見えた世界は右も左も壁に覆われていた。目の前には真っ暗で先が見えない道が続いている。
「来夢さん、そこは先ほどの筒の中です。安心してください」
どこからともなく時人の声が聞こえてきた。私の周りの光は、白

く発光はしていなかったが私を包むように覆っていた。声はその光から聞こえるようだ。
「来夢さんをそこへ運ばせていただきました。お気づきになっていないでしょうが、今来夢さんの身体はあの筒の直径に納まるほどの大きさになっています」
「えぇ！……なんで！」
「大丈夫です。何かあったらすぐに助けますから、その筒を通って中に入ってくれませんか？そうするしか方法がなくて……」
この光がどうやら庭にいる時人との通信手段になっているのだろう。近くに時人はいない。本当にあの筒の中らしい。進めと言われても、本当にすぐ先が見えないほどの暗さ。お化けなどの類は信じてはいないが気味が悪い。
「……ふふ、来夢さん相当怖がってますね」
と、くすくすと笑う時人の声が聞こえた。
「来夢さん、私一番最初に約束をしましたよ？……痛めつけるようなことはない、と。来夢さんを包んでいる光は私から伸びているものです。絶対にお守りします。……何度も言ってしつこいかもしれませんが、私を信じてください」
そういえば、時人は会ったときから、信用しろだの信じろだの言い続けている。いい加減信じてもいいかもしれない。
「……だ、誰も怖がってなんかないわよ！」
強がって言ってみたものの、時人のくすっと笑った音が聞こえてきた。
進んでいくが、本当に真っ暗でまっすぐ歩けているのかどうかさえ怪しく感じられる。ほんの少しの時間なのだろうが、長い距離を歩いた気がした。排気を出すための筒ならば、暖炉からまっすぐ伸びているはずだ。それを逆から行っているのだから道がなくなるはず、と考えた。もしかしたら、道がないのを知らずに落ちるかもしれない。そう思うと、足を止めたくなる。するとその時、考えていたことが現実となった。

「きゃあぁぁ！」
身体が重力に逆らうことなく落ちていく。足を踏み出したがそこに道がなかったのだ。考えていた通りになってしまった。
――もうだめだ！
目を瞑り、死を悟った。
が、急に落ちる感覚がなくなった。ちらりと片目を開けてみると、光が先ほどのように白い光を発光させていた。
「このままじっとしていてくださいね。着地させますので」
落ち着いた時人の声が聞こえてきた。ほっと胸をなでおろした。
そのまま動かずにいると、足が地面についた。そのまま暖炉から出ると、先ほど外から見た部屋へと来た。窓ガラスの外を見てみると、時人が右手から光を出しながらこちらを向いていた。
「無事に進入できましたね。では、私もそちらへ行きます」
そう言うと、私の周りを覆っていた光がまた強い白い光へと変化した。また真っ白で何も見えない状態になったかと思うと、すぐ隣で時人の声がした。
「……ふう、進入成功しましたね。あの人の部屋はどこでしょうねぇ」
光がふっと消えたかと思うと、すぐ隣に時人がいた。しかも、身体は元通りに戻っていた。しかし、時人自身は何事もなかったかのように、きょろきょろと部屋を見渡している。
「な、なんでいきなりここにいるのよ！さっきあそこにいたじゃない！」
「え。あぁすいません、驚かせてしまいましたね。……現実の物は変化させることはできませんが、それ以外のものは自由に創造できるんです」
と、自慢げににっこりと笑った。
「……まさか、私の身体を小さくすることもできるし、時人さん自身の身体も変化させることができるってこと？」
半信半疑で浮かんだ答えを口に出してみた。しかし、時人はその

答えを待っていたかのように一瞬驚いた顔をした。
「おぉ。そうです。察しがいいですね。……さて、納得していただけたところで、亀田冷子さんの部屋を探しましょう」
満足そうな笑顔で部屋の中を進みだした。

小奇麗な家の中は、やはり整った間取りだった。暖炉があった部屋はダイニングキッチンで、私の家よりも広い。一階を探したが、亀田さんはいなかった。そこで二階へ行くことにした。
「……どうしてこの方が怪しいと思われたんですか？」
階段を上りながら、前を歩く時人が口を開いた。
「先ほどの住所録はそれなりの人数でした。その中からこの方が怪しいと思った理由が少々気になりまして……」
顔は見えないが、申し訳なさそうな声だった。
「実はまた香織に嫌がらせがあったの。たまたま早く来ていたんだけど、その朝偶然亀田さんに会ったのよ……。それで、あとから香織に聞いた話だと、いつもはもっと遅い時間に来ているってことわかって……。なのに、その嫌がらせがあった日はすっごい早い時間に来てた。それに、いきなり香織に恋愛の相談をするし、なんか引っかかるのよね。あまりに偶然すぎるというか……ま、本当私が単に怪しいって思ってるだけなんだどね」
時人は階段を上りきると、すぐ目の前にある部屋へと入った。私もその後に続き部屋へと入った。
その部屋は女の子らしい部屋だった。部屋に入ってすぐ正面には大きなクローゼットが並び、その横には大きな全身鏡が置かれている。少し部屋の中に進むと、奥にはきちんと整理された机とすぐ横には本棚がある。そして、机の向かい側にはベッドがあった。そのベッドに近づいて寝ている人物を確認した。
「……亀田さんだ。間違いないよ」
布団をすっぽりとかぶり、すやすやと眠っている。
「わかりました。……私は理由はどうあれ、苦しんでいるお友達の

ため、行動に移す来夢さんは素晴らしいと思います。それに、ここは夢幻郷。現実で疑いをかけることはあまり良くないですが、亀田冷子さんに疑いをかけたと知っているのは私だけです。気にせず調べましょう」

にっこりと笑う時人に、私はうなづいた。

しかし、いざ調べようと思っても、物をどかすことは不可能だ。私はひとまず部屋を観察した。整理されている机の上にはいくつか写真立てが飾ってあった。学校行事の時の写真や、クラスの集合写真とみんなが写っている写真ばかりだ。ふと、ノートから少しだけ出ている写真を発見した。暗い中、目を凝らしてみてみるとユニフォーム姿のようだった。

――これ、野球部のユニフォームだ。……まさか、池口？

顔の部分が丁度隠れており、確認ができない。が、胸のところに書かれている名前が池口とあった。

「なにかありましたか？」

振り返ってみるとベッドの横で時人は立膝をついていた。

「うん、まぁ一応……ね。そっちは？」

何をしているのかと思い、近づいていった。見ると、時人は亀田さんの顔の上に右手をかざし、今にも触れようとしていた。

「なんかするの？」

「えぇ。……あ、そうだ。少し真面目な話をします」

そういうとその手を引っ込め、真面目な顔つきで私を見てきた。

「前に来夢さん自身に触れると現実の世界に戻ることは説明しました。しかし、絶対に他人には触れないでください」

「どうして？」

時人は、珍しく強い口調で話を続けた。

「簡単に言いますと、一生元の世界に戻れなくなるからです」

「え、戻れないって……」

「自身の身体に触れれば、そのまま意識は元の身体へと戻ります。しかし、他人に触ってしまうと、その意識はその人の夢の中をさま

よい続け、この夢幻郷にさえ戻れなくなります。戻れなくなった意識は現実の世界の身体にも悪影響を与えます。ですから、絶対に触れないでください」

はっきりと言わなかったが、悪影響という言葉に恐怖を覚えた。なにより、いつもにこにこしている時人が、真剣な表情でにこりともしない。それほどの悪影響なのだろう。しかし、そう言った時人だったが、再び亀田さんの顔の上に右手をかざし、そのままゆっくりと触れようとしていた。思わず、時人の肩を掴んだ。

「ちょ、ちょっと！今、触れたら悪影響があるって言ったじゃない。なんで触ろうとするの」

こっちを向いた時人は、いつものようににっこりと笑った。

「はは、私は大丈夫ですからご安心ください。住人である私は他人の夢を覗くことが可能なんです」

「夢を……覗く？でも、覗いてなにがわかるのよ」

「そうですね……。その人の周りで起こったことや、その人がどんな人かもわかります。……何より現実の世界のことがわかることですかね」

最後の言葉に、なにか寂しさを感じた。いつもならはきはきとしゃべる時人だが、言葉が消えてしまいそうなほど小さな声だった。その言葉を聞いて、私の中に新たな疑問が浮かんだ。

「あのさ……少し聞いてもいい？」

「はい、何でしょうか？」

「時人さんにはなんでもできる能力があるってことは十分にわかったんだけど、時人さんも今、夢を見ている状態だからこの夢幻郷にいるんだよね？」

そう言うと、にっこりとしていた顔が崩れ、真顔になった。少し気になりつつも続けた。

「……だってさ、今、現実の世界がわかることが一番いいみたいな言い方したからさ。どうなのかなぁって思って」

時人は黙ったまま、亀田さんのほうへ向き直すとそっと右手をお

でこに触れた。
　すると、時人の身体があちこちに空洞ができ始めた。それはどんどんと増えていき、見えないはずの時人の向こう側が見え始める。
「どうしたの、何が起こってるの！」
「夢を覗いてきます。すぐに終わりますの。……質問の答え……その……で」
　言葉が聞き取れなくなると、あっという間にその場から時人はいなくなった。一瞬の出来事で思わず腰が抜けた。
「どうなってるの……」
　と、数秒もたたないうちに、亀田さんのおでこから白い光が出てきた。その光は時人がいた場所に流れ、その光は時人がいた状態のままの姿へとなった。白い光がぱっと光ったと同時に中から時人が出てきた。時人はかざしていた右手をそっと下ろした。
「……戻りました。すぐだったでしょ？」
　腰を抜かし目をぱちくりさせている私をみて、くすっと笑った。
「亀田冷子さんは、来夢さんがおっしゃった通り、その手紙と関係があるようです。しかし、直接の犯人ではないですね」
「……え。そこまでわかるの！……！」
　突然声が出なくなった。口を一生懸命動かしても声が出てこない。そんな様子の私に、時人は残念そうな表情を浮かべた。
「どうやら時間のようですね。……犯人は亀田冷子さんの周りにいる方だと思われます」
　と、視界がぼやける中、時人の言葉が最後に聞こえた。

【夢】8．不思議な力（後編）（後書き）

更新が遅くなってしまって申し訳ありません。楽しみにしておられる方がいらっしゃるのか不明ですが、なるべく早めの更新を心がけていきたいと思います。

【現】9．友達と親友

今日は昨日と打って変わって、気持ちの良い天気になっていた。もちろん、朝練があるので朝早く学校へと行った。しかし、朝練をしている最中でも、時人の声が頭の中で繰り返し流れた。

『……犯人は亀田冷子さんの周りにいる方だと思われます』

集中できていない私の様子に、クラブのみんなが心配そうな顔で見ていた。

――周りの方……思い浮かぶのはあの二人しかいない。

白球を追いかけながら、私はある決心をした。

朝ぎりぎりに教室へ入ると、いつものように香織が席まで来てくれた。いつも通りの様子にほっとした。

「……そういえば、今日の数学の授業、小テストって言ってたよね。らむ勉強した？」

「えっ！全然してない……」

すっかり忘れていた。はっと掲示板に張り出されている授業表を見た。

「……四時限目！まだ、間に合う！」

慌てて数学のノートを取り出す私の横で、香織がすっとメモ用紙を差し出した。

「これ、小テストの範囲。……先生が言ってたまんまだけどね」

「うわぁ助かる！範囲も聞いてなかったからね……ありがとう」

丁度チャイムが鳴り、手を振り香織は席へと戻っていった。受け取ったメモを丹念に見ながら、ちらっと香織の席を見てみた。隣に座る池口が珍しく積極的に話しかけていた。香織も笑顔で返事をしている。

――香織の中で、池口はみんなの中には含まれてないのかな。

二人が楽しそうに話している様子に思わず笑みがこぼれ、再びノ

ートとメモに目を落とした。

休憩中にもノートを食い入るように見た。が、やはりなかなか覚えられなかった。四苦八苦していると、あっという間に四時限目の授業が始まった。始まったと同時に問題用紙が配られた。裏返し、問題を見てみたが一問目から頭が真っ白になりそうだ。

――うわぁ……マジやばいかも。こ、こうなれば……空白を埋めるしかない！数打ちゃ当たる！

ノートを見て少し覚えた内容と、自分の頭で考えられる内容を踏まえ、空白を埋めるようにペンを走らせた。運よく選択問題が多かったのが幸いだった。深く考えなかったためか、かなりの時間が余った。残り十五分もある。かと言って見直ししても、わからないのだから意味がない。問題用紙を全体的に見たあと、私は机に伏せた。

――あがいても無駄だわ。寝ちゃおうっと。

しばらくすると、机に伏せた感覚がなくなってきた。かりかりとみんながペンを走らせる音も遠のき、気づけば聞こえなくなっている。この感覚は、夢幻郷にいるときと一緒だ。暑くもなく寒くもなく、無音で人の気配がしない。

――学校で寝ても夢幻郷に入ってしまうのかな。

机の伏せた状態のまま、身体を動かさず目も開けなかった。すると、隣に人の気配がする。

「……テストで寝るということは、自信があるということですか？」

くすっと笑う声が聞こえる。この声は……。

「それと、犯人捜しは無理をしないでください」

時人の声だ。起き上がり、声をかけようと思ったその時、急に現実に引き戻された。

「……じゃあ後ろから前に集めて！来週返すからな」

目が覚めると、先生の低く大きな声とともにチャイムの音が教室

に響いていた。チャイムの音と同時に教室がざわざわとしている。後ろの席から回ってきた問題用紙を慌てて受け取り、前の席へと渡した。プリントが集まったのを確認した先生は、号令をかけ、授業は終わった。四時限目のあとは昼休憩なので、一気にがやがやと騒がしくなった。席を立つ人、弁当を出す人とさまざまである。

「らむ！寝てたようだけど、問題できたの？」

財布を持った香織が私の席までやってきた。

「ほとんど勘でやったよ……」

「やっぱり……。ま、まぁどうにかなるって。小テストのことなんて忘れてお昼食べに行こう」

そう言いながら、香織は私が立ち上がるのを待っている。しかし、私は席を立たなかった。時人の言葉を信じるなら、亀田さんに聞きたいことがあった。この昼休みにどうしても亀田さんは犯人ではなくても関係がある人なのだ。必ず事情を知っている。

考え込む私を不信に思ってか、香織が腰を曲げ私の顔を覗いてきた。

「どうしたの、怖い顔して。食べに行かないの？」

「あ、ごめん。ちょっと用事があるんだ。悪いんだけど、先に行っててくれないかな。用事が終わったらすぐ行くから」

「あ、そうなの？じゃあ先に行ってるからね」

「うん。ごめんね！」

拝むポーズをすると、笑いながら香織は首を振った。そして、香織は教室を出て行った。

香織が出て行ったのを確認し、教室の後ろを振り返った。いつも、亀田さんのグループは教室で食べている。今日も廊下側の一番後ろの席のところに集まり、弁当を広げていた。大きく息を吐き、その席へ歩み寄っていった。

「亀田さん、少し話があるんだけど今ちょっといいかな」

話をしていた三人は話をやめ、全員私の方を向いた。いきなり話しかけられたせいなのか、あまり快くないようでむっとした顔をし

ていた。
「いきなりどうしたの？なんか、木元さん怖い顔してるー話ってなにかなー」
亀田さんにだけ話そうかと思っていたが、席を離れる気配がない。左右隣にいる山田さんと江口さんは私が口を挟んでからずっと睨むように私を見ている。時人が言っていた周りの方というのはどう考えてもこの二人しかいない。いつもこの三人は一緒なのだ。
――だったら亀田さんにだけ聞かなくても、今この場で三人に聞いたほうが早いか。
「……昨日さ、香織の下駄箱に手紙が入ってたの知ってるよね」
「ん、あー昨日の朝のことだねー。それが何？」
「あの手紙、本当はとんでもないことが書いてあってさ。亀田さんたち何か知ってるんじゃないかなぁって、ちょっと聞いてみたかったんだ」
そう言うと、三人ともそれぞれ視線を合わし動揺しているように見えた。が、それは一瞬のことだった。
「ねぇ、それどういうつもりでうちらに言ってんの？」
長髪のストレートパーマを耳にかきあげながら、鋭い視線で睨みつけるように私を見てきたのは山田さんだ。足を組みなおし、ひじをつき、態度ががらりと変わった。まるで私を威圧するようだ。
「なんで私たちが知ってるって思うわけ？どういう意味？」
おだんご頭の低い声で、睨みつけているのは江口さんだ。その二人の間には、相変わらずにっこりと笑っている亀田さんがいる。
「……どうしてそんな話をするのかなー。私たち、なーんにも知らないよ？」
三人の態度にカチンときた。
見下されたような態度に白々しい言い方。冷静だった頭が急に熱くなってきた。声量も少し大きくなる。
「どうして、あの手紙が来た日に朝早くいたの？それにあの手紙で私たちが騒いでいるときに、どうしてタイミングよく来たの？あま

りにも偶然すぎるんじゃない」
「……木元さん、その言い方だとーまるで私たちのせいみたいに聞こえるんだけどー……。もしかしてー」
にっこりと笑っていた亀田さんの顔は、すっと真顔になり口の端を釣り上げあざ笑うかのようにニヤリと笑った。
「私たちを疑ってるわけ？」
三人の異様な雰囲気に、みんながこちらに注目し始めた。ひそひそと声も聞こえる。
普通の女の子だとこの威圧をかけてくる女子が三人も目の前にいたら、怖気づき首を横に振るのだろう。いや、そんなことを言うとまるで私が普通の女の子ではないようなので訂正する。私は、話をまともに聞かず力でねじ伏せようとするやつらが嫌いだ。疑っていることは間違いないが、なぜこんなにも凄みを利かせるのか理解できない。
この三人組はクラスの女子の中で中心となっているグループで、クラスの女子みんなは三人の意見、中でも亀田さんの意見には全てうなづく。私はそんな関係はうんざりだ。言いたいことも言えない友達が、本当の友達と言えるのか不思議でならない。香織と仲が良くなったのは、この気持ちを香織も持っていたからだ。互いに言いたいことを言い合って、時には助けを求めたり求めらたり、それに応えていくのが友達だ、と私は思う。歩みを揃えてまで争いを避け関係を築く友達など、薄っぺらい友情だ。
「うん。私、あなたたちじゃないかって思ってる」
私を睨むように見てくる三人に負けないくらい、胸を張って言った。クラス中が見ていた気がしたが、興奮していた頭はそれに気がつかなかった。

【夢】10．キャッチボール

寝たかと思うと、ベッドの横に立っている。真っ暗な部屋にベッドの上に寝ている私、夢幻郷だ。無音の空間に私のため息だけが漏れ、すぐさま消えていく。私はその場にしゃがみ込んだ。

結局あの後、あの三人を問い詰めることができなかった。ノートも手紙も知らないの一点張り。どうにか聞き出そうとしている最中、来ない私を心配してか、ひょっこり香織が教室に顔を出した。すると、一変、白々しい態度であの三人組は香織を同情した。

『ノートをずたずたにされるなんてひどい』『手紙で死ねって書かれるなんてかわいそう』などまるで教室に聞こえるような大声で言ったのだ。結果、香織が嫌がらせを受けたことがみんなに知れ渡ってしまった。みんなから同情される香織は根掘り葉掘り事情を聞かれてしまい、おまけに三人組はみんなに犯人探しをしようなどと呼びかけその中心となってしまった。三人組に疑いをかけた私はみんなから冷たい視線を浴び、昼以降声をかけてくる人は少なかった。

しかし、香織はいつも通りに私のそばにいてくれた。手紙のことを隠していたことを謝ると、微笑みながらありがとうと言ってくれた。私が頭にきて無理に問い詰めようとしたせいでクラス中にばれてしまったことも謝った。すると香織は『いつかばれることだったし、びくびくするのも悔しいじゃない』と笑っていた。一方で、犯人があの三人組の可能性が高いと伝えると、黙り込み悲しそうな表情をしていた。

結局私は犯人を捕まえるどころか、逆に疑っていることをクラス中に知らせてしまった。内密にしようと思っていた私自身がいたずらのことを広めてしまった、そう考えると再びため息が漏れた。

「元気ないですね」

と、開いた窓からひょっこり時人が顔を出してきた。

「まさか、犯人を問い詰めようとしたんですか？」

時人は窓枠をまたぐと、私の隣に座る。
「そのまさかよ」
私は大きくため息を漏らした。
「あらら。それで、犯人を捕まえることができたんですか？」
「……できてないわよ。むしろ、逆に問い詰めるのが難しくなったの」
「それは、やっかいなことになりましたね」
そういうと右手で左手の手首についている白く輝く腕輪を握り締めた。集中するかのように右手を見つめている。
「……前から思ってたんですが、どうして香織さんの犯人探しに躍起になっていらっしゃるんですか？二回いたずらされただけでしょう？」
「どうしてもこうしても、香織は親友だもん。……そりゃいじめってほどじゃないかもしれないけど、私の好きな人が目の前でそんなことされて黙ってみてるわけにはいかないよ。それに香織はみんなから好かれてるけど、なんかこう、私の前だと普通の子になるから」
「普通の子？それはどういうことですか」
私は思い出すように天井を見上げた。
「うーん……香織って頭も良くてスタイルも顔も良いから、みんなから頼りにされたりよく話しかけられたりしてるの。でも、私が見る限りあんまり嬉しそうに見えないのよ。なんか……作ってるというか。でも私の前だと力が抜けたみたいな顔で笑ったりしゃべったりしてくれるし、私の話も聞いてくれたり突っ込んでくれたり遠慮がないの。優等生って感じの子が、私の前だと普通の子になるとなんだか嬉しくってね。だから、助けたいって思ったわけ」
「なるほど、お互い信頼し合っているんですね」
握り締めていた右手を離すと、その手の平に光の球がついてきた。思わず私もそれに注目する。光の球はぱちんとはじけると、そこから白い腕輪が出てきた。が、時人がしている腕輪のように輝いてはいない。普通の白い腕輪のようだ。

「……それなに？」
そう聞くと、顔を私の方に向けにっこりと笑った。
「元気がなさそうだったので、来夢さんを楽しませてあげようと思いまして。ですので、これを複製したんです」
左手の腕輪をつんつんと指で示した。
すると、私の左腕を掴みその腕輪を私の手首にはめた。重くも冷たくも感じない腕輪だ。というよりしている感覚がしない。
「……これでなにが楽しくなるの？」
まじまじとその腕輪を見ていると、時人は立ち上がり、私の左手を握り窓に足をかけた。
「口で説明するより、実際にやったほうが早いです。さぁ立ってください」
少年のように目を輝かせ笑う時人に負け、私は立ち上がった。時人の色白の手が私の左手を握っている。その手は腕輪と同じように、冷たくも熱くも感じなかった。

外に出ると、昨晩のように雲の上に私は座った。時人は目の前でふわふわと浮いている。
「それでこの腕輪はなに？」
淡々とした口調で言った。相変わらず暗く人の気配がしない外は、声が全く響かない。目の前を浮いている時人はあぐらをかき、にこにことしている。
「それは思い描くものを形にすることができる腕輪です。どうぞやってみてください」
――思い描くものを形にする？
理解しがたいことだったが、時人はやってみろと言わんばかりに熱い視線で私を見てくる。私の反応を楽しみにしているかのようだ。半信半疑のままつけられた左手首の腕輪を見つめた。どうみても普通の白い腕輪にしか見えない。ひとまず目を閉じ、ソフトボールを想像した。

――両手に収まるぐらいの球体で、縫い目が入っててゴム生地の白い球……。
すると、左手首が温かく感じられた。目を開けて見てみると、腕輪が光り線がまっすぐ上へと伸びている。その光りの線は球体を描き、丁度ソフトボールの大きさを描いた。描いた途端、光りの線はなくなり腕輪の温もりも一気になくなった。すると、その描かれた絵が私の手元に落ちてきた。
「え……こ、これソフトボールじゃない！」
落ちてきた絵は立体的なボールとなっていた。手触りも普段触っているボールと一緒で重さまで忠実だった。縫い目まで入っている。が、違っていたのはそのボールは透明だということだった。水のように透けて私の手が見えている。
「ふふ、お分かりいただけました？もっといろいろなものを想像してみてください」
案の定笑われた。口に手を添えくすくすと笑っている。そんな時人を無視し、今度はグローブを想像してみた。
――頑丈な皮生地なんだけど、使いこなして柔らかくなったグローブ……。
今度は目を閉じなかった。私が想像するグローブが形になると、それを察知したように腕輪が温かくなった。と同時にまっすぐ上に一筋の光りが伸びていく。その光りの線はさっきと同じようにグローブの型を描き、それを描き終えるとすっと消え、温もりもなくなった。と同時にその描かれたグローブは私の手元に落ちてきた。
「うわ、ほ、本当にグローブだ……。水みたいに透けてる」
落ちてきたグローブは立体的になっていた。水のように空間が揺らめき、そこにグローブがあることがわかる。いつものように手を入れ、動かしてみると使いこなしたように柔らかい。透明のせいで左手が丸見えだが、グローブをしている感覚だ。私はもう一つグローブを作ってみた。
「……その腕輪気に入っていただけたようですね。それ、来夢さん

に差し上げます」
落ちてきたグローブをキャッチしながら、驚いた。
「え！いいの？……ありがとう！」
思わず頬が緩み、笑顔がこぼれる。すると、なぜか時人は目を丸くし、驚いた表情をした。
「え、どうしたの。……あぁグローブが二つあるから？一つは私ので、一つは時人さんのだよ。ほら、投げるよ！」
二つあったグローブの片方を時人に投げた。時人は慌ててグローブをキャッチした。
「……え、私のですか？一体何をするんですか」
「何って……キャッチボールに決まってるじゃん！楽しませてくれるんでしょ？」
いたずらっぽくにやりと笑って見せた。すると、独り言のようにつぶやいた。
「……なるほどそういう使い方もあるんですね」
「え？なに？」
時人は持っていたグローブを左手にはめた。
「いえ。では、キャッチボールをしましょう。……変なところに投げないでくださいね」
そう言うと、時人は私との間に少し距離をとった。
「ふん。私、ソフトボール部員なのよ。あぐらかいたままキャッチボールをしようなんて良い度胸ね。見てなさい！」
雲の上に立ち上がり、時人に向かって強くボールを投げた。予想外の速さだったのか、笑っていた時人は一変目を見開き驚いた。時人もあぐらから立ち上がり、といっても浮いているのだが、ボールを私に投げ返した。グローブから伝わるボールの感触もいつもと変わらない。
「……ねぇ時人さん。犯人のことなんだけど」
山なりのボールを時人へ投げた。
「はい、それがどうされました？」

時人も山なりでボールを投げ返してきた。
「亀田さんの周りの人って言ってたけど、二人じゃなかった？それともやっぱり……人数とかどんな人とかまではわからない？」
時人は私が投げたボールを慣れないグローブさばきでキャッチしている。
「二人でしたよ。顔も見えましたが、どう説明すればいいのか……」
「……一人はさ、一重で髪がさらさらした長髪の女の子じゃなかった？」
「おぉそうです」
「……で、もう一人は、ぽっちゃりした髪型がおだんごになった女の子じゃなかった？」
「おぉ当たりです」
時人が投げてくるボールは方向がばらばらで、私だけが一生懸命ボールを拾っている。
「……その二人が、ノートと手紙の実行犯だってことだよね」
「そうですね。亀田冷子さんはそれを知っていながら止めもしなかったようです」
ジャンプして取ったボールをそのままグローブの中に収めた。すぐに投げてこなくなったので、時人は首をかしげた。
「どうしました？」
「……それって全部夢を覗いてわかったことなんだよね」
「えぇ。そうです。……信用できませんか？」
急に時人の声のトーンが落ちた。私は慌てて首を横に振った。
「ううん、違う違う。信用してなかったら、問い詰めるなんてことしないよ。ただ、夢なんか覗いて普段何するのかなぁって思っただけ」
再びボールを時人に向かって、山なりに投げた。
「……そういえば、前の質問にお答えしていませんでしたね。夢を見ているからこの夢幻郷にいるのか、という内容でしたよね」
ボールを受け取った時人は、ボールを投げず微笑んだ。

「お答えしますと、夢を見ているからこの夢幻郷にいるのではなく、私は現実の世界よりこの夢幻郷を選んだからこの場に住人としているのです」
――現実の世界より夢幻郷を選んだ？だから住人？
どういうことか理解できず、思わず首をかしげた。時人はふわふわとこちらに近寄ってきた。
「人の夢は現実の様子を知ることのできる唯一の情報源なんです。ですから、夢を覗くんですよ」
私の目の前で止まると、再びあぐらをかき座る格好になった。
「ちょ、ちょっと待って。現実の世界より夢幻郷を選んだってどういう意味？」
「そうですね……意味はそのままなんですが……」
苦笑いを浮かべ、困ったように私から目を逸らした。
「私みたいにさ、現実で起こされることがあったら時人さんも起きてるんでしょ？違うの？」
「いえ……私は現実で刺激を与えられても起きません……住人ですから」
「もう、住人住人って全部住人だったらいいわけ？ちゃんと説明してよ！」
歯切れの悪いしゃべり方に、イライラし大きな声になった。しかし、時人はそれに動じない。ただ、落ち着いた声だった。
「……住人は私一人しかいません。現実から刺激があって起きないことも、夢を覗けることも、物を創造し形にできることも、全て住人になって得た能力なんです。……この夢幻郷において、住人である私は全て自由に行動できるんです」
そう言った時人は自由という言葉とは裏腹に、目線を落とし虚ろな目つきになった。表情もどことなく悲しげだった。
「……じゃあ、私がいない間は時人さん、ずっと一人なの？」
突然、はめていたグローブの感覚が急になくなった。思わず時人から視線をはずし、左手を見た。私が作ったボールとグローブはす

でに跡形もなくなっている。
再び顔を上げ、時人を見るといつものようににっこりと笑っていた。一瞬見た悲しげな表情はすでになかった。
「私のことは気になさらないでください。……犯人捕まるといいですね」
にっこりと笑う時人の顔がかすむ。口をぱくぱくとさせている私を見ると、時人はいつものように手を振った。

【現】11．疑いの目と信じてくれる人

一番濃密な一週間だったような気がする。気づけば今日はもう金曜日だ。

朝練や夕方のクラブは、香織のことや時人のことで集中できず、ここ一週間上の空でやっていた。練習に打ち込めなかった分を土日の練習で挽回しないといけないと思っていたが、朝見たテレビの天気予報は雨だった。クラブが休みになるかもしれない、そう思うとやっぱり嬉しくなった。

練習を終えると、いつものように急いで教室へと駆け込む。

教室へ入った瞬間、みんなの視線が一気に私に集まる。が、何事もなかったかのようにみんなそっぽを向いた。いつもと違う教室の雰囲気に疑問を感じながらも席へと座る。

「おはよ。らむ」

「あ。おはよ」

香織がすぐさま席へと来てくれた。すると、また視線を感じた。

「ね、ねぇ。なんか今日おかしくない？見られるというか、睨まれてるような気がするんだけど」

「……たぶん、亀田さんたちを疑ったからだと思うよ」

香織が軽く首を後ろに振った。見てみろと言っているようだ。香織の影に隠れつつ、ちらっと見てみるとこちらを見ているあの三人組がいた。

「……なに、逆恨みでもしてんの？」

「ねぇ、らむ。亀田さんが本当にノートと手紙をやった本人なの？」

小さな声で香織が言った。私も声を小にして答えた。

「うん。亀田さんが指示して、たぶんあの二人が実行したんだと思う」

「どうして？」

「亀田さん本当に池口のことが好きみたい。それで、隣に座る香織に嫉妬したんじゃないかな。……珍しく池口も話しかけてるみたいだしね」
肘で香織をどつくと、香織の頬が少し赤くなった。
「お、まんざらでもないようだねぇ。……ともかく、なにか証拠があればいたずらをした本人って認めるんだろうけど……」
ちらちらと視線を感じる。
「……でも、私も不思議なんだけど、どうして亀田さんたちだと思うの？」
不安げな顔で香織は私をじっと見た。正直なところ、なんと言えばいいのか迷った。
――夢に出てくるやつがそう言った？いやいや、余計不安にさせるじゃん……。
香織の肩をぽんぽんと軽く叩きながら私は小さな声で言った。
「……ま、ちゃんとした確信はあるよ、だから安心して。今その確信は何なのかは言えないけどね」
「だ、大丈夫？らむのこと信じてるけど……」
「まかせて。私も香織が味方でいてくれるなら心強いや」
お互いに、小さな声で笑いあった。と、チャイムが鳴るより早く担任が教室へと入ってきた。
「みんな、悪いんだが席についてくれないか」
いつもと違う雰囲気に、首をかしげながらもみんな席に座った。みんな揃ったのを確認すると、前後ろのドアを閉め、さっさと出席を取り出した。
全員の出席を確認すると、丁度チャイムが鳴った。すると、担任は出席簿を持って教室から出ようとしている。ドアに手をかけ振り向き一言言った。
「亀田、池口。一時限目が始まるまでの時間を使って、例のやつちゃんと話し合えよ」
「はい」

――例のやつ？
みんなも理解できないようで、ざわざわと話始めた。ただ、亀田さんだけはわかっているようで教卓の前に立った。それを確認すると、担任は教室から出て行った。ドアが閉まる音が教室に響くと、亀田さんは池口を呼んだ。
「池口くんも前に来てくれないかなー」
ぶりっこ声が教室に響いた。池口を見てみると机に伏せていた状態から顔だけ起こしている。だるそうな顔で、黙って席を立ち亀田さんの横に立った。
「何？なんか決めんの？」
どうやら池口も何をするのか知らないようだ。めんどくさそうにポケットに手を突っ込んで、突っ立っている。一方、亀田さんは普段は見せない悲しげな表情を浮かべ、言葉を選ぶように話始めた。
「……昨日、昼休憩に教室にいた人は知っているかもしれませんが……このクラスで嫌な思いをしている人がいます」
――昨日の昼休憩？……まさか。
一部知っている人がざわざわとし始めた。しかし、それを無視し亀田さんは続けて話し始めた。
「その人は、ノートに落書きをされた挙句ずたずたにされて、おまけにひどい言葉を書かれた手紙まで来たの。……みんなひどいと思わない？」
「誰がそんなことされたの？」
どこからともなく声が上がった。亀田さんは間を空けると、申し訳なさそうな顔をして言った。
「……香織ちゃん。静山さんです」
そう言うと、みんなが一斉に驚きの声を上げた。香織本人は顔を俯かせ、困った顔をしている。
「おい亀田、なんでこんなことわざわざみんなの前で言うんだよ。静山さんが頼んだのか？」
「ううん。でもーみんなが好きな香織ちゃんが困ってるんだよ？こ

こはみんなで協力して犯人を捜すほうが良いに決まってるじゃない。みんなそう思わない？」
眉間に皺を寄せ怪訝そうな顔をしている池口をよそに、香織の呼びかけにみんなが同意した。香織の近くの人たちが、香織に何かしら言っている。大方慰めているのだろう。騒がしいため聞こえないが、香織は困惑した顔でうなずいたり、首を横に振ったりしていた。すると、いつの間にか席を立っていた山田さんと江口さんが教卓の前に出てきた。
「じゃあみんな、一緒に犯人探ししようよ！ノートとか手紙とか、香織ちゃんの場所知ってなきゃできないから絶対クラスのやつだよ。今頃びびってんじゃないの？」
山田さんの鋭い視線がクラス中を巡ったあと、最後私で止まった。薄笑いを浮かべ、鼻で笑われたような気がした。
山田さんの言葉にクラスのみんなも乗せられたようで、近くの人に犯人なのかと冗談とも本気とも言えないような聞き出し始めた。何か異様な雰囲気だ。がやがやと騒がしい教室に、池口の声が響いた。
「おまえら……いい加減にしろ！」
池口の怒鳴り声は、一気に教室を静かにさせた。私も驚いたが、前にいる三人組も驚いた表情で池口を見ている。
「……おまえら、冗談半分で犯人探しするつもりなのか？静山さんは本当に傷ついてたんだぞ。わかってんの？」
落ち着いた声はクラスの熱を冷ましていく。いつもめんどくさそうにしているが、何か今日は違う。案外本当に香織に気があるのかもしれない。
「確かに席の位置とか下駄箱の位置とか、他のクラスのやつだとよほどのことがない限り知りようがない。だからこのクラスの奴の可能性が高い。だとしたら……」
池口は後ろの席のほうを見ている。おそらく、香織を見ているのだろう。目線を元に戻し、少し間を空けると再び叫んだ。

「……こんなくだらないことするんじゃねぇよ！もし次も何かやるようだったら、俺が絶対見つけて仕返してやるからな」
珍しく感情を露わにした池口に女子も男子も黙り込んだ。
「……俺が言いたいのはそれだけ」
前に立つ三人組も、悔しそうな表情で唇をかみ締めている。その様子を見ていると、顔を上げた山田さんと目が合った。すると、突然山田さんが私を指差した。
「……あんたでしょ！あんた、いっつも香織ちゃんの近くにいるじゃない。私たちに疑いかけて、本当は自分が犯人だから逃げ口作ったんじゃないの！」
みんなの視線が一気に私へと注がれる。いきなりのことで、口を半開きにしてしまった。
――私が犯人？何言ってんの？
しかし、亀田さんがすぐさまそれに同意した。
「そうだよー、昨日いきなり私たちを犯人扱いしてきたんだよー！木元さん良い人だと思ってたのに、ひっどいよねー」
まるで呪文を唱えたかのように、クラスの大半の人たちがそれに賛同し始めた。静まりかえっていた教室は鶴の一声で再びざわざわとし始める。聞こえてくる言葉はどれも私を犯人のように決め付けたかのようなものばかりだ。
「お前、静山さんのダチだろ？最低だな」
――なにこれ。
「私も昨日お昼に見たんだけど、冷子ちゃんたちをすっごい悪者みたいに決め付けてた」
「うっそ、信じらんないね」
――ちょっと……みんなどうしたの。
私の周りの人たちも冷たい視線で私を見てくる。犯人を見るかのように、軽蔑した目だ。こんな状況は初めてで言い返すことができない。教卓にいる三人を見てみると、にやにやと私を見て笑っている。腹が立つというよりも悔しさがこみ上げてきた。

「らむが……らむがするわけないよ！」
泣きそうな気分の中、透き通るような声が教室の中に響き渡った。声のするほうを振り返ると、泣きそうな顔をした香織が立っていた。
「……らむのこと悪く言わないで。らむはそんな子じゃない。それにもう私は平気だから……犯人捜しなんてやらなくてもいいから」
ざわついていた教室は香織の小さな言葉で再び静まり返った。俯く香織の顔は少し赤くなっている。が、沈黙が流れる教室に再びぶりっこ声が響いた。
「みんな香織ちゃんのことを心配してこんなことしてるのにーその言い方はひどくない？せっかくみんなが協力して犯人探ししてくれるって言ってくれたんだよー」
亀田さんが、ちらりと横にいる二人を見た。山田さんと江口さんは何か合図を受け取ったように笑った。すると、腕組みをする山田さんは笑いを堪えるように言った。
「え、もしかして、実は犯人知ってるんじゃないの？その犯人をかばいたいから、犯人探しをしなくていいってこと？」
間髪入れずに江口さんも続いた。
「うわぁそれって自作自演ってやつじゃね？マジ最低じゃん！」
教室が再びざわざわとし始める。どっちの言い分が正しいのか、みんな判断しかねているようだ。教卓の前に立つ三人は勝ち誇るかのように、頬を赤く染め俯いている香織を嘲笑っていた。香織はざわざわと騒がしい教室の中、冷たい視線の対象となっているのにも関わらず、黙ったまま立っている。
――なんなのよ。あいつら、何がしたいのよ。
私は思いっきり机を叩いた。バン、と大きな音が響くとみんな驚いたようにびくっとした。私は勢いそのままに立ち上がる。
「うるさい！大体、この話し合いは何がしたくてこんなことしてんのよ！香織を馬鹿にするためにわざわざ朝の時間使ってんの？」
前に立つ三人を思いっきり睨んだ。
「あんたら一体なにがしたいわけ？……犯人が私ですって？笑わせ

ないでよ！逆恨みもいいとこじゃない！何が犯人捜しよ、本当は香織のことなんて全然考えてないんでしょ？ただ良い人ぶりたいのが見え見えなのよ！みんなもみんなよ、香織が本当に自作自演すると思ってんの？なんで香織を信じてあげないのよ！」

すると、丁度チャイム鳴った。チャイムの鐘の音が異常によく聞こえた気がした。みんな私の顔を見ながら唖然とした表情をしている。

「……木元さんの考えはよーくわかったわ。私本当に香織ちゃんの助けになりたかったのにー……」

わざとらしくため息を漏らす亀田さんはそのまま席に戻った。後ろをついて歩く山田さんと江口さんも何も言わなかった。私を見ていたみんなも何も言わず、授業の準備を始めた。興奮していた頭が徐々に冷めていき、私は崩れるように席に座った。

「……がさつなおまえが、あんな手の込んだノートやら手紙できるわけないだろ。俺は……静山さんも、お前も、信じてるから」

私の横を通り過ぎながら、ぼそっと池口がつぶやいた。

はっとして振り返ると、池口は立ったままだった香織の肩をぽんと触ると座るように促している。すると、前のドアが開く音がした。静かになっている教室に不信に思ってか、首をかしげながら先生は入ってきた。

久しぶりに外のベンチでお昼を食べている気分だ。春のぽかぽか陽気で、気持ちが良い。丁度木の陰に入っているベンチは、風が吹くと葉がこすれる音が響き、熱くも冷たくもない風は心地よい空間を作ってくれる。

そんな中で昼食を食べている私と香織だが、朝の一件から疎外感を味わっている。

「……あいつら何がしたくてあんなことしたのかな。思い出すだけでも腹が立ってきた……」

「うん……」

朝以降、話しかけてくる人が全くいない。こちらから話しかけても聞こえない振りをし、その場からすぐ逃げていく。私だけならまだしも、香織まで無視されてしまっている。ただ香織の場合、上級生や下級生と幅広く話しかけられてくるのでその人たちからは声をかけられている。しかし、クラスの人たちは無視だ。

「みんな……私たちのこと無視してるよね。本当に私が自作自演だったって思ってるのかな……」

食欲がないのか、持っているカレーパンはまだ半分以上残っている。

「思ってないよ。きっと、亀田さんたちが裏で糸引いてるんだよ。……あくまで予想だけど」

思わずため息が漏れる。昨日まで普通に過ごしていた教室が別のクラスの教室へと変化したようだった。まるで私たちが見えないかのような態度。私一人がそんな態度を取られたらと思うとぞっとした。

「……でも、らむがいてくれてよかった。私だけ無視されてたらかなりショックだったかも」

「あ、今私も同じこと思った」

ふふ、と香織と笑った。すると、急にどもった声が聞こえた。

「し、静山さん！お、お食事中すいません」

聞き覚えのある声に顔を向けてみると、新拓がいつの間にか立っていた。分厚い眼鏡に相変わらずぼさぼさの頭。緊張なのか暑いのか、頬に汗が伝っている。

「……あ、えーっと」

「し、新拓です。お久しぶりです」

そういうと香織は思い出したように何度かうなずいた。どうやら忘れていたらしい。

告白したはずだったが、私が問い詰めたせいで記憶の薄いものになったのかもしれない。そう思うと新拓に申し訳ない気持ちになる。すると、新拓はポケットに手を突っ込み何かを取り出した。

「せ、先日は急に押しかけてしまってすいませんでした。あの、これ……そのお詫びと言ってはなんですが……」
そう言って差し出してきたものは、チケットだった。香織はそれを受け取り視線を落とした。私も気になり顔寄せて見てみた。
「……ドリームフィールドパーク入場チケット。……え、三枚もですか？」
綴りになったチケットは広げてみると三枚分あった。嬉しそうな顔をする香織に、顔を赤くしながら新拓はまたポケットから何かを取り出した。
「じ、実はぼ、僕、あの遊園地の会員になってて、フリーパスのチケット簡単に手に入るんです……。それで、あの、僕もチケットがあって……」
取り出したのは同じくドリームフィールドパークの入場チケットだ。赤くなっていた顔が更に耳まで赤く染まる。
「……あの、もしお暇であ、あれば……よかったら、その……一緒に行きませんか？」
しどろもどろながら、内容はデートの誘いだった。
――こ、こいつ……諦めてない。
そっと隣に座る香織を見てみると、表情変えずに持っているチケットを眺めている。少し間を空けるとにこっと笑った。
「そうですね、せっかくお誘いいただいたんですから行きましょうか。……それに人数多いほうが楽しいですよね」
「あ、あ、ありがとうございます！」
飛び跳ね喜んだ新拓だったが、すぐに正気に戻り動きを止めた。
「……人数が多いほうが？」
「えぇ。新拓さんと私とらむと……あと一人誰か誘って行きましょうね」
ふふ、と無邪気に笑う香織の顔は新拓にとって残酷だったのかもしれない。喜びから一転、肩を落としがっくりしている新拓に思わず吹きだしそうになった。しかし、朝の一件で下向きだった私たち

を笑わせてくれた新拓に、ほんの少しだけ感謝した。

クラブからの帰るとさっそく香織からメールが入っていた。どうやら放課後に新拓と話し合って明日と決まったらしい。あと一人分のチケットはあるが、香織は私が誘いたい人を誘えばいいと言ってくれた。お言葉に甘えてあいつにメールを送った。もちろん、香織が誘ったと付け加えた。……どんな展開になるのかものすごく楽しみだ。

ベッドの上に横になると、嫌でも朝のことを思い出す。

――でも……今は忘れよう。きっと休みが明けたらみんなわかってくれるよ。

初めて行くドリームフィールドパークを楽しみにしながら、私は眠りについた。

【現】１１．疑いの目と信じてくれる人（後書き）

お読みいただきましてありがとうございます。

本当は二つに分けようかと思ったのですがキリが悪くなったため一つにまとめました。長くなってしまって申し訳ありません。

あとずっと思っていたのですが、夢の中と現実の世界を行き来する話が続いていますが、分かりにくいでしょうか……？

一応題のところで書いていたりしているんですが……なにかありましたらご意見ください。お待ちしております。

【夢】12．約束

いい加減この夢幻郷にも慣れてきたかもしれない。ベッドの上に寝ている私を見てもさほど驚かなくなってきた。

今晩は、明日の天気予報が雨だったので、いつも開けている窓は閉めている。いつもこの窓から顔を覗かせてくる時人は一体どうするのだろう。来るのが当たり前になっている時人だが、今日は来るのだろうか。

――昨日見たあの表情……気になるなぁ。

閉まっている窓から外を覗いてみた。

するといきなり目の前に色白の顔が出てきた。びっくりして思わず尻餅をついた。

「うわぁ！……な、なによいきなり、びっくりしたじゃない！」

「……私も今のは驚きましたよ。こんばんわ、来夢さん」

窓の向こうから、にっこりと笑う時人。窓は閉まっているが、静か過ぎるため声は普通に聞こえる。時人は窓をコンコンとノックをするように叩くと、ため息を吐いた。

「今日は閉まってるじゃないですか。……また来夢さんをからかえると思っていたんですが……残念ですね」

「……ま、今日は諦めて。明日雨だから、窓開けてたら雨が部屋に入るもん」

「雨、ですか。……それはそうと今日は元気そうですね。よかったです」

時人は窓枠にひじをついて、微笑んだ。私はその場で体操座りをして、窓の向こうにいる時人を見上げた。

時人は会ってからというものよく笑う。馬鹿にするような笑い顔だったり、社交辞令のような笑い顔だったりいろいろな笑い顔を見せる。しかし、どれも本当の時人の笑い顔ではないような気がする。今微笑んでいる時人は一番素直な表情だと思っている。前に見せた

少年のような顔も私の心の中に強く残っている。
「……時人さんってさ、よく笑うよね」
「え、そうですか？ここの所毎日楽しいですからね」
そう言うとにっこりと笑った。
「本当、来夢さんをこの夢幻郷にお呼びしてよかったと思っています。来夢さんがいるだけでこうも夢幻郷の雰囲気が変わるとは思ってもいませんでしたから」
ふふ、と嬉しそうな顔をする。私は体操座りをしまま、窓向こうの時人に言った。
「ねぇ……話を蒸し返すようで悪いんだけど、やっぱり気になるから答えてくれない？」
「はい、なんでしょうか？」
時人はすっと真顔になると、ひじをつくのもやめた。じっと私を見つめてくる。
「ずっと……この夢幻郷で一人だったの？」
時人の表情は変わらない。ただ無言で私を見ている。
「それに、ずっと思ってたんだけどどうして私の名前とか知ってるの？それに今言った、夢幻郷に呼んでってどういうこと？」
私も時人が答えるまで見つめ続けた。すると、時人はふっと息を吐いた。
「……話を逸らそうと思いましたが、来夢さんには敵いません。……そんなに見つめられると恥ずかしくなります」
「え、あ、ごめん」
慌てふためく私を見て時人は再び笑った。
「今日は出かけることもできませんし、お話をしましょうか」

昨日もらった白い腕輪が左手についていることに気がつき、リビングにある椅子を思い描いた。すると、前と同じように水のように透明な椅子が描いたとおりに落ちてきた。私はその椅子を窓の手前に持っていき、腰をかけた。時人は私が座ったのを確認すると口を

開いた。
「まず、この夢幻郷に住人は私一人しかいません。ですから、ずっと私は一人です」
別段悲しそうな顔もせず、淡々と言った。さらに続けた。
「来夢さんのことは、失礼ながら夢を覗かせていただいたときに知りました。ですから……名前も、学校へ通っていることも知っていますよ」
にやりと笑った。なにか思わせぶりな言い方だ。
――他にもなんか知ってそうな言い方……。
「言っちゃ悪いけど、悪趣味ね」
時人は怒る様子もなく、ふふっと笑った。
「確かに悪趣味と言われれば悪趣味ですね。でも、ご心配なく。あくまで表面上だけのことだけですので、プライベートのことを隅々まで見てはいませんよ」
「そ、そうなの。……あ、ねぇ。どうして、現実より夢幻郷選んだの？」
そう言うと、時人は笑うのをやめ、腕組みをして考える格好となった。
「それが……思い出せないんですよね」
「はぁ？」
思わず大声になった。少し驚いたようで、時人は身体をのけぞった。
「いや、本当なんですよ。私、現実のことを思い出せなくなっているんです」
思い出すように、顔を見上げた。
「夢幻郷に来たときのことは昨日のように覚えています。……今私と同じような格好をしている人がいきなり私の前に現れました。その人は夢幻郷の素晴らしさを説き、私はその素晴らしさに感動しました。そしてある時、その人からこの腕輪と指輪をもらったんです」
時人は私に両手の甲を見せるように腕を出した。会ったときのま

ま、白く輝く腕輪を左手首に、白く輝く指輪を右手中指にしている。窓越しにそれらを見つめた。
「それきれいだよね……。あれ、その話だと他にも人がいたんじゃない。その人は今どこにいるの？」
少し間を空けた時人は、まっすぐ私を見た。言葉を選ぶようにゆっくりと言った。
「……わかりません。私は……それ以降会っていないんです」
「そうなんだ……。でも、いることはいるんだよね」
「えぇおそらく……」
考え込んでいるためか、思い出そうとしているためか、歯切れが悪い。
「……まぁ、一人きりながらも夢幻郷を満喫していた私だったんですが……少し寂しくなりまして。そこで、話し相手に来夢さんをこの夢幻郷に呼んだんですよ」
「ふーん……そうだったの。でもさ、寂しくなって話し相手がほしいなら住人なんてやめて現実に戻ればいいのに」
「そうですね……」
私の言葉に時人はため息をついた。なんとなく元気がないように見える。元気付ける意味を込めて、私は笑ってしゃべった。
「そうだよ、現実に戻ればいいじゃん。そしたら、私が夢見てる間だけじゃなくて、好きなときに会えるし話もできるよ。……戻ったら飛ぶことはできないけど、それなりに楽しいよ。人もたっくさんいるしね」
夢だけしか会えない時人。もし、現実に戻ってきて、香織に言ったらどんな反応をするだろう。時人はたくさんの人と動く乗り物を見てどんな反応をするのだろう。そんなことを考えると自然に頬が緩んだ。そんな様子を時人は微笑みながら見ている。
「こっちじゃ私ばっかりからかわれてるから、戻ったら私が時人さんを驚かせてあげるよ。それに、香織に時人さんのことを紹介したいなぁ……すっごいかわいい子なの。私よりスタイル良くて頭も良

くて……」
「へぇ、すごい方ですねぇ。才女のような方なんですね」
時人はひじをつき、私のおしゃべりに付き合うようだ。微笑み、嫌そうな顔もしていない。
「そうね。みんなから好かれてる。で、最近この香織のことを好きなんじゃないかなぁっていうのが近くにいるのよ。香織もまんざらでもない様子で……明日そいつ誘って遊園地行くの」
「遊園地……あぁ高校の近くにできたやつですね」
「そうそう。私も含めて四人で行くんだけど……どうなるか楽しみなの。新拓さんには悪いけど……ね」
よく考えてみると、男女四人になるといやでも私は新拓とペアになることになる。
ということは、初めて行くドリームフィールドパークを好きでもない新拓と一緒に回ることだ。そう考えると、上がっていたテンションが一気に急降下した。ハイテンションでしゃべっていたのが、みるみる暗い顔になっていくのがおかしかったのか、時人は手で口を押さえクスクスと笑っていた。
「なんだか、楽しそうですね来夢さん。……話を聞いてると、どんな方たちなのか気になってきますよ」
「で、でしょ？時人さんも住人なんかやめてさ、現実に戻ろうよ。よかったら、私が話し相手になるから」
そう言うと、時人は目を細め嬉しそうに笑った。
「ありがとうございます。そう言っていただけるだけで嬉しいです」
しかし、すぐにその笑顔は崩れた。
「……しかし、私はもう住人なんです。現実にいた頃の私のことをもう忘れかけていて、自分の名前さえわかりません」
「え、時人っていう名前じゃないの？」
時人は黙ったままうなづいた。うつろな目つきで目線を下げている。
「……そういえば、昨日も刺激があっても起きないって言ってたね。

……あ、じゃあさ、私が時人さんを起こせばいいんじゃない？」
「え？」
そう言うと時人は驚いた表情で顔を上げた。一方私は我ながらの名案に、思わず席を立ち窓のすぐ近くに寄った。
「そうだよ、私が時人さんを探して起こしてあげればいいんだ！私がたたき起こしてあげるよ」
腕力には自信がある。そういう意味で握りこぶしを見せ付けると、時人は苦笑いを浮かべた。
「あ、ありがとうございます。でも、なんだか起きたら怪我してそうですね」
「ちょっと、どういう意味よ」
時人は私が本気で怒っていないことをわかっているようで、くすくすと笑っている。私も笑う時人を見て笑みがこぼれる。
「……ほんと来夢さんといると楽しいです」
「私も、時人さんにもこの夢幻郷にも慣れてきて、楽しくなってきたよ」
「……あの、来夢さん」
笑うのをやめた時人は、なぜか恥ずかしそうな顔をして目を泳がせている。その様子に思わず首をかしげた。
「どうしたの？」
「……もし、起きれたとして現実の世界に戻れたなら……私と一緒にどこか遊びに行きませんか？」
恥ずかしいのか私と目も合わせない。横を向いたり上を向いたりしている。
「べ、別にいいけど。私でいいの？」
そう言うと、きょろきょろしていた顔を止め、満面の笑みで笑った。
「……いいですいいです。はぁよかったです」
照れ隠しなのか、つんつんした頭を手で掻いている。
「どうしたの、いきなり」

「いやぁ……言えるときに言わないと、と思いまして。……こんな気持ち私一人でしたら味わえなかったです。ありがとうございます、来夢さん」
まだ照れているのか、よく見ると色白の頬が少し赤いように見える。
「ど、どういたしまして？」
いつもと違う様子の時人に首をかしげた。
「ほんと……早く来夢さんと会えばよかった。もしかしたら、私は夢よりも現実を見ていたのかもしれない」
悲しげな表情だったような気がする。確かめる前に、私の視界はぼやけてしまった。窓の向こうには、いつものように手を振る時人の姿だけ見えた。

【夢】１２．約束（後書き）

お読みいただきましてありがとうございます。
申し訳ございませんが、次話の投稿を少々間が空いてしまいそうです。続きを楽しみにしていらっしゃる方にお詫びを申し上げます。

予告として、次話はドリームフィールドパークでの話となります。
お楽しみに。

【現】13．それぞれの思惑

外は天気予報通りの雨模様だ。いつ降り出したのか、朝起きたときには道路に水が浮いていた。ザーっという音は弱まることなく、お昼を過ぎても続いている。

クラブは当然中止となり、悠々とドリームフィールドパークへと向かった。集合時間は十三時だったが、十分前にはついてしまった。大きな入場ゲートには、傘を持った人たちが次々と押し寄せている。土曜日のためか家族連れも多い。聞くところによると、ドリームフィールドパークはパーク全体が開閉型の天井となっているらしく、天気に左右されない。今日のようにどしゃぶりの雨だろうが来場者は多いのだ。傘の花が流れる中一人で待っていると、向こうから赤い傘を差した人がこちらへ走ってやってくる。

「……おはよ。あ、もうお昼過ぎてるよね。早いね、らむ」

傘から顔を覗かせたのは香織だ。スラっとしたデニムにピンクのパンプスを履き、フリルのついた短めのワンピースを着ている。肩には小さめのショルダーバックをかけ、湿気の多い雨の日にも関わらず、髪はつやつやとしている。たくさんの女の子がいるが、香織はいい意味で目立っていた。

「おはよ。いやぁ今日もかわいいね。私が男だったら惚れちゃうなぁ」

「もう、何言ってるのよ。……ところでさ、あと一人は誰を誘ったの？」

思わず顔が緩んだ。にやにやとしてしまう頬をなんとか抑えつつ、香織の耳元に顔を寄せた。

「……池口」

「あ、池口くんを誘ったんだ……。なんでそんなにやにやしてるの？」

私の顔に、苦笑いを浮かべながら香織は顔を少し引いた。

「ふふ。……今日は私が犠牲になるわ。香織、池口とドリームフィールドパークを周ってあげなよ」
「えっ私？……犠牲ってなに？」
大きな目をぱちぱちさせている。私はにんまりと笑っていると、後ろから声がした。
「お、おまたせしました！お二人早いですね……はぁ……」
振り返ってみると、ひざに手をついて苦しそうにしている人がいる。傘を上げ、出てきたのは新拓だった。走ってきたのか、少し顔が赤い。
「こんにちは、新拓さん。私も今来たところなんですよ」
「あぁそうでしたか。……し、静山さん、きょ、今日はいつもに比べて、か、か、か……」
香織を見るなり顔を真っ赤にし、どもりが余計にひどくなった。新拓は今日は髪を梳いているのか、いつもよりはぼさぼさではなかった。……湿っているせいもあるかもしれない。眼鏡は相変わらず分厚いいつもの眼鏡だ。ジーンズにチェック柄のワイシャツという至って普通の格好だ。ズボンにインしていないだけマシだと思った。
「蚊はいないですよ、新拓さん。……たぶん、池口ももうすぐ来るんじゃないかな。雨で午前中だけだと思うから」
腕時計で時刻を確認すると、十二時五十五分だった。詳しくは知らないが、野球部は雨の日は筋トレだけで早く終わるらしい。もし、午後もあったとしても、さすがの池口もクラブをサボるだろう。そう考えていると、見覚えのある姿が歩いているのが見えた。
「やっほー。こっちこっち」
手を振ると、こちらに気づいた様子で手を振り返した。透明傘を上下に揺らしながら、池口はこちらへやってきた。
「悪い、俺が最後か」
身長の高い池口はいつものユニフォーム姿とは違い、白いスニーカーにカーキ色のスリムカーゴパンツ、上はプリントの入ったTシャツを着てキャップを被っていた。制服やユニフォームではわから

なかったが、足が長い。身長もあるので格好は悪くないと思った。
「今日クラブがあったんでしょ？それに別に遅刻じゃないし。ね、香織」
「うん。……クラブお疲れ様」
ちらっと香織を見た池口は、少しそのまま見とれていた。香織は不思議そうに小首をかしげているが、私は池口の様子にまた頬が緩みそうになった。が、新拓だけは何かを感じ取ったのかむっとした表情をした。
「……池口っていう人が誰かと思ったら、君か」
「あぁ三年生のトップの人。俺なんかを誘ってもらったみたいで、ありがとうございます」
「ま、集まったしさっさと行こう！」
むぅとした表情で池口を見ていた新拓の腕を無理やり引っ張り入場ゲートへと行った。
ゲートでチケットを渡し、パークへと一歩踏み出した。そこは別世界だった。上を見上げると、開閉式の天井が閉まっており、その天井にはかわいらしい妖精や女の子や動物などきれいな絵が全体に描かれている。入ると大きな道がまっすぐ伸び、一番奥にはきれいなお城が見える。道の端にはさまざまなお店が並び、二階もある。ゲートでもらったパンフレットに目を落とすと、そこには『食べる・遊ぶ・買う。全ての世代に愛される夢の世界。ドリームフィールドパーク』と大きく書かれてあった。
「うわぁ……めちゃくちゃ広いし、天井がある遊園地なんて見たことないや」
隣にいる新拓も口を半開きにしながら天井を仰いでいた。入場ゲートからはすぐに香織と池口も入ってきた。二人も入場ゲートからはわからなかった広さと天井に驚いたようで、目の輝きが見る見る増していった。香織は天井の絵にうっとりとした表情をし、池口は感心したように天井を仰いだり顔を左に右にと忙しそうにきょろきょろとしている。

「すっごいところだね。天井があるなんて私初めて見た。広いし、人は多いし、迷子になりそうだね」
止まっている四人を避けるかのように、人の波はどんどん流れていく。
「僕も最初来たときは、人と広さと天井に驚きました。しかし、何度見ても天井絵は素晴らしいですね。……でも、驚くのはまだ早いです。ところで、皆さん今日は何時まで大丈夫ですか？」
ずれた眼鏡を直しつつ新拓が聞いてきた。
「別に時間はないですけど」
「あ、私も。明日日曜日ですし特に時間はないです」
「何時でも」
三人の答えに満足したのか、にんまりと笑いながら言った。
「実は、会員特典で閉場する十時以降でもここで遊べることができるんです。一時間だけですけどね。それにその時間だけの楽しみがあるんです」
きれいとは言えない歯並びを見せながらにやにや笑っている。私は腕時計を見た。
「十時ってまだまだ余裕ですね。でも、その楽しみって何なんですか？」
「まぁそれはお楽しみに。……ところでこれからどういう風に行動しましょうか」
ちらりと新拓が香織を見た。目で合図でも送っているつもりなのか、何度も香織を見ている。しかし、香織はそれに気づく様子もなくきょろきょろと周りを見渡していた。ふと、池口が不機嫌そうな顔で新拓を見ていることに気がついた。私はささっと池口の横に移動し、肘で腰をつついた。
「……なんだよ」
小声で上から私を睨みつける。
「あんた、香織のこと好きなんでしょ」
そう言うと、不機嫌な顔から一変、目を見開き驚いた顔になった。

ちらりと香織を見ると、どうやら聞こえていないらしく天井絵を見ている。
「……おまえ、いきなり何言ってんだよ！」
そんな顔を隠すように池口は香織に背を向けた。確認するようにちらりと香織を見た。
「昨日の朝の件で、香織をかばってくれた私からのお礼ほしくない？」
小声でにやりとした顔で言って見せると、まんざらでもない様子で目を泳がせている。
「ふふ、素直ね。今日は香織と一緒に遊園地周らせてあげるわ」
「はっ？今日はあの人が静山さんと一緒になりたいがためにチケット渡したんだろ？」
「……馬鹿ね、あんた。それを指くわえてみてるつもりだったの？誰があんたを誘ったと思ってるのよ」
「……おまえだろ」
「……ったくにぶいわね。香織もあんたのことまんざらでもないって言ってんの！」
小声でそう言いつつ池口の腹を肘で突くと、見る見る池口の顔が明るくなった。頬を上げ、嬉しそうだ。
「マジかよ！」
「馬鹿、声が大きい」
大声を上げた池口を不審がって新拓と香織がこちらを向いた。慌ててそちらを振り向いた。
「……どうしたの、池口くん」
小首をかしげる香織に、目を合わせようとしない池口。顔が少し赤い。私はため息を吐き、新拓と腕を組んだ。
「え……」
いきなり腕組みされた新拓は一瞬身体を引いた。しかし、逃がすまいと腕を離さなかった。香織と池口も私のいきなりの行動に驚いた顔をした。

「四人で周るのもなんだしさ、せっかくだし二人で分かれようよ。私、新拓さんと周るから。何かあったら香織の携帯に連絡するね。じゃ、あとでね」
「え、ちょ、ちょっと！ぼ、僕は……し、し、静山さんと！」
無理やり腕を引き、その場から立ち去った。ちらりと振り返ってみると、嬉しそうに話しかける池口が見えた。
一方、隣ではがっくりと肩を落とす新拓がいる。諦めたのか文句も言わず私が引っ張る方向へと歩いていった。

【現】14．ドリームフィールドパーク

ドリームフィールドパークは思った以上に広かった。黙り込んだ新拓を連れて適当に歩いていたが、自分が今どこにいるのかさえわからない。ひとまず適当な店を見つけ、中へと入った。

入った店は喫茶らしく、コーヒーやジュース、ケーキやパフェなど軽めのメニューばかりだった。コーヒーと頼むと新拓も同様にコーヒーを頼んだ。

「……静山さんと周りたかった」

どこを見ているのかわからなかったが、遠くを見つめる目はうつろだ。私は無視して持っていたパンフレットを開いた。

「……静山さん、かわいかったな」

見るとドリームフィールドパークは、大きく三エリアに分かれているらしい。一つは入場ゲート付近のショッピングエリア。衣服から生活雑貨まで、普通のショッピングモールと変わらない品揃えと銘打ってある。それぞれの店には二階もあり、店内は広いらしい。

「……静山さん楽しんでくれるかな」

二つ目はアトラクションエリア。入り口から見えたお城の周り全体のエリアだ。このアトラクションエリアがほとんどの敷地を占めている。ジェットコースター、観覧車、メリーゴーランドなど定番のアトラクションから、プールまである。どうやら温水プールらしく、冬でも楽しめると書いてある。他にも、バンジージャンプ、やたらコースが長いゴーカートなど一風変わったアトラクションも数多くある。お城は迷路になっているらしく、ドリームフィールドパークの看板アトラクションらしい。

「……はぁ静山さんともっとしゃべりたい」

三つ目はフードエリア。アトラクションエリアにも軽食はいくつかあるが、それとは別らしい。アトラクションエリアを囲むようにフードエリアがある。見ると、アトラクションエリアにある軽食と

は違い、扱っている食べ物はイタリアン、フレンチ、中華、日本の郷土料理、アジアの国の食べ物など多種多様の店が並んでいる。エリアには三十店舗以上あるらしく、それらを全て周りスタンプを集めると記念品がもらえるらしい。

「……静山さんって今好きな人いるのかな」

パンフレットの裏を見ると、会員募集という字が大きく書いてあった。読んでみると、特典としてチケット購入が優遇されることと閉場後限定のイベントに参加できることと書いてあった。他にもあるらしいがそこまで詳しくは書いていない。入会費は一万円で年間費はないらしい。高いのか安いのか、よくわからない。

「おい、木元さん聞いてるのか？」

はっとして顔を上げると、眉間に皺を寄せていた。するとタイミングよくコーヒーが運ばれてきた。さっそく一口飲んだ。

「……聞いてますよ」

「どうして無理やり僕を連れてきたんだ。……せ、せっかく静山さんと二人になれるチャンスが……」

新拓はため息を吐くと、コーヒーに口をつけた。眉を八の字にし、落胆しているようだ。

「そ、そんなに落ち込まなくても。……香織に好きな人がいるかって言ってましたけど、たぶんいますよ」

「えぇ！だ、誰だよ！」

期待しているのか、声が上擦っていた。期待している目で見つめれ思わず目線をはずした。

――何を期待しているんだ……。

「ま、まぁあえて聞かないで置くよ。……ふふ、そうかいるのか。そうかそうか……」

肘をつき、あごを手の平に乗せ外を眺めている。嬉しいのかにやにやとしている。夢を壊すのは悪いと思い、それ以上のことは言わなかった。

店を出ると、新拓がお勧めするアトラクションへ行くことにした。というより、お店で向かい合わせに新拓と顔を合わせるのが正直つらい。話題もないし、間がもたない。初めてのドリームフィールドパークでわくわくするはずなのに、あまりテンションが上がらない。一方、香織に好きな人がいると話して以降、新拓は機嫌が良くなった。私の気分などお構いなしに、足早にアトラクションへ向かっていく。

「今から行くのは一番大きなジャットコースターなんだ。高いわ、螺旋はあるわですごいんだよ」

「へぇ、それはすごそうですね」

「おまけにロケットスタートでね、スタートからスリル満点なんだ」

「そうですか」

着くと、ずらりと二列並んでいる。一方の列は人は少ないが、一方は長蛇の列になっていた。なぜこんなにも差があるのか不思議だったが、先を進む新拓は迷うことなく少ない方の列へと並んだ。

「新拓さん、こっちに並んでもいいんですか？」

心配する私をよそに、新拓は胸を張って言った。

「こっちの列はね会員限定の列なんだよ。係員にチケットを見せれば大丈夫だから」

チケットをかばんから取り出し見てみると、確かに右隅に会員と書かれてある。長蛇の列に並ぶ人たちは恨めしそうな顔でこちらを見ている。向こうの列は全く進んでいない様子なのに対し、こちらの列は少しずつだが進んでいた。

「……これすごい人多いみたいですけど、そんなにおもしろいんですか」

「あぁおもしろいよ。なんでも高さが日本一とかなんとか。あと螺旋もすごいから身に着けているものが飛ばないようにね」

そう言った新拓はつけていた眼鏡をはずした。はずすと顔の割りに小さい目が出てきた。確かに耳を澄ますと人の甲高い声や叫び声が上の方から聞こえてくる。列の上には屋根があるため直接は見る

ことができないが、相当高いことを予感させた。
特に新拓との会話もないまま、列に流されていくと順番がきた。
赤い車体だった。本来ジェットコースターのレールは下にあるものと思っていたが、これは上にある。おまけに足元には何もなく、宙ぶらりんの状態になった。肩から胸にかけて安全ベルトをしているが、踏ん張れない足元にこれだけでいいのかと思ってしまう。緊張のあまりに余裕がなくなっている私をよそに、隣の新拓ははしゃいでいた。
「一気にスタートするよ！……うぉおドキドキする！」
カウントが始まり、ゼロとなると新拓の言うとおり一気に車体は最高スピードへとなった。
……上からかかる重力、横にかかる重力。周りの景色はあまりのスピードと回転で見る余裕などなかった。
長いコースを終え、降りると急に吐き気がした。歩く度に酔いが回る。ジェットコースターから少し歩いて、ようやく青ざめている私に気がついた新拓は慌てた様子で私を医務室へと連れて行った。

わいわいと騒がしいパーク内とは打って変わって、医務室は静かだ。女の看護士が二人とベッドが六つ並んである。その中のベッドに横になった。
「……大丈夫かい？顔色が悪いよ」
眼鏡をかけなおす新拓の心配そうな顔が見える。しゃべると何か出てきそうなほど気分が悪い。
「にしても、苦手なら苦手と言ってくれればよかったのに」
「すいません。……私はしばらくここで休みます。新拓さんは香織たちと合流してください……今メールしますね」
二人きりにしようと思ったが、こうなっては仕方ない。池口と香織には申し訳ないが、こんな広い場所で一人にするわけにはいかない。ポケットから携帯を取り出し、香織にメールを送った。すると、すぐに返事が来た。

『大丈夫？じゃあ今から医務室行くから』
携帯の液晶の文字がちかちかと見え、胸のむかむかが余計にひどくなる。
「……今から香織たち来るそうです。私はここで寝てますね……」
「お、そうか。ゆっくり寝てくれ、じゃああとでまた来るよ」
新拓の足跡が遠ざかっていく。騒がしいパーク内とは思えない医務室の静けさ。気分の悪さをどうにか抑えるため目を閉じた。
――気分が悪い……。にしても、池口と香織には悪いなぁ。……新拓さんは嬉しいだろうなぁ。
三人のそれぞれの想い。人の恋の行方は気になるもので、他人事のせいか楽しい。池口は香織に気持ちを伝えるだろうか。香織は自分の気持ちに気づくのだろうか。新拓さんはくじけずにアタックし続けるのだろうか。
そう考えてみると、自分はどうなのだろう。今はクラブに打ち込んでいて恋なんて当分していない。何が恋と言えるのだろう。どう感じたら好きということなのだろう。そんな感覚さえも忘れてしまった。
――私の恋は……どんなかな。
吐き気は遠退いていき、パークの騒がしさも聞こえなくなっていった。

【現】１４．ドリームフィールドパーク（後書き）

次話は登場人物の紹介となっています。
すごく中途半端な位置となってしまいましたが、ご了承ください。

【幕間　登場人物のおさらい】（前書き）

これは今まで出てきた人物の紹介となります。
本編とは関係のない章となりますので、登場人物のおさらいを必要とされない方は飛ばしてお読みください。

【幕間　登場人物のおさらい】

【登場人物】

【木元来夢（きもとらいむ）】…主人公。女。坂都高校２年。ソフトボール部に所属。日焼けをしている。髪型はショートカット。身長１５５ｃｍ。

【時人（ときと）】…夢幻郷の住人。男。年齢など詳しいことは語らない。身長１７０ｃｍくらい。白く輝く腕輪を左手首に、同様の指輪を右手中指に身に着けている。黒いローブを羽織っている。髪型は短髪で、逆立っている。色白、鼻筋が通り流れるようにキリっとした目つきで整った顔。

【静山香織（しずやまかおり）】…来夢のクラスメイトで友達。来夢のことを慕いラムと呼ぶ。成績も良く、学年トップ。おまけに学年一の人気者。天然のところがあり、鈍感。身長１６５ｃｍ。背中の真ん中辺りまで伸びている長髪。肌がきれいで、小顔。スタイルが良い。

【池口勝（いけぐちまさる）】…来夢のクラスメイト。男。野球部に所属。日焼けをしているが整った顔で人気者。坊主頭。身長１８０ｃｍ。グランドが近いソフト部の来夢とよく痴話げんかをする。男子の学級委員長を務めている。

【新拓政二（しんたくせいじ）】…坂都高校３年。男。小太りでド近眼。分厚い眼鏡をかけている。身長１６５ｃｍ。ボサボサ頭。成績は優秀で、学年ト

ップ。香織のことが好き。

【亀田冷子（かめだれいこ）】…来夢のクラスメイト。女。長髪で巻いている。クラスの女子の中心である。ぱっちりした目に色気のある唇に大きなバストで、男子からも熱い視線を浴びている。身長１６０ｃｍ。女子の学級委員長。

【山田美加（やまだみか）】…来夢のクラスメイト。女。長髪でストレート。一重。すらっとした手足。身長１６０ｃｍ。冷子の友達で、いつも一緒にいる。未希と一緒に風紀委員をやっている。

【江口未希（えぐちみき）】…来夢のクラスメイト。女。長髪で、おだんご頭。身長１６０ｃｍ。冷子の友達でいつも一緒にいる。たれ目。少しだけふくよか。美加と一緒に風紀委員をやっている。

【上村愛子（うえむらあいこ）】…ママレードの店主。６５歳。女。年の割りにしわも少なく、気さくで明るい人。いつも花柄のエプロンと色違いのバンダナを身につけている。高校生からは”アイさん”と呼ばれ慕われている。高校生が多く来店するため、諸事情に詳しい。

【幕間　登場人物のおさらい】（後書き）

私自身、登場人物が多いと何が誰だかわからなくなってしまうことがあります。ましてやこの作品は無駄に文字が多くテンポが悪い……ですのでこのように人物紹介を改めてさせていただきました。中途半端なところでの紹介となってしまい申し訳ございませんでした。どうか引き続きお付き合いよろしくお願いします。

【夢】15．突然の嘘

静けさに気づき目を開けると、真っ暗だった。無音の世界、あれだけいた人は誰もいない。どうやら夢幻郷のようだ。先ほどまでの吐き気は治まり、楽になっていた。

医務室から出てみるとやはり誰もいない。遊具は止まったままだ。しかし、止まっていながらもそこに人はいない。何か奇妙な風景だ。

歩いてみると改めて一人きりだと思い知らされる。自分の服がこすれる音と呼吸する音だけが聞こえる。しん、とする空間に耳が痛くなりそうだ。

「へぇここが噂の遊園地ですか」

後ろから突然声が聞こえ振り返ると、時人が立っていた。きょろきょろと顔を忙しそうに動かしている。

「……いつからいたの？」

「今来ましたよ。入場ゲートをくぐるのに苦労しました。……屋内なのに広いですね」

天井を見上げたり、首を右に左に動かしながら私の目の前に歩み寄ってきた。

「今日はここでお友達と来たんじゃなかったんですか？……どうしてこちらへ？」

いつものようににっこりと時人は笑っている。

「新拓さんに付き合ってジェットコースターに乗ったら気分悪くなってさ。医務室で横になってたら……こっちに来たの」

そう言った途端、笑っていた顔が見る見る真顔になっていく。

「……そうですか」

張りのない声だった。どことなく残念そうな表情をしている。そして、そのまま空中へ浮きあぐらをかいた。

「でしたら早く目覚めた方がいいんじゃありませんか？きっとお連れの友達が来夢さんを待ってますよ」

そういうと私に背を向けた。わけがわからず、思わず首をかしげた。
「まぁ戻るけど……なんでこっち向いて言わないの？」
「そういう気分だからです」
どことなく怒っているような雰囲気が、空気を通して伝わってきた。わけのわからない態度に、私は走って時人の前に回りこんだ。
「なんで怒ってるのよ」
見上げて見ると、時人は腕組みをし眉間に皺を寄せむすっとした顔をしている。数秒間私を見つめた時人は、ゆっくりと口を開いた。
「その……新拓さんっていうのは男の方ですよね」
「え？そうだけど。それがどうしたのよ」
すると再び黙り込んだ。そのまま黙ったまま再び私に背を向けた。
「もう、何なのよ！はっきり言いなさいよ」
すると、時人はあぐらを解き、立ち上がるとそのまま地面へと足をつけた。後ろ姿しか見えないが腕組みをしたまま、なにかを考え込むように頭が少し下がっているように見える。しかし、何かに気づいたようにぱっといきなり顔を上げた。
「……馬鹿だ」
そう聞こえた気がする。耳を澄まさなければ聞こえないほどの小さな声だった。
「え？何？」
私の声に反応したのか、時人はゆっくりと振り向いた。振り向いた顔は先ほどのような険しい表情ではなかった。かと言っていつものにっこりと笑っている顔でもない。どこか悲しげに弱々しく微笑んでいた。
「ど、どうしたの？おかしいよ、時人さん」
ころころと変わる時人の表情に私もどう対処すればいいのかわからない。ひとまず、近くに寄ろうと一歩踏み出した。しかし、時人は腕を前に突き出し、寄るなと示すように手の平を見せた。
「……来夢さんすいません。私、嘘をついていました」

「え……嘘？」
時人は表情変えずそのまま続けた。
「……前に現実のことは思い出せないと言いましたが、実は名前以外のことは覚えているんです」
「え、そうなの！」
思わず頬が緩んだ。そうなるとどこに住んでいるのかわかる。直接起こしに行ける。再び一歩踏み出すと、時人が珍しく大声で言った。
「まだあるんです！最後まで聞いてください！」
「ちょ、ちょっと……いきなりどうしたの？」
立ち止まり時人を見つめた。いつも夢幻郷に来ると近く時人がいたのに、今は遠い。ほんの五歩ぐらいなのに遠く感じる。
態度が急変した時人は、目線を下向きにし、いつものような明るい声ではなく呟くような声でしゃべり始めた。
「……私にこの指輪と腕輪をくれた前の住人はこの夢幻郷にはいません。……私と住人を入れ替わったのです。夢幻郷の住人は一人しかいることができないからです」
突然話が変わったことに首をかしげた。しかし、何か冗談を言う雰囲気でもないのでひとまずうなずいた。
「そ、そうなんだ……。じゃあその人は現実の世界に戻ったんだね」
「……そうでしょうか」
力なく言うと、時人は白く輝いている指輪をじっと見つめた。
「来夢さんはわからないと思いますが、この夢幻郷では時間は存在しません。皆さんの意識でできている世界ですので、時間が存在し得ないのです。……ですからきっと、来夢さんが現実で感じる時間の流れと夢幻郷で感じる時間の流れが違っていると思います」
「確かに……言われてみればそうかも」
「……現実での生活に嫌気が差していたとき、たまたま夢幻郷へ招待されました。初めて見た夢幻郷は本当に魅力的でした。雑音のない自由な世界。自分の思い描く通りに作り出せる力。私は喜んで住

人を引き受けました」
　時人は指輪から目を離し、そっと私のほうを向いた。その目に哀愁を感じた。
「でも、一人きりの世界は自由でもなんでもなかったのです。いくら作り出せる力を持っていても、それを誰かに自慢することもできない。食事をするために料理を出しても一緒に食べる人もいない。……真っ暗で無音の世界に魅力を感じていたはずなのに、いつしか私の中で地獄と化していたのです」
　時人の声は空しく静かな空間にかき消された。私は立ち尽くしたまま時人の言葉を聞いていた。
「……耐えられなくなった私は、前の住人と同じように誰かと住人を交代してもらおうと思いました。……それが来夢さんだったのです」
「え……」
　予想外のことに、力なく言った。時人は目を瞑り顔をうつむき加減となった。
「話し相手に来夢さんを呼んだんじゃないんです。初めから来夢さんに住人を押し付けようとしてこちらへ呼んだのです」
　初めて時人に会った日からの出来事が頭の中でフラッシュバックした。自分でどこを見ているのかわからない。ただ、時人の顔は見れなかった。
「ちょ、ちょっと待ってよ。どうしたのいきなりおかしいよ！……じゃ、じゃあ信用しろだの信頼しろだの言っていたのはどうして？」
「この夢幻郷を怖がらせないためです。私しかいないので、言った言葉を信じてもらうためにはまず信頼してもらわないといけません」
「……私の前で力を見せたのは？」
「夢幻郷の魅力を実際に見せるためでした」
「……笑っていた顔も全部嘘……だったの？」
　時人はそっと目を開けた。少しそのまま黙っていた。そして、ゆっくりと目を上げていき、まっすぐと私を見つめた。

「……すいません」
時人の顔がぼやける。きっと夢から覚めるのだろう。いつもの感覚のはずなのに、いつも以上にぼやけて見えていた。
――どうしてそんなことを……私に言うの？

【夢】15．突然の嘘（後書き）

お読みいただきましてありがとうございます。

感想を下さいと書いてきましたが、本日より物語が完結するまでの間、評価感想を受け付けないことにしました。

読者様の助言やエールは、のどから手が出るほどほしいのが本音です。

しかし、一回自分だけの考えで完結させてみたいのです。もちろん、そうなると間違いだらけになると覚悟しています。ですがそれも私の努力不足です。

物語が完結したあと、いくらでも間違いを直せるので今感想や意見をいただけなくてもいいかなぁと思っています。

感想来ないかなぁなんていう気持ちは捨てて、面白いストーリーになるように頑張っていこうと思います！

……ただ、アクセス数はかなり気にしています。アクセスが減ってきたら面白くないんだろうなぁと思うことにします……。

【現】16．好きな人

誰かが私の腕を揺すっている。ゆっくりと目を開けると、香織の顔があった。なぜか驚いた顔をしている。

「らむ大丈夫？……なんで泣いてるの？」

「えっ？」

思わず目元に手を当てると、確かに濡れていた。私は誤魔化すように笑った。

「うわ本当だ……はは、なんで泣いてたのかな」

私は慌てて手で涙を拭った。香織は笑う私に安心したのか、ふぅと息を吐いた。

「……それで気分はどう？かなり寝てたようだけど」

「えっ？」

ベッドから身体を起こし、腕時計を確認すると午後七時を差していた。

「ええ！もうこんな時間なの？」

「……おまえ、ここに泊まるつもりだったのか」

ベッドのカーテンの隙間から顔を覗かせていたのは池口だった。私の顔をじっと見た後ため息をついた。すると、いきなりカーテンが開けられた。見ると新拓がカーテンを開けているようで、カーテンの後ろから出てきた。

「お、顔色が良くなってるね。木元さんが寝ている間、ドリームフィールドパークの城の迷路に行ってきたんだよ」

「あ、そうなんですか。おもしろかったですか？」

すると、香織が苦笑いを浮かべながら言った。

「三人で入ったんだけどね、みんなバラバラになっちゃって。……おまけにかなり長い迷路でほとんどの時間迷っていたの」

――どれだけ複雑な迷路なのよ。

どうやらこの三人の間には特に何もなかったようだった。会話も

そこそこに私たちはフードエリアで食事を取ることにした。
大きな道の両サイドにはいくつもの店が隙間なく立ち並んでいる。時間も時間のせいか、フードエリアにはたくさんの人がいた。私たちは話し合って、洋食バイキングの店に入ることにした。その店は木造で、中は人でごった返していた。広い店内で空いていたテーブルを見つけると席を確保し、それぞれ交代で食べたいものを取りに行った。
「ふぅ、人多すぎるね。取りに行くだけであんなに並ぶなんて」
重いお盆をテーブルの上に置いた。一緒に取りに行った香織も隣の席に座った。
「でも席があってよかったよ。さ、らむも体調良くなったことだし食べよ」
ざわざわと賑わう中、私たちは談笑しながら食事をした。
食べ終わると同時に池口が立ち上がった。
「……静山さん、ちょっといい？」
「え。あ、うん」
池口に誘われ、香織はそのままテーブルから離れたところまで池口の後ろを付いて行った。
「……どこ行ったんだろ、二人とも」
「まさかあの男静山さんに……こ、こ、告白するんじゃないのか」
「あーそうですね。そうなのかな」
すると、いきなり新拓は立ち上がった。ずれる眼鏡を直しつつ、落ち着こうとしているのか鼻息が荒い。
「ちょ、ちょっと見に行ってくる！」
「えぇ！駄目ですよ、邪魔しちゃ！」
「……離してくれ！のんびり座ってなんかいられるもんか」
私が捕まえている袖を振りほどこうと暴れている新拓だったが、そこへ二人が帰ってきた。
「……何やってんだ？」

「え、いや……おかえり」
二人は変わった様子もなく、席に座った。しかし、新拓は乱暴に座るとジロっと池口を睨み言った。
「おい、池口君。静山さんを連れて何をしに行ったんだ？」
「なんであんたに言わなきゃいけないんだ。別に、静山さんに話があったからしただけだよ」
「だったらここで言えばいいじゃないか」
「ったく、あんた合流してからしつこいな。……おい、木元」
うんざりした様子で少し私を睨んでいる。
「な、何よ」
「店出ようぜ。人も多いしな。……出たら頼んだぞ」
ちらっと新拓を見る池口。
――二人きりにさせろってことね。
うなづいて答えた。一方、香織はぼーっとテーブルを眺め、新拓は不審そうに私の顔を見ていた。

店を出る頃には時計の針が午後九時を差していた。閉場時間まであと一時間だ。新拓曰く、閉場時間後の一時間が会員特典なので、それまで時間つぶしをしなくてはいけない。と言っても私の時間つぶしは、隣でジッと池口を睨んでいる新拓を香織から離すことだった。
「……新拓さん、私と一緒にどこか行きましょうよ」
「え？いや、僕は……」
目を離した一瞬を池口は見逃さなかった。香織の腕を掴むと足早にその場を去っていった。なかなか大胆な奴だ。
香織は驚いている様子だったが、長い髪をなびかせながら池口と一緒に駆けていった。
「……あ！あいつ、静山さんをどこへ連れて行くつもりだ！」
「まぁまぁ、さぁ私たちもどこかへ行きましょうよ」
新拓の腕を掴み、反対方向へ足を進めようとした。が、新拓は私

よりも強い力で池口たちが進んでいった方向へと歩き始めた。思いっきり力を入れても、新拓の力に勝てない。どうやら興奮しまくっているようで、息が荒い。
「木元さん！追いかけるよ！」
「だ、駄目です！ちょ、ちょっと何なのよこの馬鹿力は！」
私の抵抗も空しく、新拓の歩みは止まらなかった。

木の茂みに隠れ、周りには誰もいない。新拓と一緒に木の向こうにいる香織と池口をじっと見ている。
「……もういいじゃないですか、ほっておきましょうよ」
「黙って。何か静山さんに変なことでもしたら、な、殴ってやる」
小声で互いに言った。どうやらあの二人は気づいていないようだ。お互い向き合っている。
少しの間沈黙が流れた。しかし意を決したように、池口が頬を赤らめながら口を開いた。
「……俺、ずっと静山さんのことが好きだったんだ」
香織は目を見開き驚きの表情を浮かべながら、頬を赤らめた。隣では新拓の鼻息が余計にひどくなっている。
「俺と付き合ってほしい」
香織を見ると頬を赤らめているが、徐々に顔をうつむかせていった。
「あの朝の時……池口くんが私をかばってくれて本当に嬉しかった。でもね……私クラスのみんなから嫌われちゃったの」
「え？」
「今までのように、みんなとうまく付き合えないかもしれない。もしかしたら、私といるせいで池口くんまで巻き添えにしてしまうかもしれない。……だから」
顔を上げた香織の目元には光るものがあった。
「ごめんね」
そういうと、香織はその場から走り去ってしまった。

唖然とする私をよそに、隣にいた新拓がその後を追いかけていった。池口はその場に立ち尽くしたまま、動かなかった。どちらへ行くべきなのか迷ったが、香織が心配だったので新拓より遅れて香織の後を追いかけた。

息を切らしながら捜していると、人気のないところで新拓と香織を見つけた。向かい合っている。

――まさか、新拓さん便乗して告白するつもりなんじゃ……。

慌てて近寄ろうとしたが、会話が聞こえてきた。

「静山さん申し訳ないんですが、さっき、見てしまいました」

「そ、そうですか」

やはり香織は泣いている。鼻をすする音が聞こえてくる。新拓はその様子を悲しそうに眺めていた。重々しい雰囲気に、私は物陰に隠れ様子を見ることにした。

「僕は静山さんのクラスの事情までは知りません。でも……彼の告白とそのクラスの事情が何か関係あるんですか？」

「私、迷惑をかけたくないんです。だから……」

新拓はため息を漏らした。

「静山さんがクラスで無視されているからって、好きじゃなくなるやつなんて初めから好きじゃないですよ。でも彼は、それを知っていて尚且つ静山さんをかばってくれたんですよね？それだったら、彼は迷惑がかかろうが、同じように無視されようが関係ないんじゃないでしょうか。……つらいときにつらいと言えて、それを受け止めてくれる人がいるなんて幸せじゃないですか。きっと彼……池口君は、静山さんの支えになりたいんですよ。それに、静山さんも池口君のこと……好きなんでしょ？」

鼻をすする音が治まっていく。香織は黙ったまま、新拓を見つめている。

「好きじゃなかったら、普通そんなに泣きませんよ」

口元が笑っている新拓だったが、頭を強く掻いた。気持ちをごまかしているように見える。

香織は手で涙を拭うと「すいません」と言い、踵を返した。一方、新拓はその場から動かず去っていく香織を見ていた。が、大きく息を吸い吐くと突如叫んだ。
「あぁ！くそ！もう！」
頭をぼりぼりと掻きまくり、髪がぼさぼさになってしまった。私は恐る恐る新拓に近寄っていった。
「あの……ありがとうございます。私すっかりまた告白するのかと……」
私に気づいた新拓は、じろっと私を睨んだがすぐにため息を吐いた。
「……あのね、僕もそこまで非常識じゃないんだよ。静山さんの様子を見たらわかるよ。……はぁ」
新拓は再び大きくため息をついた。そんな新拓の背中を私はぽんぽんと叩いた。
「でも、ちょっと見直しましたよ。きっと新拓さんだったら、別の女の子とすぐ出会えますって！」
「……そ、そうかな」
新拓は照れ笑いを浮かべた。と、突然アナウンスが流れ始めた。
『本日もドリームフィールドパークにお越しくださいましてありがとうございました。間もなく閉場となります。またのお越しを心よりお待ち申しております。なお、会員の方のみ閉場後一時間程度のイベントがございます。もうしばらくお待ちくださいませ。本日も……』
繰り返し流れるアナウンス。腕時計を見ると午後九時五十分だった。
「じゃあ城に行こうか。静山さんたちにも連絡してくれないかな」
「お城？……今から迷路行くんですか」
首を横に振った新拓は、にやりと歯並びの悪い歯を見せながらこう言った。
「違う違う。……城からの眺めが一番場内を見渡せるんだよ。行け

ばわかるさ」

香織にメールをし、城の前で待ち合わせをした。私と新拓のほかにも、ちらほら人も見える。閉場時間が近づいているのに、この辺りにいるということは会員の人たちなのかもしれない。それにしても、気のせいかカップルが多い気がする。

「おまたせしました。……ごめんね、待った？」

声のするほうを見ると、手をつないでいる香織と池口がいた。二人とも照れ笑いを浮かべている。どうやらうまくいったようだ。

「いいよ。……なぁに、二人とも。嬉しそうな顔しちゃってさ。よかったわね、この！」

池口の腹をどつくと、池口は嫌な顔もせずニカッと笑い「バーカ」と言った。目を細め、試合にでも勝ったような顔をしている。

と、新拓がわざとらしく咳き込んだ。

「……集まったし、城に入ろうか。行くよ木元さん」

「え、は、はい」

すたすたと歩き始める新拓。まさか呼ばれるとは思わなかったので、少しびっくりしてしまった。ひとまず私たち四人は城の中へと入っていった。

城の入り口は大きな扉が二つあった。左の扉は閉まっている。右の扉は開いていた。その右の扉のほうへ集まった人たちが流れていく。

「この扉は閉場時間を過ぎてから開くんだ。こっちは会員にしか入れない入り口なんだよ」

「へぇ、そうなんですか」

中は真っ暗で手すりを持っていないとよく前が見えないほどだった。前を歩く人たちなのか、暗さに驚く声が聞こえる。階段を上っている様で、上に行くようだった。ひたすら階段を上っていると、外が見えた。

階段を上り終え、見えたものは場内をぐるりと見渡せる展望場だ

った。どうやらお城の外壁の部分らしく、思った以上に広い。上ってきた人たちも、驚きの声を上げている。
「わぁすっごい。やっぱりドリームフィールドパークって広いんだ」
「すごいね、らむ。お昼に来たときはこんな場所があるなんてわからなかったよ」
香織と一緒に外を覗いた。思った以上に高く、地上にいる人が米粒ほどにしか見えなかった。すると、再びアナウンスが流れた。
『おまたせいたしました。これより、会員様限定のイベントを開始いたします。本日は、天文ショーを行います。素敵な夜をお過ごしくださいませ。これより開始いたします。おまたせいたしました……』
繰り返し流れるアナウンス。
「じゃ、僕は木元さんとあっちで見るから。終わったらさっきの場所で待ち合わせをしよう。じゃ、行くよ」
眼鏡を直しつつ、新拓は私の腕を掴んだ。
「え、ちょ。……か、香織あとでね！」
いきなりのことで池口と香織は唖然とした表情だった。

二人の姿が見えなくなると、新拓は私の腕を離した。
「……いきなりでびっくりしましたよ。気を遣ったんですか？」
「せ、せっかくいい雰囲気なんだからね。……し、静山さんのためさ」
悔しそうにため息を漏らす新拓を見て、思わず笑った。
「わ、笑うなよ。……あぁしかし、せっかくの天文ショーを見る相手が君か」
「それはこっちの台詞ですよ」
するといきなり場内全ての明かりが消えた。真っ暗になった。
『それでは皆様、天井をご覧下さい』
アナウンスが終わるとともに、広い天井にいくつもの明かりが輝き始めた。それは、星空だった。屋内とは思えないほど美しく、散

りばめられている。真っ暗な空間に輝く天井は、優しい光りを私たちに降り注いでいた。
「わぁ！きれい！」
あちこちから感嘆の声が聞こえてくる。周りを見てみると、カップルばかりだった。どれもいい雰囲気で、天井を見ているのかと言いたくなるほど相手を見つめている。
「……木元さんには、一緒に見たい相手はいないのかい？」
私の様子に気づいたのか、いきなり新拓が口を開いた。
「え？……一緒に？」
「だって、今日わざわざあの池口君を誘っただろ。木元さんが一緒に行きたい相手を誘えばよかったのに、静山さんに気を遣って彼を誘うなんて」
「あ、す、すいません。新拓さんには悪いと思ったんですけど……」
「ま、まぁそれはいいんだ。ただ、人にばっかり世話を焼いているみたいだからさ。僕が言うのもなんだけど、木元さんにそれらしい人がいるならいるで、他人のことばっかり手を焼かないで自分の方もしっかりしなきゃ」
「それらしい人？」
ずれた眼鏡を直すと、笑いながら新拓は言った。
「はは、好きな人だよ。僕のように当たっていかなきゃ……あ、砕けちゃ辛いかもしれないけどね」
力なく笑うと、再びため息を漏らした。そして、再び天井を見上げた。
――好きな人？……好き？一緒にいたい？今、一緒にいたいのは……。っていうよりも、話したいやつならいる。
浮かんだのは時人だった。今思えば、文句を一つも言っていない。これが好きだからなのか、一緒にいたいからなのかはわからない。ただ、会って文句を言ってやりたい。
「……新拓さん」
「え？なに？」

見上げていた顔を元に戻した。それを確認すると、私は近くある空いているベンチに横になった。
「すいません、ちょっと横になります。終わったら起こしてください」
「え？今寝るのかい？……もったいなぁ見れば良いのに」
「おやすみなさい」
「はいはい、おやすみ」
なぜ今寝ようと思ったのかよくわからない。ただ、早く会って文句を言いたい一心だった。

【夢】17．一人っきり

今日は二度目の夢幻郷だ。目を覚ますと、先ほどのように天井から明かりは降り注ぐことなく、真っ暗な世界が広がっていた。いちゃいちゃとしていたカップルの姿も、ベンチの前で天井を見上げていた新拓の姿もない。音のないドリームフィールドパークが広がっている。

私は塀の近くに行き、下を眺めた。やはり誰もいない。

――時人さんだったら、下じゃなくて上から来るか。

そう思い、天井を見上げた。さっきまであんなに綺麗だった天井は、ただの真っ暗な空間へとなっている。

――どうして、いきなりあんなこと言ったのかな。

物音さえしない空間に慣れてきたものの、やはり気味が悪い。

――早く来ないかな。

しかし、一向に来る気配がない。いつもなら、すぐに来ていた。時人がいつも来ることに疑問も抱かなかった。

時人が来ることは当たり前だと思っていた。

しかし今、待っても待っても、ぼんやりとした灯りも何かがこすれるような音も、全くしてこない。

――……どうして。

夢幻郷には慣れたと思っていた。しかしいざ一人きりになると、自分がこのまま暗い世界に溶け込んでしまうのではないかとさえ思えてきた。

暗闇の恐怖を取り払うため、いるはずの時人に向かって叫んだ。

「どこかにいるんでしょ！出てきなさいよ！」

真っ暗な空間に叫んだ私の声は、空しくもすぐさま無音の空間にかき消された。

「……一方的に嘘ついたって言っちゃってくれてさ、私には文句の一つも言わせないわけ？聞こえてるんでしょ！」

それでも時人は返事をしない。本当に時人がいるのか不安になってきた。

その時はっと思い出した。左手にはめている腕輪だ。見ると、やはりはめていた。なんとなくだが、時人が作り出したものだから、いるはずなら消えないと思った。何の証拠もないが、そう思えた。そっと腕輪に触れてみた。やはり、温かくも冷たくもない。

「……どうして返事しないのよ！これから私がこっちに来ても、時人さんはずっと無視するわけ！」

響かない私の声。見渡す限りの暗闇。誰もいない場内。

急に心細くなった。

「……寂しいじゃない……どうして。……時人！返事しなさいよ、馬鹿！これ以上私を苦しめるなら、文句だけじゃ済まないわよ！」

が、そんな叫びも空しく、とうとう時人は姿を現さなかった。

ぼやけてくる視界。今思えばいつも、時人が見送っていた。見送りがいないのは初めてだなと思うと、また寂しく思えた。

【現】18．異変

あっという間の二日間だった。土曜日のドリームフィールドパークは終始円満で終わった。香織と池口は付き合うようになり、やきもきしていた私はほっとした。新拓さんも諦めてくれたようで、二人に対して特に何も言わなかった。

日曜日は雨も上がり気持ちの良い晴天となった。土曜日の分も取り返すように、一日中クラブ漬けだった。

くたくたで早めに眠りにつき、いつものように夢幻郷へと入った。しかし、時人はその夜も現れなかった。時人がいない夢幻郷は何の魅力も感じなかった。

朝練を終え、いつものように教室へ入った。が、やはりクラスのみんなは私が見えないように無視をしていた。挨拶をしても返ってこない。直接は見られていないがどこか冷たい目線を感じる。うんざりしながら席に着くと、すぐさま香織が来た。

「おはよ、らむ。やっぱりみんな無視……してるよね」

「おはよ。してるね。はぁ、実際つらいよね。……あれからどうなのよ池口とは」

そういうとしょんぼりしていた香織は一変、嬉しそうににこっと笑った。

「池口くんとは夜とか電話したりメールしたりしてるよ」

「ほほぉ、なかなか幸せのようで。……お、旦那が登校してきましたよ」

後ろのドアから荷物を提げた池口が入ってきた。私のときとは打って変わり、近くにいた人たちが声をかけている。池口も男子からも女子からも好かれている。だから、池口と香織のカップルは文句なしのお似合いのカップルなのだ。

私たちが見ていたことに気づいた様子で、池口は机の上に荷物を

置くとすぐこちらへやってきた。
「おはよ」
「おはよう、クラブお疲れ様」
香織が嬉しそうに微笑みながら言った。池口も照れくさそうだ。
「おはよ。朝から熱いわね。それに気のせいか、あんた教室来るの早くない？」
図星だったのか、池口は誤魔化すように咳を一つした。
「ば、馬鹿いつもこの時間だろ。んなことより、お前と香織の誤解を解こうと思ってさ」
「……誤解？」
首をかしげる香織。が私は内容よりも、池口が普通に“香織”と言ったことに耳を疑った。
「ちょっときて」
すると池口は香織の手を握り、そのまま教卓の前に連れて行った。香織も抵抗することなく、手を握ったまま池口の隣に立った。
――池口ってあんなに大胆な奴だったのか……。
驚きすぎて口が開いたままだった。周りの人たちも、いきなり前に立った二人に何が始まるのかとざわつき始めた。すると、池口はいきなり香織の肩を引き寄せた。
「みんな、俺、香織と付き合うことになったから」
そう言った瞬間、クラスは一気に静まり返った。
香織は顔を真っ赤にしながら池口を見ていた。池口は白い歯をのぞかせながら嬉しそうな顔をしている。
「ちょ……マジかよ池口。静山さんってさ……あれなんだろ……その」
静まり返っている教室の中、クラスの男子が歯切れの悪い口調で言った。目をあちこちに泳がせ言いづらそうだった。が、池口はそんな態度を取られたことに怒ることもなく、ちらりと香織の顔を覗いた。香織は申し訳なさそうに顔を俯かせていた。池口はそんな香織の背中をぽんっと優しく叩いた。そっと顔を上げる香織。

「香織、困ったときに俯くことは仕方ないと思う。でも、俯いてばっかりだとなんの解決にもならない。自分の言葉で言ったらきっとわかってくれるよ。……わからねぇ奴がいたら俺がぶっとばしてやるし」
にかっと笑う池口。みんなそんな池口の様子に唖然としているようだ。
香織は唇をかみ締め、うなづいた。
「……木元もこっちこいよ」
「え、は、はい！」
池口にいきなり呼ばれたので、声が裏返ってしまった。慌てて香織の横に立ち並んだ。見ると、みんな睨むようにこちらを見ている。隣の香織は、深呼吸をすると、似合わない大きな声でしゃべり始めた。
「……み、みんな！この間は私なんかのためにごめんね。本当に迷惑かけてしまって……でも、みんなの心遣い嬉しかったよ！それで……あのノートと手紙のことなんだけど……本当にもう気にしていないから。誰がやったのかって気になるけど、もう本当にいいの。もし、このクラスの人だとしたら……今度はその人が私と同じことされちゃうかもしれないでしょ？許したわけじゃないけど、その人が自分から言ってくれるのを待ちたいから……。すぐには信じてくれないかもしれないけど、これが本当の気持ちだから。ちゃんと言えなくてごめんなさい！」
深々と頭を下げる香織。頭を下げたと同時に、みんな慌てた様子でざわつき始めた。
「し、静山さん顔あげて！」
「そこまでしなくてもいいよ！」
そんな声があちこちから聞こえてくる。その声に申し訳なさそうに顔を上げる香織。私も一歩前に出て咳払いをしたあと口を開いた。
「その……私もごめん。……ちょっと言い過ぎたかも」
みんなの前で謝ったことはないため、なぜか恥ずかしくなった。

顔を上げることができず目線を下げた。
少し沈黙が流れたが、なぜか笑いが起こった。
「木元がそんな顔するなんて気持ちわりぃよ！」
「何照れてんだよ」
顔上げてみると、男子の笑い顔と女子の笑いを堪えている顔があった。香織とは違う反応に少し腹が立った。
「こ、こっちが謝ってんのに、なんで笑われなきゃいけないのよ！」
「お、いつもの木元じゃん！」
するとみんな笑った。馬鹿にされているとは思わなかった。むしろ、元通りになったんだとほっとした。久しぶりにみんなが私を見てくれた気がした。
「……みんなもう二人を無視すんなよ！それから、香織にちょっかい出すやつはただじゃおかねぇからな」
堂々の交際宣言に、男子たちが池口をはやし立てている。池口は悪い気はしないようで、嬉しそうな顔をしていた。そんな様子を私と香織は笑い合った。

朝のことがあってか、みんな普通に接してくれるようになった。笑顔で「ごめんねー」のオンパレードだった。そのたびに首を横に振った。一方香織には、謝罪の言葉ばかりではなく、女子からは池口と付き合うことを羨ましがる言葉や男子からは池口の悪口などを言われていた。後者に関しては、すぐさま池口本人が飛んできて妨害していたのでほとんど聞けなかった。が、みんなはなんだかんだ言っていても二人のことを祝福しているようだ。
しかし、私は一つ気になることがあった。あの三人組だ。特に亀田さんは池口のことが好きだと言っていた。絶対にほっておくはずはない。が、私の予想ははずれた。香織に対して何のアクションも起こしてこない。
「……亀田さんは諦めたのかな」
「え？」

体育で着替えるため、体操服を頭からかぶって顔を出した香織は驚いた表情をした。
「あ……そういえば亀田さん池口くんのこと好きって言ってたよ……ね」
見る見る香織の顔が暗くなっていった。そんな香織の肩をぽんっと叩いた。
「なんで香織がそんな顔しなきゃいけないのよ。……初めから池口が香織のこと好きだったんだから。香織を責めるのはお門違いよ。ま、それは亀田さんもわかってんじゃない？何も言ってこないし」
「そ、そうかな」
「そうそう。ほらっ、外早く行こ。私らしか教室いないよ」
香織の手を掴み下駄箱へと急がし足で向かった。
外に出ようと土足に履き替えようとした。が、そこでおかしなことがあった。私の靴がびしゃびしゃに濡れていたのだ。外は雨など降っていない。
「……どうしたの、らむ」
下駄箱の前で動かない私に不審に思ったのか、外に出ていた香織が不思議そうにこちらを見ている。
「ごめん、トイレ行きたくなっちゃった。香織、悪いんだけど先に行っててくれない？」
「えぇ！急いでいかなきゃ。……じゃあ私先に行ってるよ？」
「うん。すぐ行くから」
結った髪を揺らしながら、香織の背中は遠くなっていった。それを見届け、靴を取り出した。スニーカーは水のせいで重くなっている。
――わざと……だよね。一体誰が。
否応なく、あの三人組の顔が浮かんだ。しかし、すぐに香織の言葉が浮かんだ。
『その人が自分から言ってくるのを待ちたいから』
私は三人の顔を消すように頭を振った。

――そうだよ。私が変に疑ったら、さっきの香織の言葉が嘘になっちゃうじゃん。……ぬ、濡れてても履けるよ！

そう思い、びしゃびしゃの靴を履くと、一気に靴下が濡れた。気持ち悪かったが、幸いなことにみんなに靴が濡れていることはバレなかった。

が、やはり体育の集合時間には遅れてしまい、体育が終わったあと私一人だけ使った道具をしまう仕事を先生から与えられてしまった。みんなが教室へ帰るなか、私だけ倉庫へと道具を運んだ。香織だけは私と一緒に片付けるのを手伝ってくれた。

「……これで終わりだよね。お疲れ様、らむ」

「お疲れ様。本当助かったよ。ありがとね」

笑いながら首を横に振る香織。体育倉庫から教室へと二人で肩を並べて教室へと歩いていく。

着くと、みんな着替えている最中だった。私と香織もそれぞれ自分の席に分かれた。が、またそこでおかしなことがあった。

――つ、机が倒れてる。

椅子の方へ倒れており、見事に教科書やノートがぶち撒かれている。当然、机の上に畳んでいた制服も床に乱れ落ちていた。

呆然とする私を気の毒そうに、近くの子が恐る恐る話しかけてきた。

「ら、来夢ちゃん……それ、帰ってきたときにはそうなってたみたいなの。ごめんね、着替えたら直そうかと思ってたんだけど……」

「え、あ、いいのいいの。元々バランスが悪い机だったから……」

笑いながら机を直し、教科書やノート、制服を机の上に置いた。笑う私に安心して、その子も笑った。ちらりと香織を見るとこちらには気がついていないようだった。内心ほっとした。香織が見たら大騒ぎしそうだ。

ふと、誰かに見られているような気がした。そちらをちらっと見ると、亀田さんたちの方向だった。目が合うこともなく、三人組は何か話している。首をかしげながら私は着替えを始めた。

昼休憩になり、いつものように香織と一緒に外へ出た。楽しく雑談をしたが、私は靴のことや机のことは言わなかった。幸せそうに笑う香織に、これ以上の心配をかけさせたくなかった。それに私の勘違いかもしれない。昼休憩中、香織は笑顔を絶やさなかった。それを見ると私のもやもやした気持ちも少し軽くなっていった。

が、またおかしなことがあった。授業は終わりクラブへ行くと、みんなの様子がおかしい。挨拶は返してくれるものの、冷たい言い方だった。一人ならまだしも、同級生みんながそういう態度だった。不思議に思いながらも、クラブは普通に始まっていく。最初にキャッチボールをするのがメニューになっている。当然キャッチボールは一人ではできない。いつもなら、近くにいる人が私と組んでくれていた。が、今日は声もかからなかった。

「……わ、私と組んでくれる人いない？」

いつもとは違う雰囲気に恐る恐る声を出した。周りでは、私の声を無視するかのようにみんなキャッチボールをしている。

――ど、どうなってるのよ……。私なんかしたっけ……。

一人呆然と立っていると、一人後輩が近づいてきた。

「先輩、私でよければ相手しましょうか？」

「あ、うん。よろしく！」

ほっとして、思わず頬が緩んだ。が、その後輩は周りをちらちらっと見ると、私の耳元に口を寄せ囁いた。

「先輩、先輩方がすっごい怒ってましたよ」

「え、どうして？」

釣られて小声で聞き返した。すると、後輩は驚いた表情しながら言った。

「え？先輩が、クラブのことなんてどうでもいいって言ったからですよ」

「は？誰が言ったのよ、そんなこと」

「いや、ですから木元先輩ですよ」
目の前が真っ暗になるような感じだった。呆然とする私に、不審そうに後輩が顔を覗いてくる。
「……あ、その顔はそんなこと言っていないんですね！そうですよね！よかったぁ」
「言うわけないよ。ってそれは誰から聞いたの？」
「わからないです……先輩たちが言っていたのが聞こえていただけだったので。でも、よかったです。先輩そんなこと言う人じゃないですもん」
安堵の表情を浮かべ、その後輩は私から少し離れそのままキャッチボールを始めた。
しかし結局同級生と話すことはできなかった。誰から言われたのかは知らないが、最近クラブを集中していなかったのは事実だった。きっとそのせいで、私が本当に言ったのだと信じたのだろう。昼休みになくなったと思ったもやもやした気持ちが、余計にひどくなってしまった気がした。

【夢】19．溢れ出す感情

眠ると否応なく夢幻郷へ来てしまう。今日も気づくとベッドの横に立っている。今日はあえて窓を開けっぱなしにしておいた。暗く音もしない世界に一人っきりなのは、つらかった。

しゃがみ込み、今日起こった出来事を思い起こした。

濡れた靴、倒された机、散らばるノートと制服、そしてクラブに流されたデマ。

――どうしてこんな目に合わなきゃいけないのよ。

やはり誰がやったのか気になった。が、浮かんでくるのはあの三人組だった。どう考えてもあの人たちしかいない。

――でも、なんの証拠もない。下手に騒げばまた香織に迷惑かける……。それに違うかもしれない。

一人考えれば考えるほど、もやもやした気持ちが広がっていく。

誰かに聞いてもらい。そう思った。が、幸せそうな香織にこの話題を言うのは申し訳なかった。なにより心配させたくなかった。

クラブのみんなに愚痴ろうかと思った。が、デマのせいで会話どころではなかった。正直なところショックだった。香織と一緒にいるよりも、時間を多く付き合っている仲だ。きつい練習にも一緒に耐え、励み、一緒に泣いたり笑ったりしてきた。痴話げんかぐらいなら何度かあった。が、口を利かなくなるほどのものではなかった。クラスのみんなから無視されたことよりも、クラブの同級生からの無視のほうがつらかった。今まで築いてきた信頼が一気に崩壊された気分だ。

――どうして……。なんで……。

誰かに聞いてもらいたい。が、今いる夢幻郷は私にとって最悪の場所だった。暗く静か過ぎる空間。私の中で巡る悪い考えがずっと滞ってしまう感じがした。

――私以外誰もいない……誰も私のことなんて心配していないんだ。

前向きと思っていたはずが、この夢幻郷はそんな私の性格さえ変えてしまいそうだった。悲しい。苦しい。
「……もう……つらいよ」
思わず言葉に出てしまう。そんな言葉さえも夢幻郷は許さないかと言うかのように、響くことなくすぐさま消え去ってしまう。
耐えられなくなり、涙が頬を伝っていく。
「……来夢さん」
後ろの窓の方から、低い男の声がした。
「何かあったんですか？」
振り返って窓を見上げると、そこには心配そうな顔をしている時人がいた。
「と、時人……なんで……」
「泣いていたんですか。……何があったんですか？」
慌てて涙を手で拭った。しかし、時人は窓を飛び越えると私の目の前に着地した。そしてそのままひざを折り私の顔を心配そうに覗きこんできた。
「な、なんでもないよ。ちょっと欠伸しただけだよ……」
「……そうですか」
じーっと見つめてくる時人の目線に耐えられず、顔を背けた。時人は黙って立ち上がると、そのままベッドの上に眠る私の近くに移動し、右手を伸ばした。
「来夢さんが言うつもりがないのであれば、実体の来夢さんに聞くまでです。……少し待っていてください」
そういうと時人は寝ている私のおでこに右手をそっとあてた。すると、時人の身体に空洞ができていき、あっという間に時人はいなくなってしまった。前に一度見ているのでそれほど驚かなかった。
さほど時間がたたないうちに、寝ている私のおでこから白い光が出てきた。その白い光は時人の格好をかたどっていき、その白い光の中から時人の姿が現れた。時人はゆっくりと振り返り、私の前に座り込んだ。が、私の顔を見つめるだけで何も言ってこない。

「……み、見えたの？」
「はい」
私がしゃべるのを待っているかのように、時人はそれ以上口を開かなかった。
「……香織とね池口が付き合うようになったのよ。お似合いでしょ」
「そうですね、美男美女のカップルでした」
「……香織と私のクラスの誤解も解けたんだ」
「ですね」
目を泳がせていると、時人はふぅと息を漏らした。
「来夢さん、私は知っていますよ。今どんなにつらい思いをしているのかを」
そっと時人の顔を見た。微笑んでいた。
「私でよければ愚痴の捌け口になります。幸い、この夢幻郷には私のほかに誰もいません。叫ぼうが怒鳴ろうが、文句を言う輩もいませんよ」
時人は少し前に寄ると、私の手を両手で包んだ。
「そんなに泣くのを堪えないでください。一度思いっきり泣けばいいんです。きっとその方が楽になります」
眉間に力を入れていたのが抜けていく。時人の声が寂しかった心に届いて暖めてくれるような、そんな感じがした。何かがこみ上げてくる。精一杯堪えた。すると、時人は私の手を引くとそのまま立膝をつき、そっと抱きしめた。引き寄せられた形になり私も立膝をついた。一瞬頭が真っ白になってしまった。抱きしめている時人が少しだけ温かく感じる。
と、私の中で何かが切れたような気がした。そう思った瞬間、目から涙が溢れ出す。止まらない涙。顔を時人の肩に押し付け嗚咽を漏らし泣いている。恥ずかしさと悲しさ、もやもやした気持ちが涙として出て行く。
そんな私を時人はからかうことなく、ただ黙ってそっと抱きしめてくれた。

私が落ち着いたところで、二人で並んで壁にすがり座り込んだ。
「ありがとう、泣いたらすっきりした」
久しぶりに思いっきり泣いたせいか、声が鼻声になっていた。時人は微笑んだ。
「いいえ。それならよかったです」
「……どうして一昨日と昨日、姿を現さなかったの？」
そう言うと、時人は少し考え込むように俯き、長く息を吐いた。
「……本当は、もう来夢さんの前から消えようかと思いました」
「え？」
「ですが、来夢さんへ嘘をついてしまったことのお詫びを何もしていませんでした。何をすればいいのか、考えていました」
ゆっくりと時人がこちらを見た。まっすぐ私を見つめている。
「先ほどの夢を見て、思いました。今、来夢さんを苦しめている人をやめさせます」
「や、やめさせるってそんなことできるの？」
「私は夢幻郷の住人です。その人に悪夢を見させ、どれだけ来夢さんが傷ついたのかを体験させます」
冗談を言っているようには見えない。淡々をした口調でさらに続けた。
「来夢さんの予想ではあの三人組のようですね。間違いないのか、夢を見ればわかります。違っていても探すまでです。私が必ず来夢さんへの嫌がらせをやめさせます。……それが来夢さんへのお詫びということにさせてください。私にはそれぐらいしかできません」
申し訳なさそうに目線を下げた。が、私は私の目の前から消えるという時人の言葉が引っかかった。どうも最近の時人はおかしい気がする。今までたまっていたものが一気に口から出てきた。
「そ、それはいいんだけど、どうして私の前から消える必要があるのよ。なんで？どうして？嘘のことだって、どうして私に言うのよ。黙っておけば私気づかなかったよ？どうして？ちゃんと答えて」

時人は目を閉じ、大きく深呼吸をした。ぱっと目を開くと立ち上がった。そして、そのまま私に背を向け、窓から外を眺めた。今にも出て行きそうな雰囲気だ。
「ちょ、ちょっと！逃げる気？答えてよ！」
「私は……」
つぶやくような弱々しい声だった。少し黙ったあと、再び時人は口を開いた。が、こちらを向かず背を向けたままだ。
「これ以上来夢さんと一緒にいると、持ってはいけない感情が出てきていることに気づいたんです。絶対に持ってはいけなかった。持つと……つらいだけなんです。だから姿を消しました。嘘のことは、来夢さんに嫌われようが、信用を裏切りたくなかったんです。何より嘘をついているという罪悪感に耐えられなくなった。しかし……そう思う時点で、すでに私は……」
言葉を飲み込むように少し黙り込んだ。大きく息を吸い吐くと、すぐに口を開いた。
「……来夢さんへの嫌がらせがなくなれば、来夢さんがこちらへ来ることができないようにします。本当にすいません。でも、わかってください」
時人は振り返ることなく、そのまま窓から飛んでいってしまった。慌てて立ち上がり、窓から外を見たがすでに時人の姿はなかった。
「なんでいっつもはっきり言わないのよ！言われる身にもなってみろっての！時人の馬鹿！」
歯切れの悪い時人の言い回しに、思わず誰もいない暗い空間に向かって叫んだ。が、当然時人は戻ってこない。
「……こっちに来ないようにするって、時人が私を呼んだんでしょうが！呼んでおいて来ないようにするなんて勝手すぎるのよ！そんなことさせないわよ！」
そんな叫びもむなしく、すぐさまかき消される。私の荒い息だけが聞こえていた。
――来ないようにするって……嘘でしょ。

時人に問うこともできず、また夢から覚めてしまった。

【夢】１９．溢れ出す感情（後書き）

テンポが悪くて申し訳ありませんｏｒｚ
ここまでお読みいただいている方には本当に感謝いたします。私が今、執筆する原動力となっています。
今後ともよろしくお願い申し上げます。

【現】２０．分かり合える関係

今までの中で一番、やりづらい朝練となった。守備の連携もそれほど乱れてはいないものの、ぎこちなかった。練習の最中話しかけるタイミングがなく、あっという間に終わってしまった。が、着替えるときにチャンスがやってきた。

「あ、あのさ！みんな、私がクラブのことどうでもいいなんて言ったこと……信じてるの？」

着替えていたみんなの手が止まった。

「確かに最近はちょっと集中していなかったかもしれない、でも、そんなこと全然思ってないよ」

そう言うと、みんなそれぞれ顔を見合わせていた。戸惑っている。が、一人の子が口を開いた。

「来夢それ本当？何を信じればいいのか……」

「言ってないよ。第一それ、誰に聞いたの」

「……」

再びみんなが顔を見合わせている。が、一人の子が一つ咳払いをすると私の前に歩み寄ってきた。

「実はね、来夢のクラスの亀田さんたちから聞いたのよ。……三人とも同じようなこと言うし、嘘ついているようには見えなかったから」

「か、亀田さんたちですって？いつ！」

「昨日の昼休憩だよ。……わざわざ私のクラスに来たの。でも……確かに今思えば、なんでわざわざ言いに来たのかな」

着替え終えたみんなは次々と首をかしげている。

「で、それを信じたんだ」

あまりいい気分でもなかったので、みんなを睨むように言ってしまった。するとみんな苦笑いを浮かべている。

「あ、いやだってさ、ら……来夢も認めたじゃん。近頃集中してな

かったって。そこに、クラブなんてどうでもいいみたいって言われたらムカってきちゃってさ……」
「そりゃ確かに集中してなかったのは認めるよ！でも、ひどいよみんなして私のこと無視するなんて……。私はそんなこと言ってもないし思ってもない！」
頬を膨らませながら大声で言った。すると、どこからともなく笑い声が聞こえる。
「わかったわかった！そんな顔しないでよ。……そんなこと思ってたら朝早く起きて朝練なんか来ないもんね。今日、来夢が朝来た時点で違うかなぁって思ってたよ、みんな」
「だったら何で話しかけてくれないのよ！」
「なんか……話しかけづらくて、ねぇ」
うんうん、と周りにいる子たちが何回もうなづいている。
「だって、変に来夢も暗い感じだったし」
「なんか本気でそう思ってるのかなぁって思っちゃったんだよね」
くすくすと笑いながら言っている。
「でも、そうじゃなかったみたいだね。よかった、そんな奴じゃないもん来夢。ごめんね、無視しちゃって」
あまりのあっさりとした謝罪に、呆気に取られてしまった。他のみんなも口々に「ごめん」と両手を合わせ拝んでいる。
が、らしい謝り方と言えばそうだった。ねちねちせず、サバサバした関係。試合に負けても誰を責めることもなく、試合に勝てば思いっきり喜ぶ。時間を多く共にして、それぞれどんな性格でどんな子なのかわかっている。
「言葉だけでもあれだから、今日はおごってあげるよ。だから、みんなカンパしてね」
「おっけー」
笑い合うみんな。その輪の中に私がいる。
「ったくしょーがないなぁ。それで許してあげるよ！」
昨日のもやもやした気持ちはなくなっていた。今、心から笑って

いる。傷ついたのは確かだったが、なぜかその傷は深くなかった。
今日も体育がある予定だ。昨日濡れた靴は一晩で乾いたのだが、今日もやられるかもしれない。少しだけドキドキしながら、香織と一緒に下駄箱へ向かう。
「今日こそは片付け押し付けられないように間に合うように行かなきゃね」
「うん、そうだね」
私の前を行く香織は、そそくさと靴に履き替える。こちらを向いていないのを確認すると、そっと自分の下駄箱を見てみた。
「今日は何もされてない……」
「え？何？」
思わず声に出てしまった。不審そうに振り向く香織。慌てて靴を掴み、地面へ靴を放り投げた。
「え、いや、なんでもないよ」
「ふーん……。あれ、靴の中からなんか出てきたよ」
「え？」
放り投げたせいで、靴は倒れている。その横になっている靴から、なにかの草の根のようなものが出てきた。
「え、なにこれ」
片方の靴を取り上げ、逆さまにしてみると黒土が出てきた。少しの量ではなく、ざらざらと出てくる。黒土と一緒に雑草が何本か出てきた。
「な、なんじゃこりゃ！」
もう一方の靴も逆さまにしてみると同様に黒土と一緒に雑草が出てきた。
「……誰かが入れたのかな」
「かもね。私入れた覚えないし、まさか雑草がこの靴の中から生えてくるわけないしね」
ため息を漏らしつつ、中を綺麗にし靴を履いた。

「ま、いいよ。ほら、香織行こう！」
「う、うん」
濡れた靴よりもマシ。そう思うと別段気にならなかった。が、やはり嫌がらせをしているやつはまだ続けるつもりだということだけはわかった。
今回の体育は遅れることもなかったので、片付けは押し付けられなかった。しかし、一人遅れた子がいて先生はその子に片づけを押し付けた。昨日片付けた身として、一人だと大変だとわかっていたのでその子を手伝うことにした。香織も嫌な顔することなく、三人で一緒に片付けた。
「本当にありがとう、来夢ちゃん香織ちゃん！」
大げさにその子が私と香織に抱きついてきた。よほど嬉しかったらしい。
「うわ、いいっていいって！昨日片付けたときに大変ってわかってたから。ね、香織」
「うん。でもやっぱり三人だと早かったね」
三人で道具を片付けたが、一番最後に教室へと入った。そこで、また昨日のことが頭を過ぎる。また机が倒されているかもしれない。が、倒されてはいなかった。しかし、畳んでおいた制服がなぜか乱れている。不審に思い首をかしげていると、近くにいる子が話しかけてきた。
「あ、来夢ちゃん、今日も机倒れてたよ」
「えっ！そうなの？」
「昨日は直し損ねたから、今日はちゃんとしておいたよ。本当バランスが悪いんだねぇ」
「あ、ありがとう。そうだねぇ……」
笑いながら話すその子は、本当にバランスの悪い机だと思っているらしい。しかし、机が倒れていたことには間違いない。ちらりと亀田さんたちを見てみた。会話までは聞こえないが、口元の動きを見ると『最悪』やら『リアル』と言っているように見えた。それを

見ていると、時人が悪夢を見せると言っていたことを思い出した。
今日はそれ以上の嫌がらせはなかった。が、あの三人組は話しかけても来ないし、といって悪口を言うわけでもない。ただ、ちらちらと見られているような気がした。香織にも同じ態度だったが、文句や悪口を言うわけでもない。というより、べったりというわけではないが香織の近くにはいつも池口がいる。たぶん、池口も香織に嫌がらせをした犯人が気になるのだろう。そう思うと、池口は香織を大切に思っているんだなぁと感心した。亀田さんはその様子を見るとすぐに目を逸らしていた。私にはその仕草が、現実を受け入れていないように見えた。

放課後。いつもならここで香織とは別れる。私はクラブへ行き、香織は家に帰る。が、なぜか今日は香織がクラブへ行くと言い出した。

「なに、ソフト部に入部でもするの？」

からかうように言ったつもりだったが、香織はにこりともせず真面目な顔つきで言った。

「ううん。クラブの人たちにちょっと言いたいことがあって」

「言いたいこと……？まぁ、じゃあ一緒に行こうか」

いつにもまして真面目で少し怒っているような表情の香織。つんとした横顔に首をかしげつつも、一緒に部室へ行った。

「ちわーっす」

ノックもせず、いつものようにドアを開ける。狭い部室の中には同級生がほとんど揃っていた。みんな着替え終え、それぞれの道具を持ち出そうとしているところだった。

「やほ。来夢が今日は最後だね。……あれ、後ろに誰かいるの？」

後ろにいた香織に気づいたらしく、みんな身体を傾け覗き込もうとしている。が、香織が私の後ろから出てきて私の前に出てきた。

「おー初めまして！静山さんだ」

まるでアイドルに会ったかのように、みんなが驚きと歓声の声を

あげた。初対面のはずだが、やはりみんな香織のことは知っているらしい。香織は予想外の出迎えに驚いた表情をしたが、すぐに真剣な顔へとなった。その表情にみんなが少し引いた。
「らむはクラブのことどうでもいいなんて思っていません！らむのこと、悪く言わないでください」
香織が怒ったような声でそう言った。いきなりのことにみんな目を見開き、驚きの表情を浮かべた。私もきっと同じような顔だったと思う。
「らむは何に対しても全力なんです。本当に、本当にそんなこという子じゃないんです！だから……」
「か、香織！あの……どうしたの？」
興奮している香織の肩を思わず掴んだ。振り返った顔は目を潤ませ、泣きそうな顔をしている。
「だ、だって……」
すると、驚いた顔をしていたクラブのみんなが一気に笑い出した。香織はわけがわからないらしく、きょろきょろとしている。
「はは！要するに、来夢のことを私たちがいじめてると思ってきたのね。いじめてない、いじめてない！」
「力で勝負しても私ら負けちゃいそうよね」
笑い合うみんな。その様子が理解できないようで呆然とする香織。私はみんなの前に行き、一番前にいた子の頭を軽く叩いた。
「いて」
「笑いすぎ。……香織、もしかして池口から話聞いたの？」
「うん……。まさ……い、池口くんから来夢の様子がおかしいって聞いたから」
気のせいか一瞬下の名前が聞こえた気がした。香織は申し訳なさそうにうつむき加減だ。が、みんなは池口という名前に反応し、私を押しのけて香織の前に集まった。
「え！まさか……まさかあの野球部のイケメンと……付き合ってるの？」

「え……あの……は、はい」
その後ぎゃーぎゃーとうるさいみんなを落ち着かせ、香織はみんなに疑ってしまったことを謝罪した。が、みんなはそんなこと忘れてしまったかのように、あれこれ池口のことを聞いていた。
どうやら香織は池口からソフト部の様子がおかしいと聞いたようで、わざわざ私のことをかばうためについてきたらしい。香織はどちらかと言えば控えめなほうだったので、これには驚いた。しかし、驚いたよりも嬉しさのほうが強かったかもしれない。あの香織が私のために、わざわざ知らない人が集まる部室へ行ったのだ。池口のおかげなのかは知らないが、香織が少しずつ変わり始めているような気がした。
その日は、クラブが始まる前に香織と別れた。そしていつものようにクラブに打ち込んだ。昨日のことが嘘かのように楽しい時間だった。

家に帰り用事を済ませ、ベッドに横になった。
『嫌がらせがなくなれば、こちらへ来ることができないようにします』
自然に時人の声が蘇ってきた。しかし、今日もそれらしいことがあった。それを考えるとため息が漏れるが、どこか複雑な気持ちになった。

【夢】21．仲違い

ゆっくりと目を開けた。暗い空間に初めてほっとした。どうにも時人の言葉が気になってしょうがない。

――来ることができないようにするって……どうして。

立っていると落ち着かず、部屋の中をうろうろとした。すると、開けっ放しにしている窓の向こうに淡い光りが見えた。思わず窓枠に手をかけた。

「時人！」

そこには空にぷかぷかと浮いて立っている時人がいた。時人もこちらに気づき手を軽く手をあげた。

「昨日あんなこと言ったから、また姿見せないかと思ったじゃない」

「……来夢さんに確認と報告したいことがありまして」

そう言うと、あぐらをかく格好になった。真剣な表情だった。

「嫌がらせはどうなりました？」

「……なくなってないけど、クラブでのデマはみんなと話したら解決したよ」

「そうですか。ひとまずよかった。……来夢さんと別れたあと、亀田冷子さん、山田美加さん、江口未希さんの三人の夢に侵入したんです」

ふと、あの三人組が最悪やらリアルやらと言っていた場面を思い出した。

「そ、そうだったの」

「……あと、夢に侵入して新たにわかったことがあります。たぶん、来夢さんはご存知ないでしょうから」

真剣なまなざしで見つめてくる時人。緊張感がこちらにも伝わってくる感じがした。

「亀田冷子さんですが、池口勝さんが好きのようです」

拍子抜けしてしまった。思わず肩ががっくりと落ちた。

「そのことかぁ。知ってるよ」
「え？」
時人は驚いた表情をした。しかし、私はさほど気にならず、亀田さんというワードでふと思い出したことを口にした。
「……そうそう、亀田さんがクラブの子たちにデマ流したらしいのよ。全く……」
八つ当たりもいいとこだ。どうして私なのかはさだかではないが、迷惑な話だ。思わずため息が出てきた。しかし、時人はその話を聞いていないかのように驚いた表情を崩さなかった。
「知っていたんですか、来夢さん」
「え？亀田さんが池口のことを好きなこと？知ってたけど……どうしたの」
「……なるほど。かわいそうに」
「えっ」
うつむき加減に時人は小さな声でそう言った。
「……夢に侵入するとその人の近況のことばかりだけではなく、気持ちまで伝わってきます」
顔を上げた時人の顔は、少し怒っているかのように厳しい表情だった。
「前に来夢さんの夢を覗かせていただいたとき、香織さんと池口勝さんが付き合っていることは知っていました。それはいいと思います」
いつになく強い口調だった。さらに時人は続けた。
「付き合っていると知った亀田冷子さんの心は、悲しみと嫉妬と怒りで渦巻いていました」
「悲しみと嫉妬と怒り……。でも、池口が好きだったのは香織だったのよ。仕方ないじゃない」
「……来夢さん。その感情の中の怒りはあなたへと向けられているものです」
「わ、私？」

予想外の答えに思わず声が上擦った。時人はうなづいた。一つ息を吐くと再び口を開いた。
「嫌がらせに関しては、亀田冷子さんをかばうつもりはありません。ですが、来夢さんが亀田冷子さんの気持ちを知った上で二人をくっつけようとした行動は理解しかねます」
少し眉間に皺を寄せ、険しい表情だった。さらに続けた。
「以前、亀田冷子さんは香織さんに対し牽制をしたようですね。嫌がらせもその牽制の一部だったようです。……今はそれが良い行動だったのかは置いておきます」
ゆっくりと時人は立ち上がる。
「ですが、休み明けに突然の交際宣言。……亀田冷子さんの心は大きく乱れます。そして間もなく、クラスの人から休日にドリームフィールドパークで四人を見かけたという話を聞きます」
「四人って……香織と池口と新拓さんと私のこと？」
「えぇ」
立ち上がった時人は少し窓のほうへ近づいた。手を伸ばせば届く距離にいる。
「二人が仲良く歩いているのを見た、それを聞いた亀田冷子さんは傷つきます。どうして付き合うのか、私の気持ちを知っていて付き合うのか、私への当て付けなのか……。池口勝さんが香織さんと付き合うことになってしまったことへの悲しみ。そして、香織さんへの嫉妬……話を聞いた直後の亀田冷子さんの心は乱れていました。しかし、二人を結びつけようとした人が来夢さんだと聞いたとき、怒りが一気に沸き起こります。……自分に振り向いてくれなかった池口勝さんでもなく、好きな人を奪った香織さんでもなく……怒りの矛先は来夢さんへと向いたのです。なぜ、関係のない来夢さんなのか不思議でしたが……話を聞いてなんとなく理解できました」
伏目がちに時人は黙っていた。何か考え込んでいるようにも見えた。その沈黙に耐えられず私は重い口を開いた。
「……私が亀田さんの気持ちを知っておきながら、二人をくっつけ

ようとしたから？だから私に嫌がらせをしたってことなの。……悪いけど、私には理解できない」
そう私が言うと、ゆっくりと目線を私に戻した。
「どうしてですか」
怒ったような、冷たい目だった。私も時人の考えが理解できず、どんどんと頭の中が熱くなっていく。
「どうしてって……好きだからって理由で香織に嫌がらせしていいわけ？最初にノートやら手紙で香織に嫌がらせしてきたのは向こうよ。しかも、そのことで傷ついた香織をみんなの前に晒して、最後は自作自演だとみんなに思い込ませて私たちをクラスののけ者にして……。そんなこと許してもいいわけ？」
時人は表情を変えずに、ただ私の言うことを聞いていた。
「私は池口の様子と香織の態度を見てたら、お互い好き合ってるんじゃないかなって思ってドリームフィールドパークに誘ったのよ？それが勘違いだったら悪かったけど、結果的に付き合うようになったからいいじゃない。池口はずっと香織のことを見ていたのよ。このことは間違いないわよ。その二人を結びつける私が間違ってるの？だから怒りの矛先を向けられなきゃいけないの？それってただの逆恨みじゃない」
時人はゆっくりと口を開いた。言葉を選ぶように。
「……逆恨みではない、と私は思います」
「じゃあ何なのよ」
「それは……直接亀田冷子さんに聞くべきです。これ以上、私の口からは何も言えません」
また流れる沈黙。時人は黙ったまま私を見つめている。私はわけがわからなかった。なぜ今更、亀田さんをかばうのか。窓枠を掴む手に力が入る。
「何なのよ……私への嫌がらせをやめさせるんじゃなかったの？まさか、昨日のあの態度も言ったことも全部嘘だったってこと？」
すると、時人ははっとした顔になった。

「違います！あれは嘘なんかじゃ……」
「じゃあなんで今更亀田さんをかばうような言い方するのよ！」
勢いで口を開こうとしていた時人だったが、それをやめ落ち着くように大きく深呼吸をした。
「……本当に嫌がらせを終わらせようと思って、三人の夢の中に侵入し、夢を作り上げました。嘘なんかじゃありません」
「だったら何で亀田さんのことをかばうのよ！」
すると、時人はうつむき少し間を空けた。そして息を吐きゆっくりと顔をあげた。
「思いを告げることができなかった悔しさ。自分の知らないところで、好きな人が他の誰かと一緒にいる悲しさ。そういう気持ちが……わかるから」
悲しげな顔だった。いつの間にか目の前に立っている時人だったが、またゆっくりと後退していく。
「前に言ったように、嘘をついたお詫びとして来夢さんの嫌がらせは必ずやめさせます。しかし、亀田冷子さんの気持ちを知ってしまい、これ以上悪夢を見せることを躊躇しているのも事実です」
時人はそう言うと申し訳なさそうに目線を下げている。少しずつだが窓から離れていく。
「……何度か悪夢を三人に見せればきっと嫌がらせはなくなるでしょう。ですが、その前に一度亀田冷子さんと直接話をしてほしいんです」
真っ暗な空間の中、淡い光を放っている時人だけが浮かび上がっているかのように見える。
「話をしても嫌がらせがなくならないようでしたら、再び私が夢に侵入します。来夢さんを助けたいと思うのは本当です。ですが、どうしてあんなことをしたのか、本当の気持ちは何なのかを聞いてみてください」
「ちょ、ちょっと時人！」
どんどん離れていく。思わず手を伸ばしたがもう遅かった。

「……私は夢の人。来夢さんは現の人。それは私にとって悲しい現実です」
ぽつんと浮かんでいる時人。真っ黒なキャンパスに、ただ一人時人は立っている。その姿はどこか寂しい。
「現の人である来夢さんは、きっと私なんかの力を借りずとも解決できますよ。しかしそれでも……私は来夢さんの味方です」
そう言うと手を振り、どこかへと飛んでいってしまった。
時人が消えた直後、現実へと誘われた。

【夢】２１．仲違い（後書き）

お読みいただきましてありがとうございます。更新が遅れてしまい申し訳ございませんでした。

最近、この作品に自信がなくなってしまってずっと読み返していました……。自分で言うのもなんですが、【現】と【夢】が交互に来ると話がぶちぶち切れていますね（泣）皆様が内容を理解していただけているのかものすごく不安です……。

今更やり方を変えるのも遅いのでこのままでやらせていただきます、申し訳ございません。

完結できるように頑張りたいと思います。どうかお付き合いのほど、よろしくお願いいたします。

【現】22．目撃

朝から昼休憩が始まるまで、ずっと機会をうかがっていた。私の斜め後ろの、一番後ろの席に陣取っているあの三人組。会話までは聞こえないが、笑い声を上げながらしゃべっている。亀田さんも笑い顔を見せていて、本当に心が傷ついたのかと疑問に思うほどだ。朝からずっと三人組の様子を見ていたので、向こうも何度かこちらに気づき怪訝そうな顔をしていた。今も休憩開始のチャイムが鳴り、授業が終わってからずっと見ている。

「……らむ？何を見てるの？」

いつの間にか机の隣に香織が立っていた。財布を持ち、不思議そうな顔をしている。

「わ！びっくりした……」

「昼休憩だよ？ほらっお昼行こう」

「あ、うん」

香織がせかすように私の腕を掴んだ。私はかばんの中から弁当を取り出し、再びちらりと亀田さんたちの方を見てみた。すると、先ほどまでいた三人は亀田さんだけになっていた。

「あれ……どこいったんだろ」

「うん？どうしたの？」

香織も私が見ている方向に顔を向けた。香織も理解したようで、小さな声で「あー」と言いつつうなづきながら答えた。

「山田さんと江口さんのことだね。ほら、朝先生が言ってたじゃない、風紀委員は昼休憩に会議あるって」

「あ、そうなんだ……。ねぇ香織」

私の声に反応して、香織はこちらを向いた。

「亀田さんも……お昼誘ってみない？」

「え？……い、いいけど」

「ありがと、じゃあ誘ってみよ」

席を立ち、香織と一緒に亀田さんの席へと行った。香織は少し困惑している様子だった。
亀田さんの机のすぐ横に立ち並ぶ。亀田さんは売店で買ったおにぎりやジュースの入ったビニール袋をかばんから取り出していた。
「あの……亀田さん」
身体を起こした亀田さんは、一目私たちを見ると目を少し見開き驚いた様子だった。が、それは一瞬だった。すぐさまにっこりと笑う。
「わーびっくりしたー。どうしたのー？二人揃ってー」
久しぶりに間近で見たが、ぷっくりとした唇に大きなバスト、椅子に座っていても分かるスタイルの良さ。香織も相当かわいいと思うが、色気は亀田さんのほうが勝っていると思った。ちらりと横目で香織を見ると、顔を背け気まずそうだ。
「今からお昼なんだけど……一緒にどうかなぁって」
「私と？」
眉がぴくっと動いた。笑っていた顔が一気に真顔になり、眉を寄せ見るからに不快そうだ。
「なんで？私が寂しそうに見えた？それとも同情？」
いつものぶりっこ声ではなくなっていた。強い口調だった。
「違うよ。……いろいろ話したいことがあってさ。ずっと亀田さんが一人になるのを待ってたんだ……」
「ふーん、だから今日ずっとこっちを見てたんだ。……別にいいよ。あんたたち外でいっつも食べてるんでしょ？」
そういうとビニール袋を手に、席を立った。むすっとしているが、了解を得たようだ。思わずほっと安心した。
「ありがと。じゃあ行こう。ほら、香織も」
「う、うん」
亀田さんは睨むように香織を見ていたが、香織は一度も亀田さんを見ていなかった。

いつも横並びのベンチに座るのだが、今日はテーブルがあるものに座った。私と香織、テーブルをはさんで向かい側に亀田さんがむすっとした顔でおにぎりを食べている。いつもは香織がいるだけで視線を集めていたが、今日は亀田さんもいる。そのせいか普段は見てこないような男子まで、亀田さんの色香に誘われ、ちらちらとこちらを見ていた。

「こんなに人目晒されて、よくご飯食べられるわね」

ぼそっと亀田さんが言った。さっきからみんなに見せている態度と違っている。ぶりっこのという化けの皮が剥がれ、今はわがままなお嬢様という感じだ。

「外で食べると気持ちいいじゃない。ね、香織」

「そ、そうだね」

そんな態度でも別に驚かなかった。むしろ弱みを見せるとそこにつけこまれそうな気がした。しかし、香織は先ほどからずっと伏目で、にこりともしていない。そんな様子に亀田さんも気がついているようで、にやりと口の端を釣り上げながらこう言った。

「香織ちゃん、本当はー木元さんなんかと食べるより、池口くんと食べたいんじゃないのー？」

「え……そ、そんなことは」

「えー二人って付き合ってるんでしょー？昨日みんなの前で言ったじゃない。それとも、もう池口くんに飽きられたとかー？」

くすっと亀田さんは笑っている。いつものにっこりとした顔になっていた。一方、香織は文句を言うこともなく、ただただ黙り込んでいた。

「ちょっと、すぐに飽きるわけないじゃない。第一、池口が香織のことを好きだったのよ。私と一緒に食べるのはいつもの……」

その時だった。笑った顔は一瞬になくなり、亀田さんは私を睨みつけながら、バンとテーブルを叩いた。

「うっさいわね！そんなことわかってるわよ！」

いきなりのことで思わずびくっとした。香織も驚いたようで、顔

を上げ亀田さんを見ていた。
「何の関係もないあんたにわかったような口利かれたくない！それとも、なに、それを言うために私を昼に誘ったの？」
鋭い目つきで私を睨みつける。目が怒っている。すると、椅子から立ち上がった。
「あんたの顔見ながらご飯食べたくない。……もう口も利かないで」
ビニールを持つと、私たちに背を向けた。すると、香織がいきなり椅子から立ち上がった。
「待って！」
その場を去ろうとした亀田さんの背中が止まった。振り向かない亀田さんに構わず、香織は言った。
「わ、私も池口くんのことが好きだから！だから、付き合ってるの！」
香織の頬は赤く染まっていた。しかし、言葉には強い意志が伝わってくるような力強いものだった。私は思わぬ香織の主張に呆然としてしまった。亀田さんは振り向くこともないまま黙っていたが、そのまま何も言わずその場を去ってしまった。その後ろ姿を見送りながら、香織はぺたんと椅子に座った。
「……やっぱり怒ってたんだね」
香織は椅子に座るなりため息を漏らした。まだ頬の赤みは引いていない。
「……でも、なんであそこまで怒るのかな」
私は思わず首をかしげながら言った。しかし、香織はテーブルをぼーっと見つめたまま、考え込むように黙っていた。
あっという間に掃除時間となった。香織とは班は別々だったが、今日の掃除場所はたまたま一緒だった。が、掃除場所が校門で靴に履き替えなければいけない。夏になると日差しが避けられない場所で、みんなが嫌がる掃除場所となる。私と香織もしぶしぶ下駄箱へと向かった。

「……香織。早めに終わらせて、早く日陰に入ろうね」
「そうだね」
二人並んで下駄箱に着くと、見覚えのある二人が私の靴を持っているところを見つけた。ストレートの長髪と、お団子の髪型の後ろ姿だ。
「ちょっと、何やってんのよ！」
そう私が叫ぶと、その二人はびくっとしてゆっくりと振り返った。
「山田さんと江口さん！」
口に手を当て驚いた表情で、香織が叫んだ。私は後ろ姿でなんとなく予想をつけていたのでさほど驚かなかった。二人は互いの顔を見合わせると、苦笑いを浮かべた。それぞれの手には片方ずつ私の靴がぶら下がっている。汚いものを持つかのように、指に当たる最小限の状態で、ぶらぶらと靴が揺れている。
「なんで私の靴を持ってるのよ」
指を差しながら言うと、二人は私の目の前に靴を放り投げた。転がってきたアスファルト上には靴の後のようなシミがついている。転がってきた靴にも砂がつき、汚い状態だった。香織も不思議に思ったのか、片方の靴を拾い上げようとした。靴に触れるや否や、私の顔を見上げた。
「らむ、濡れてる！」
私も片方の靴を取り上げた。靴はびしゃびしゃに濡れ、重くなっていた。すると、長髪の髪を風でなびかせながら両手をはたく山田さんが口を開いた。
「見られたら言い逃れできないわね」
「マジ、タイミング悪すぎ」
同じく何度か手をはたいた江口さんも、平然とした様子で私を見ていた。香織から濡れ砂がついている靴を受け取ると、二人を見た。
「……一昨日と昨日と、靴にイタズラしたのもあんたたちなの？」
聞こえているのか、それぞれ手の爪を見ていた。
「私の机を倒したのも、クラブにデマを流したのも……香織に嫌が

らせをしたのも、全部あんたたちなの？」
山田さんと江口さんはだるそうに立ち、髪の毛の毛先をいじったり爪を見ていたりしている。その態度に腹が立った。全く反省の色が見えない。
「どうなのよ！」
思わず叫んだ。すると、二人はまただるそうに息を吐くと、山田さんが顎で江口さんに言うように促した。
「そうよ、全部うちらがやったの。……気が済んだ？」
「なっ……他に言うことがあるでしょうが！ばっかじゃないの？」
すると、いきなり山田さんが舌打ちをした。一重の鋭い目つきで私を睨みつけた。
「うちらは冷子に言われてやってたの。だからぁうちらには文句言われる筋合いはないわけ。むしろ被害者なの、わかる？」
「被害者？笑わせないでよ。誰に言われてやろうが、実行したのはあんたたちでしょうが。謝んなさいよ！」
すると、二人がケラケラと笑い出した。手を叩き、腹を抱え笑っている。その様子に香織も私も唖然とした。
「マジちょーウケるんだけど！」
「超必死、超うぜぇ！」
二人は笑いながらそう言うと、私たちの横を通り過ぎようとした。
「なっ！待ちなさいよ、まだ話は終わってないわよ！」
通り過ぎようとした山田さんの腕をとっさに掴んだ。すると、山田さんは掴まれた腕を見るや否や私の手を振り払った。
「触るんじゃねぇよ。なんでうちらが謝んなきゃいけねーんだよ。冷子が指示したっつってんだろ。マジうぜぇな」
合ったその目は冷たく感じた。本当に何も思っていないんだと直感した。呆然とする私を鼻で笑うと背中を向けた。その二人を見ながら、隣にいた香織が二人に向かって叫んだ。
「わ、私二人が謝りに来るの待ってるから！」
背中を向けた二人の、お団子頭の江口さんが背中を向けたまま手

を挙げた。
「冷子が謝ったらうちらも謝ってあげるよ、香織ちゃん！まーないと思うけどね！」
キャハハと笑う声は、廊下の奥に消えても響いていた。

その後二人は終わりのＳＨＲが終わっても、私たちに何も言ってこなかった。私はこのままでは引き下がれないと思い、帰ろうとする亀田さんを引き止めた。帰りはいつも三人で教室を出ていたと思うが、今日はたまたま一人だった。香織も亀田さんと話したいらしく、私の後ろで様子を見ていた。
「亀田さんちょっといい？」
私の声に反応し、ゆっくりと振り返った。
「……昼に口効くなって言わなかったっけ？」
「掃除時間に、山田さんと江口さんが私の靴にいたずらしてるとこ見たのよ。で、二人が言うには亀田さんから指示されたから私たちは悪くないって言ってたんだけど」
そう言うと亀田さんは目線を落とし舌打ちをした。何も言わず黙っている。私は続けた。
「そのことで話がしたいのよ。私、今日クラブ休むから香織と三人でママレード行こうよ。ここだったら亀田さんも話しにくいでしょ？」
教室には半分ほどの人数が教室に残っていた。今もちらちらと視線を感じる。亀田さんは一つため息を漏らすと、ぼそっと言った。
「……わかった」
「ありがとう」
私は後ろでじっと様子を見ていた香織を手招きし、三人で一緒に教室を出た。

【現】23．本音

たいした会話もないまま、三人でママレードの店の前までやってきた。入り口の扉を開けると、渇いたようなカランカランという鐘の音が響く。店内を見回すと、十席も満たない席にちらほらと坂都生の姿が見えた。誰も会話に夢中で、鐘の音など気にもしていなかった。

「いらっしゃい。学校お疲れ様」

店長のあいさんは、花柄のエプロンに今日は朱色のバンダナを頭に巻き、普段と変わらない格好と笑顔でカウンターの後ろから迎えてくれた。私たちは通りに面した窓側のテーブルに座った。奥から香織と私が並んで座り、向かいには亀田さんが座った。窓越しの通りを見ると、家路へと帰る学生や自転車に乗った学生が疎らに見える。座り一息つくと、あいさんがおしぼりを運んできてくれた。

「ケーキセット三つください」

「はいはい、少し待ってちょうだいね」

優しい笑顔でお辞儀をすると、あいさんは小走りにカウンターへと戻っていった。

「亀田さん」

私の呼びかけに、目の前に座る亀田さんは腕組みをしたまま視線をこちらへと向けた。

「さっきも言ったけど、二人は私への嫌がらせと香織の嫌がらせを認めたよ。二人が言うには、亀田さんが指示したからやったらしいけど……それは本当なの？」

表情を変えないまま、私の顔を見ている。少し間を空けると、亀田さんは落ち着いた声で言った。

「そうよ。私が二人に頼んだのよ」

教室でいつも見る、にっこりとした亀田さんでもない。人を馬鹿にするような顔でもない。ただ淡々とした表情だった。見つめられ

る瞳には何の思いも感じられない。腕組みをする亀田さんは姿勢を崩さないまま、じっと私を見ていた。少し沈黙が流れていると、あいさんがケーキセットを三つ運んできてくれた。
「はい、ケーキセット三つね。ごゆっくり」
にこっと笑うとあいさんは再び背を向けカウンターへと戻っていった。亀田さんはさっそく運ばれてきたケーキセットのショートケーキにフォークを入れた。そして一口食べ、まんざらでもない表情で何度かうなづいている。
「ちょっと、それだけ？」
思わず口に出た。が、私の言うことを無視するかのように再びケーキにフォークを入れた。すると、隣に座っている香織が「亀田さん」と言うと、反応した亀田さんが視線をケーキから香織に移した。
「どうして……そんなことを頼んだの？」
亀田さんはケーキに差していたフォークを皿の上に置いた。ケーキと一緒に運ばれてきた紅茶の入ったティーカップを手に取り、一口飲んだ。
「池口くんを取られたくなかったから」
そう言い、再びティーカップに口をつけた。亀田さんは飲みながら窓越しの通りをぼーっと眺めている。反省をしている風でもなく、その言葉にも何の気持ちも感じられない。私たちのに何か訴えるわけでもない。私が口を開こうとした瞬間、それに気がついた香織が手で制した。香織を見ると、いつになく真剣な表情だった。亀田さんを見る目が一段と厳しい。じっと亀田さんを見つめ、瞬きを忘れているのではないかと思うほど強い眼差しだった。
「私……亀田さんが最初に池口くんにアタックしようかって思ってるって聞いたとき、まだ池口くんのこと何とも思っていなかったよ」
「……そう」
「取られたくなかったって……どうしてそう思ったの？」
すまし顔で外を眺めていた亀田さんが突然、持っていたティーカップを乱暴に置いた。

ようやく目を合わせた亀田さんだったが、怒ったように頬を赤らめている。眉間に皺を寄せながら、堰を切ったようにしゃべりだした。
「……何なの？さっきからあんたたちは私に何をしゃべってほしいわけ？確かにあんたたちにやった嫌がらせは全部私が指示したことよ。だから何だって言うのよ」
熱くなっている亀田さんとは対照的に、香織は至って冷静な口調で言った。
「亀田さん、きっとまだ本当のことを隠していると思う。それを話した上でちゃんと謝ってほしいの」
「謝れ？なんで私があんたたちに謝んなきゃいけないのよ！」
その大きな声のせいで一瞬あいさんがこちらを見た。が、すぐにカウンターの下に目線を落としている。一方亀田さんは、冷たく恐怖さえ覚えるような目つきで私を睨んできた。亀田さんが握りこぶしをわなわなと震わせながら言った。
「大体あんたのせいで……！」
が、それ以上言うことなく唇を強くかみ締めている。私はわけがわからず、その様子をただ黙ってみるしかなかった。一方、香織はなだめるような優しい口調で話しかけた。
「きっと……亀田さんにも何かの思いがあってこんなことをしたんでしょ？それが私への誹謗中傷であっても聞きたい。じゃないと私……池口くんとちゃんと向き合えない」
香織は申し訳なさそうに目線を落としている。
「ずっと心の隅に引っかかってるの。私、亀田さんから池口くんを奪ったんじゃないかって」
香織はゆっくりと息を吐くと、すっと顔を起こした。
「でもだからって……池口くんと離れたくない。私も取られたくないから」
その顔は真剣そのもので、強い意志が見られるような表情だった。睨んでいた亀田さんも少し圧倒されているのか、顔の力が抜けてい

っているようだ。
「あっそ……。結局、私の嫌がらせが香織ちゃんと池口くんを引き合わせる結果になるなんて……馬鹿みたい」
自嘲するかのように亀田さんは鼻で笑った。残ってた紅茶を一気に飲み干し、残っていたケーキも二口ほどで食べた亀田さんは、一呼吸入れるとうつろな表情でしゃべり始めた。
「……私一年の時からずっと池口くんを知っていたのよ。たまにこっそり試合なんかも見に行ったりして……気づいたらずっと池口くんばかり見てた」
その言葉で、夢幻郷の時に忍び込んだ亀田さんの部屋を思い出した。池口の写真があったのだ。
「でも池口くんは私のことなんて見向きもしなかった。……だって池口くんもずっと香織ちゃんのことを見ていたんだもん」
「え……それじゃ、亀田さんは池口が香織のことを好きだってこと知ってたの？」
驚く私を亀田さんは視線だけちらりと見たが、何も言わず再び視線を落とした。
「……それでも諦めなかった。私は自分に自信があったから。女子も男子も私のことを誉めてくれる、きっと池口くんも私のことを見てくれると思った。だけど、池口くんはそんなことなかった。だから池口くんと同じように学級委員長になった。私のことを見てくれると信じて。だから今だと思った。気持ちを伝えるのはこのタイミングだと思ったわ。だけど、席替えで池口くんの隣に香織ちゃんが来たのよ」
亀田さんは大きく息を吐いた。
「……悔しかった。何もしていない香織ちゃんに池口くんは嬉しそうな顔をしてしゃべってた。正直ムカついたわ。なんで私じゃないのってね。だから、嫌がらせをした。池口くんに近寄るとこうなるってことを分からせるためと、二人を引き離すためと。……あの朝のＳＨＲで香織ちゃんをクラスから浮かせることができて、ようや

く想いを伝えられるチャンスだと思った。ずっと想っていたこの気持ちを伝えられるんだってね。だけど……」

再び亀田さんは握りこぶしを作り、力がこもっているのかぷるぷると震えていた。

「週明け、いきなり二人が付き合うと言い出した。ショックだった。香織ちゃんの肩を抱いていた池口くんの顔は……私も見たことないような嬉しそうな顔だった。あんな顔を見たら……想いを打ち明ける気にもならなかった。もう……私にはチャンスさえなくなったんだと思った。でも、どうしていきなり二人が付き合うようになったか不思議だった。……でも友達が教えてくれたのよ。木元さんが二人をくっつけようと遊園地に誘ったってね」

冷たく鋭い視線が私に向いた。

「……あんたは私の想いを踏みにじってくれたのよ。ようやく想いを伝える決心がついた矢先だったのに……それさえもできなかった。香織ちゃんが池口くんに告ったならまだしも、何の関係もないあんたにそれを阻まれるなんて思いもしなかったわ。それなのに、あんたは『池口は香織のことが好きだった』の一点張り。……ふっ笑っちゃうわよね」

そういうと亀田さんは立ち上がった。かばんから財布を取り出し、テーブルの上にお金を置くとかばんを肩から提げた。

「納得した？これが私の本音。もう私から話すことはなにもないから。嫌がらせももうしないからこのことは誰にも言わないで。じゃ」

髪をかき上げながらその場を去ろうとする亀田さんのかばんを、香織はとっさに掴んだ。

「待って！亀田さんは……それで本当にいいの？」

握っている香織の手に力が入っているのか、かばんに皺が寄っている。亀田さんはすぐに香織の手を振る払うことはせず、黙っていた。その横顔は怒るわけでもなく、ただ呆然とうつろな瞳だけが見えた。

「……もういい。香織ちゃんが池口くんのことを好きなら、私の出

る幕なんてないもの」
　そう言うと亀田さんはぐっとかばんを引っ張った。その力に負け、香織はかばんから手を離した。そして、亀田さんはママレードの入り口の扉へと足早に行き、あの渇いたような鐘のカランカランという音が聞こえてきた。
　寂しそうな亀田さんの背中を見送ったあと、私の心が急に締め付けられる感じがした。胸に手を当てるとドキドキと私の心臓は忙しく動いていた。何か落ち着かない。嫌がらせもやらないと言ったし、なぜ嫌がらせをしたのかもわかった。全て解決するはずだ。そう頭でわかっていても、動悸は収まらなかった。
「香織……私は……どうしたらいいの」
「え？」
　動悸を落ち着かせようと思わず言葉が出た。しかし、それでも止まらない。じっとしていられなかった。すっと立ち上がる。
「私、亀田さんの気持ち知ってた。なのに、私無視してたのよ……。池口と香織が好き合ってるんだから、亀田さんの気持ちなんて関係ないって。……嫌がらせのことを許したわけじゃないけど……このままじゃ私の気持ちが治まらない！」
　私はかばんを手に持ち、香織に頭を下げた。突然のことに香織は慌てているようだ。
「ちょ、ちょっと。らむ、いきなりどうした……」
「ごめん香織。私、亀田さんと池口を二人で話をさせたい！」
「えっ」
　香織の動きが一瞬止まった。私は頭を下げたまま続けた。
「すっごい自分勝手なこと言ってると自分でも思う。でも……このままじゃ亀田さんに申し訳ないの！二人だけにすることが正解なのか間違いなのか全然わからない。でも、でもこのままじゃ……」
　すると、ぽんと香織が私の肩に手を置いた。そっと顔を上げてみると、香織が微笑んでいた。
「らむ。どうして、らむが私に頭下げなきゃいけないの？」

「だ、だって、池口は香織の彼氏でしょ……それなのに……」
「……私は池口くんのこと信じてるから」
にこっと香織が笑った。しゃべる前に一息吐くと、香織は言った。
「……私も、亀田さんはもういいなんて言ってたけどたぶん違うと思う。だからきっと、らむの行動は間違いじゃないよ。でも私は……ケーキ食べたら先に帰るね」
そう言うと香織は椅子から立ち上がり、道を避けてくれた。
「ほら、きっとまだ遠くに行っていないよ。らむの運動神経なら追いつけるよ」
「香織……ありがとう」
私はかばんを握りなおし、駆け足でママレードの入り口の扉まで行った。外へ出る前に振り返ってみた。香織は私をじっと見て、弱く微笑みながら一度うなづいた。胸に握りこぶしを作り、見るからに不安そうだ。私も一度深くうなづいて、ママレードから出て行った。

【現】２３．本音（後書き）

お読みいただきましてありがとうございます。

あともう一話続けて【現】の話となります。
分かりにくいかもしれませんが、【現】【夢】ともクライマックスにじわじわと近づいております。
【現】で起こった来夢を巻き込んだ事件は次話で解決いたします……たぶん。皆様のご期待に答えられる結末になれば良いのですが（汗）

頑張って執筆いたしますので、これからもお付き合いのほどよろしくお願いいたします。

【現】２４．一人の少女

ママレードを出て横断歩道を渡った先の歩道に、見覚えのある後姿を発見した。少し毛先をカールした薄茶色の髪をなびかせながら、堂々と歩いている。その背中を全力で追いかけた。

息を切らしながらも追いつき、その腕を掴んだ。びくっとし振り返ったその顔は、予想通り亀田さんだった。

「な……なによ、いきなり！」

「……まっ……まだ……話があるわ」

一気にダッシュしたためなのか、無我夢中だったためなのか息が苦しい。片方の手で亀田さんの腕を掴みつつ、荒い呼吸をなんとか整える。

「うざい！離してよ！……もうあんたとは関わりたくない！」

必死に私の手を振り解こうと華奢な腕を上下に振っているが、それぐらいの力では私の腕力には勝てない。私はグッと力を入れ、その振り回す腕を無理やりやめさせた。

「私もこれ以上ごちゃごちゃしたくないよ。だけど、このままだと気持ちがもやもやして、治まらないの」

「そんなの私が知るわけないわよ！勝手にもやもやしてなさいよ！」

「だから！今から亀田さんと池口を会わす！」

「……はぁ？」

思いもしなかった言葉なのか、呆れた目つきに口を半開きにしている。力の抜けた腕をそのまま引っ張った。

「ほら！学校に戻るわよ！」

「ちょ、ちょっと！あんたふざけてんの！」

一回引っ張ったらこっちのものだ。バシバシと身体を叩かれたが痛くない。無理やり亀田さんを引きつれ学校へと足を進めていく。

何度も足を止められたせいで、学校についた頃には日が落ちてい

た。それでも再び校門をくぐる。校門を抜けたせいなのか、諦めたように足掻きをやめていた。代わりに機嫌を損なったようで、私と目を合わせようとしない。視線を下げ、ぶすっとした顔をしている。

「さ、野球部の部室を張るわよ」

しかし、そんな顔されようがここまで来たのだから私も引くわけにはいかない。力の入っていない亀田さんの腕を引く。亀田さんは無言で私に引かれるまま歩き出した。

野球部の部室は、ソフト部とグラウンドを挟んで反対側にある。野球部の部室がある建物はプレハブのようなものだった。一階は野球部が使う道具やトレーニング室となっていて、その二階が部室だった。薄暗い中、部室を見てみるとすでに薄明かりがついていた。

「今日は早めに終わったみたいね。もうそろそろ出てくるよ」

「……いい加減離してくんない？」

亀田さんを見ると無愛想な顔で、掴まれている腕を見ていた。確かにもう腕を握らなくてもいいかもしれない。そう思い手を離すと、その腕にはくっきりと私の手の跡が残っていた。

「あ！ご、ごめん！……痛かった？」

亀田さんは無愛想な顔を崩さず、掴まれていた腕の部分をさすっている。返事を待つが、亀田さんは私を見ようともしなかった。嫌な沈黙だけが流れる。居たたまれなくなり、私は口を開けた。

「あのさ……私、一度それだって思うとそれしか考えられない人なんだ。池口と香織のことも……ずっと二人しか見てなかった」

亀田さんは相槌を打つこともなく、かばんの中から小さな鏡を取り出した。その鏡を見て髪形を直し始めた。私は構わず続けた。

「亀田さんの話を聞いて、素直に申し訳ないって思った。だけどだからって、香織に対して嫌がらせしたことや、私に嫌がらせしたことをチャラにするっていうのはできないよ。だから私も亀田さんに謝るつもりはない」

亀田さんはポケットからグロスを取り出し、丁寧に唇に塗り始めた。

「私を嫌いになるのは別に構わない。だけど、もう香織を困らせないであげて。だから……今池口と話して……気持ちに区切りをつけてほしい」
私はしゃべっている間ずっと亀田さんを見つめていた。一方亀田さんは、グロスを塗り終えようやく私の顔を見た。ぱっちりとした目が私を凝視する。
「あんたって異常なほどお節介で強情ね。マジうざい。それに、区切りをつけるかどうかなんて私が決めることでしょ。あんたが勝手に決めないでくれない？」
――た、確かに……。
その言い分に反論できず思わず目を逸らした。するとその様子に満足したのか、亀田さんがふんと鼻で笑った。
野球部の部室の方からガチャというドアが開く音が聞こえた。一斉にそちらを向いた。開いたドアから出てきたのは、背の高い坊主頭だった。薄暗い中目を凝らして見た。ドアを閉め、こちらを向いた顔は池口だった。池口は私たちのことに気づくことはなく、階段を降りて、こちらへ向かってくる。
「……あれ、なんでお前がここにいんだよ」
ふと顔を上げた池口がようやく私に気がついた。私を見たあと、視線を横に移すとさらに驚いた顔をした。
「……亀田まで。何してんだ、ここで」
私は池口の前まで走っていくと、池口の腕を掴み亀田さんから背を向けるように身体を回した。
「なんだよ」
「……あんた、香織のこと好きよね？」
ささやく様に小声で耳打ちすると、呆れたような目つきで私を見てきた。
「いきなり何言ってんだ」
「いいから。好きなのかどうか答えて」
「んなもん……付き合ってるから当たり前だろ」

「当たり前ってなに？はっきり言って」
じっと池口の顔を見ると、半ば諦めたようなため息を漏らしぼそっと池口は言った。
「うっせえなぁ……。好きに決まってるだろ」
「よし！よく言った！」
バン、思いっきり池口の背中を叩いた。強かったのか、池口は前によろけた。が、私はそんな池口を気にせず、亀田さんの元に走った。
「……池口くんに何言ったのよ」
「いや、別に。……私は退散するから」
私は持っていたかばんを肩から提げた。亀田さんはなぜか驚いた表情を浮かべている。
「はぁ？なによそれ」
「……んじゃ、ごゆっくり」
私は逃げるようにその場から走り去った。池口の気持ちを信じて、亀田さんと二人っきりにさせた。きっと私がいないほうが、亀田さんもしゃべりやすいはずだ。しかし、校門まで走ってきたもののやはり気になる。私は校門から出てすぐに立ち止まった。

◇　◇

薄暗いグラウンドの片隅。すっかり日は落ち、昼の騒がしい学校風景とは打って変わり静かな空間へと変化している。グラウンドには野球部員の姿はほとんどなく、照明がグラウンドを静かに照らしている。その淡い光がかろうじて部室近くまで届いていた。静かな空間には、道具を片付けたり整備している野球部員の掛け声だけがかすかに聞こえているだけだ。
池口は叩かれた背中をさすりながら、置いていたスポーツバックと学校かばんを肩から提げた。ひりひりとする背中を気にしつつも、前方を見るとまだ亀田が立っていた。

「あれ、あいつと一緒に帰ったんじゃねぇの？」
ゆっくりと歩み寄る。亀田は一瞬驚いたような顔をしたが、すぐ目を細めにっこりと笑った。
「ううん、木元さんは先に帰ったみたい。……背中どうしたの？」
池口は空いた左手で背中をさすっている。それに気がついた亀田は心配そうに背中を覗き込んだ。
「さっき木元に思いっきり叩かれたんだ。……ったくあいつの言動は理解できないな」
「私も……。池口くんっていつもこの時間帯に帰るの？」
すると、池口はつけていた腕時計を覗き込んだ。
「あぁそうだな。……でも今日は早いほうかな」
「そうなんだー」
池口は腕時計から目を離すと、肩から提げていたスポーツバックを担ぎなおし再び亀田の顔を見た。まっすぐ見つめるその瞳に、亀田は思わず見とれた。
周りに人などいない、いるのは目の前にいる池口だけ。先ほどまで届いていた野球部員の掛け声はすでに聞こえない。代わりに自分の鼓動だけがやけに聞こえる。
「暗くなってきたから帰り気をつけろよ。じゃあな」
「う、うん。じゃあ……ね」
立ち尽くす亀田の横を、ゆっくりと池口が通り過ぎてく。亀田の視界から池口から消え、後ろからは池口の足音が聞こえる。その音はどんどんと離れていく。
亀田はすぐに動けなかった。自分は何のためにここまでつれて来られたのかを考えた。今、周りには誰もいない。いるのは池口だけ。こんな絶好の場面など今までなかった。これからこんな場面に遭遇できるのか……できるはずがない。振り返ると池口の大きな背中はすでに離れた位置にあった。それでも、声をかければきっと届く。
「待って池口くん！」
その声に池口の足は止まった。不思議そうな顔をしつつ、池口は

亀田のほうを振り返った。亀田はそれを見て、駆け足で池口の元へと行った。
「どうした？何？」
「……あの、ね……その……」
走ったせいか息が切れていた。なかなか言葉が出せない。亀田の苦しそうな呼吸だけが二人の間に流れる。ひざに手をつき、苦しそうに呼吸をする亀田を池口は心配そうに顔を覗きこんだ。
「大丈夫か？すっげ苦しそうだけど」
ふと視線を上げると池口の顔が間近にあった。走ったせいで鼓動が早くなっていたのが、ますます強く音が大きくなった気がした。
「だっ大丈夫！……もう平気だから！」
「そうか？」
向かい合わせに立つ池口は心配そうに亀田を見ている。亀田はその顔を見て思わず吹きだした。
「え、なんで笑う……」
「……池口くんがそんな顔するからだよ。なんか池口くんって変わったよね」
「そうか？……あ、いや……変わったのかもな」
そう言うと微笑んだ。その顔は何か愛しそうで幸せそうな、そんな気持ちがにじみ出ていた。また見たことがない池口が目の前にいる。池口は続けた。
「野球部の奴らも『お前変わったなぁ』とか言うんだ。自分ではそんな風に思ってないけど、亀田まで言うってことはそうなのかもな」
はは、と照れくさそうに笑っている。亀田は平静を装うようににっこりと笑った。
「そう、なんだ。……それって、香織ちゃんと付き合い始めたからじゃない？」
「あー……そうかもな」
目を細めて笑っている。その顔を目の当たりにした亀田は笑顔を維持できなかった。その様子に気がついた池口は、はっと気づいた

ように笑顔をやめた。代わりにわざとらしく咳払いをした。
「……で、なんの用だよ」
「あ……あのね」
そう言い、ふうと一息吐いた。顔をうつむかせ少し間を空けた。少し沈黙が流れた後すっと顔を上げた。にこっと笑い池口を見た。
「池口くんて、香織ちゃんのこと本当に好きなのー？」
「……その質問か」
池口はおでこに手を当て、ため息を漏らした。
「好きだよ。じゃないと、みんなの前であんな風に言うわけないだろ」
「そ、そうだよねー……。でもさぁ、あんな風に言うと池口くんのことが好きだった子が悲しむんじゃないかなー？」
亀田がそう言うと、池口は顔を半分隠していた手を下ろし、下向きだった顔を上げた。
「……なんだそれ。っていうか、俺そこまでモテてないだろ」
「私ね……名前は言えないんだけど、池口くんが好きっていう相談受けてたんだよねー」
池口は目を丸くして驚いた。そんな様子に亀田はいたずらっぽくにっこりと笑いながら続けた。
「あんな風に言われちゃって、その子自分の気持ちも言えなかったってすごく悲しんでたよー？池口くん、その子になんて弁解するの？」
すると、真面目な顔になり腕組みをし考えている。そんな顔を亀田はじーっと覗き込んだ。間近に顔があるのに、池口は何とも感じてないようでその瞳には亀田は映っていなかった。
「気持ちは嬉しいけど……俺も同じように香織のこと想ってるから」
亀田の顔を見るわけでもなく、ただ呆然と地面を見つめていた。それでも、亀田は自分を見ていない池口の瞳をじっと見た。が、池口の瞳に亀田は映らなかった。強がって作った笑顔は段々と自然に崩れていく。

「どうしてそこまで……香織ちゃんのこと好きなの？」
「さぁ……。ってそこまで答えなきゃ駄目なのか？第一、なんで亀田がそんなことまで聞くんだよ」
はは、と池口が笑った。亀田は小さな声で「あっ」というと、口を閉じた。
「……その人には申し訳ないけど、俺、ずっと香織一筋だったんだ。不謹慎かもしれねぇけど今すっげ毎日楽しいんだ。だからごめん……そう伝えててくれないか？」
「……わかった、そう伝えておくね」
顔をうつむかせたまま、そう言った。池口はそのまま背を向けて手を挙げた。
「じゃあな亀田、よろしく。明日な」
池口はその場から去っていった。

◇　◇

校門の外にある木の陰に隠れて待つこと数十分。先ほど大きなスポーツバックと学校かばんを提げた池口は通り過ぎていった。きっともうすぐ亀田さんも出てくるはずだ。すっかり暗くなってしまった通りに一人待つ。
更に数分過ぎた後、校門からとぼとぼ出てきた亀田さんがようやく見えた。先ほどまで感じていた威勢がなくなっているように見える。すぐさま陰から出て亀田さんの元へ走っていく。
「……亀田さん！」
私の声に反応し、うつむかせ加減で歩いていた顔をそっと上げた。泣いているかと思ったら別に泣いていなかった。ただぼーっとしている。
「何よ……あんたまだいたわけ？」
「いや……心配で」
すると、ぼーっとしていた亀田さんの顔が急に眉間に皺を寄せ大

声で怒鳴った。
「嘘！振られる私を見て、笑うために待ってたんじゃないの？そうなんでしょ！何よ、心配って……馬鹿にしないでよ！あんたなんかに心配されたってちっとも嬉しくないのよ！」
「嘘じゃないよ。ほら……もう暗いでしょ？亀田さん色っぽいから一人だと心配でさ。悔しいけど香織よりも色気ムンムンしてるし……」
「何よ……それ。そんな嘘……ついて、馬鹿じゃないの……」
見る見るうちに、顔をうつむかせ声にも勢いがなくなっていく。池口と亀田さんの間にどんな会話があったのかは知らないが、様子を見れば大方見当がついた。
「池口となに話したかは知らないけど……私の知り合いがさ、一度思いっきり泣いたほうがすっきりするって言ってたよ」
「泣く……？私が、あんたの前で？」
うつむかせたまま、暗い亀田さんの声だけ聞こえてきた。手を見てみると、強く握っているのかかばんが少しだけ震えていた。
「クラスでいくら強がっていたって亀田さんも女の子じゃん。誰だって泣きたくなる気分もあるよ」
すっとかばんの震えが止まった。
「泣いたことを誰かに言うつもりはないし、今周りに誰もいないよ。……それに亀田さんを馬鹿にしてるつもりないか……」
続きをしゃべろうとした瞬間、亀田さんがかばんを落とした。それと同時に亀田さんが私に寄りかかってきた。
亀田さんは私に寄りかかり華奢な背中を小さく震わせていた。私は黙ってその背中に手を添えた。泣き叫ぶわけでもなく、小さく嗚咽を漏らしている。クラスでいつも高貴な態度を取っていた亀田さんではなく、私の腕の中にいるのはただの一人の少女だった。
亀田さんと別れたあと、再びママレードへ寄った。

「こんばんわ」
「あら。いらっしゃい。……お友達ならだいぶ前に帰られたれど」
カウンター越しから、洗い物をしながらあいさんが言った。私は首を横に振ってカウンターの椅子に座った。
「あ、いえ……あいさんに報告しようと思ってまた来たんです」
そう言うと、あいさんは蛇口を止めた。エプロンで手を拭きながら言った。
「……例の嫌がらせのやつね。結局おばあちゃんは何の協力もできなかったわねぇ」
「いえ。嫌がらせのことはほとんど解決しました。ご心配かけてしまってすいませんでした」
「あらそう、ならよかったわねぇ」
微笑むと皿を持ち、後ろの食器棚へとしまい始めた。ふと、食器棚の隣に飾ってある写真立てに目が止まった。そこには若いあいさんと制服を来た学生の姿があった。前にも見たこの写真だが、そのときは逆光で見えなかった。が、今初めてはっきりとその写真を見た。見た瞬間血の気が引いた気がした。
「あいさん……その写真立て……それ見せてください！」
思わず指を差した。びくっとし驚いたあいさんは、その指差すほうを見て写真立てだと気づいた。慌ててその写真立てを手に取り、私に渡してくれた。受け取りじっとその写真に目を落とした。
「……それはね、おばあちゃんがこの店をオープンして間もない頃の写真よ。まだ若いわねぇ」
頭の上で、ふふっとあいさんの声がしたが頭に入ってこなかった。
頭の中が真っ白になった。その若いあいさんの隣に笑って写っている学生。その笑顔に見覚えがある。
「あ、あいさん……この写真はいつ頃のものなんですか？」
「えぇっとそうねぇ。三十年ぐらい前かしらねぇ」
その言葉に一瞬眩暈がした。
「この……隣に写っているのは……？」

「それは当時よく来ていた高校生よ。懐かしいわねぇ。でもその子あんまりいらっしゃらなかったわねぇ」
当時を振り返るように遠くを見つめるあいさん。
「……あ、そうそうその子は確か……」
何かを思い出したように、遠くを見ていた視線を私へと戻した。私を見るあいさんの顔がどことなく真面目な顔つきに見えた。その表情に嫌な予感がし、思わず席を立った。
「あ、あいさん！私そろそろ帰りますね！じゃ、じゃあ！」
「え？あ……またいらしてねぇ」
振り返らずママレードから飛び出た。そのまま家までずっと走っていた。走っていても、あいさんの隣で笑っている男子の顔が消えない。家に帰ってベッドに横になるまで……もう私の頭の中にはその顔は焼きついていた。
時人と顔が瓜二つの、三十年前の写真の男子の顔が。

【現】２４．一人の少女（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

最近更新が遅れ気味になっております。もし、更新を待ってくださっている方がいらっしゃるなら本当に申し訳ないです。

なるべく誤字脱字はなくして更新いたしますので、これからもよろしくお願いいたします。

（見直したら、結構誤字があってショックだった作者です……。ごめんなさい）

【夢】２５．悲しい真実（前書き）

嫌がらせがなくなれば夢幻郷へ来ることができないようにすると言張る時人。前回来夢が夢幻郷へ来た際に、時人は亀田と話すように促した。

現の話が長くなってしまったので、前々回までの夢の話の大まかなあらすじを書きました。それでは、【夢】の話の続きをどうぞ。

【夢】２５．悲しい真実

真っ暗な空間に夢幻郷だと確認すると、すぐさま窓まで走り枠に手をかけた。あの写真に写る男子は何者なのか。時人と瓜二つの笑い顔をしている男子との関係は。何より、なぜそんな男子が約三十年も前に撮られた写真に写っているのか。私の頭の中はあの写真のことでいっぱいだった。居ても立ってもいられず、窓から顔を出しきょろきょろと見回した。

ふと、見上げると白く淡い光が見えた。黒いローブに腕組みをしツンツンと逆立った白髪。真面目な顔をした時人がゆっくりと降り、少し距離を置いて真正面に立った。やはり、写真の男子と髪の色が違うものの顔がそっくりだった。言葉が出ず、ただ時人の顔を眺めた。

「来夢さん、亀田さんと話されましたか？……あの、どうかされたんですか」

時人はその様子に不思議そうに顔をかしげてた。はっと我に返り、慌てて答えた。

「な、なんでもないよ。……亀田さんから直接話を聞いて、時人が言ったことなんとなくわかった気がする」

「そうですか……。私が悪夢を見せる必要がありそうですか？」

「必要ないと思う。亀田さんは嫌がらせを認めたし、たぶん池口とも話をつけたと思うし……」

時人は微笑んだ。

「それはよかった。では、嫌がらせもなくなったんですか？」

私は大きく首を横に振った。思わず声も大きくなった。

「な、なくなってないよ！昨日だってまだやられたし……なくなるかどうかは明日になってみないとわからないよ」

「そうですか、わかりました。……では明日まで待ちましょう」

そういうと時人はぐるりと回り私に背を向けた。

「明日、結果次第で来夢さんをこちらへ来ることができないようにします。ではその時まで私は失礼します」
そう言い残し上に浮かんでいく時人に対し、私は窓から叫んだ。
「ちょっと待って！聞きたいことがあるの！」
私の声に反応して時人は動きを止めた。しかし、少し上空にいる時人は背を向けたままこちらを向こうとしない。
「あ、あのね！……しゃ、写真についてちょっと聞きたいことがあるの」
疑問を言葉にするのを少しためらった。嫌な予感がしていた。
「高校の近くにあるママレードっていう店があってね、そこはあいさんっていうおばあちゃんが店主なんだけどさ……」
ママレードという言葉に、ぴくっと時人の頭が少しだけ動いたように見えた。
「で、でね。その……時人にそっくりな人が、若いあいさんと一緒に写っている写真があってさ……。ま、まさかとは思うけど違う、よね？」
時人は背を向け黙ったままだった。言葉を発せず嫌な沈黙が流れる。私の胸の鼓動がやけに聞こえていた。
時人の背を見ながら、違ってほしいと願った。すぐに振り返って、また私に笑い顔を見せてほしいと願った。祈るような思いで時人の背中を見つめた。しかし、時人はなかなか振り返らずその場に立ち尽くしていた。そんな時人を見ていると、自然と今までの時人の言葉が蘇ってきた。

『私の名前は時人。この世界は、夢幻郷。ようこそ、夢幻郷へ』
――初めて夢幻郷へ来たときの言葉だったよね。
『まず、どうして浮くことができるのかと言いますと、私はこの夢幻郷の住人だからです』
――住人。その言葉の意味がわからなかった。
『ほんと……早く来夢さんと会えばよかった。もしかしたら、私は

夢よりも現実を見ていたのかもしれない』
――本当にわからなかった？
『来夢さんはわからないと思いますが、この夢幻郷では時間は存在しません。皆さんの意識でできている世界ですので、時間が存在し得ないのです』
――私は……本当の意味を知りたくなかったんじゃないの？
『これ以上来夢さんと一緒にいると、持ってはいけない感情が出てきていることに気づいたんです。絶対に持ってはいけなかった……』
――もし……そうだとしたなら、不可解だった時人の言葉が……。
『思いを告げることができなかった悔しさ。自分の知らないところで、好きな人が他の誰かと一緒にいる悲しさ。そういう気持ちが……わかるから』
――一つの意味を成す。
『……私は夢の人。来夢さんは現の人。それは私にとって悲しい現実です』
――時人は……。

はっとして正気に戻ると、いつの間にか時人はこちらを向いていた。視線を下向きに、どこか暗い表情だ。そんな時人をじっと見つめた。
時人からどんな言葉が出てくるのだろう。そう思うと、怖くて耳を塞ぎたくなってくる。もしかしたら笑って誤魔化すのかもしれない、そんなわずかな希望を頼りになんとか時人を見つめる。そして、時人はゆっくりと重い口を開いた。
「……ママレード、ですか。そういう店もありましたね」
目を閉じ大きく息を吐いた。少し間を開けると、すっと視線を上げ私をまっすぐ見つめる。
「来夢さん。その写真を見てしまったのなら……言い訳できません。私はもうあなたに嘘をつきたくない」
再び目を閉じた。そして、決心したようにすっと目を開けると私

の瞳を捉えた。
「私の現実での最後の記憶は……今現在の時間よりも三十年前、病室のベッドで横たわっている記憶です」
「さ、三十年前……病室……ど、どういうこと？」
搾り出すように声を出した。その声が震える。声だけではなく、全身が震えているような感覚だった。時人は悲しい表情で言葉を続けた。
「私は……病に倒れずっと入院していました。毎日つらい治療生活。それに耐えられなくなりこの夢幻郷の住人となったのです」
「じゃ、じゃああの写真の男子って……」
「あれは私です。当時高校生でした。……夢幻郷に来ると歳を取ることなく、そのままの状態を維持するんです」
頭が真っ白になっていく。思っていたことが、時人の口から出てくる。
「私は三十年前に生きていた者なんです。ですから……私の実体はすでにないでしょう」
「……じ、実体がないって……どういうこと？」
「つまり……現実の世界に戻っても身体がないんです」
私の鼓動が激しくなる。時人は悲しげに微笑んだ。
「私は死んでしまっているんです」
私は首を何度も横に振った。振りながらゆっくりと後ずさりをする。
「……嘘よ。ねぇ嘘でしょ、そう言ってよ」
笑って誤魔化してしまいたいと思った。今までの時人との思い出が走馬灯のように駆け巡る。時人の悲しげな眼差しに、涙がこみ上げてくる。
「来夢……さん」
時人はゆっくりと窓に近づいてきた。嘘をついている雰囲気は漂っていない。その雰囲気がつらかった。笑って、また嘘だと言ってほしい。

私は時人に背を向け、一気にベッドまで行くと、眠る私に触れた。
「ら、来夢！」
窓のほうから時人の叫ぶ声が聞こえたが、振り向かなかった。
――嘘よ……いやだ。信じたくない。信じられない。
時人の言葉から逃げた。耐えられなかった。私の意識は現実の世界へと戻っていった。

【現】２６．封じた気持ち

朝練習も身が入らない。何度もボールを見失ったり、ボールを変な方向へと投げてしまっていた。普段と違う様子に気がついたのか、着替える最中にクラブの子から声をかけられた。

「来夢、今日どうしたの？エラーばっかりしてたけど」

「え……あぁごめん。ちょっと考え事」

「なぁに、また亀田さん関連？」

「ううん、違うよ」

ため息を漏らしていると、その子がにやりと笑う。

「もしかして……恋の悩みですか？来夢ちゃん」

その言葉に思わず手が止まった。が、すぐにその言葉を振り払うかのように頭を振った。

「違うよ。……もう先に出てるからね！」

勢いよく部室から出た。走りながらも言われた言葉が反復する。

――恋？違う。私は時人が死んでいるっていうことに驚いているだけよ。

頭では否定した。が、胸は恋という言葉にドキドキとしていた。しかし、そんな高鳴りも空しく思える。私の心にぽっかりと穴が空いてしまったような感覚だった。恋なのかと自問することも、それを否定することも、私は悲しく思えた。

授業の間、集中することができないままあっという間に昼休憩の時間となった。

「らむ、昨日別れたあと……亀田さんとどうなったの？」

私の席に駆け寄ってきた香織は手に財布を持ち、不安げに見つめてきた。私はかばんから弁当を取り出し席を立った。

「食べながら話すよ。……あとちょっと相談したいことがあるんだ」

「相談？……じゃあひとまず行こっか」

香織と肩を並べて教室から出ようとしたその時。ぽんと背中を叩かれた。振り返ってみると亀田さんがいた。
「ねぇ私も一緒に行っていい？」
にっこりと笑う亀田さんに、私と香織は驚いて顔を見合わせた。
「わ、私はいいけど……香織は？」
「え、うん。いいけど……。亀田さんこそ、山田さんと江口さんと一緒に食べなくてもいいの？」
そう香織が言うと、亀田さんがあっちを見ろという風に視線を教室の中へと向けた。香織と私は不思議に思いながらも、その方向を見た。
その方向には、山田さんと江口さんがいた。しかし、二人のほかにも女子が数人いる。なにやら楽しげな雰囲気のようだ。亀田さんのこと待っているような雰囲気でもなく、各自すでに食べ始めていた。
「……なんかあったの？」思わず口に出すと、亀田さんは構わず教室から出た。
「別に。……ほら、行くんでしょ」
対して気にしていないようで、ざわざわと騒がしい廊下を歩き出していった。

「香織ちゃんに謝りたくって」
昨日三人で座ったベンチに腰を下ろし黙々と食べている最中、突然亀田さんがそう言った。
昨日と同様に、香織と亀田さんがいるせいで近くを通る男子がちらちらとこちらを見てくる。しかしそんな視線にもろともせず、亀田さんはいきなり頭を下げた。驚いた香織は、持っていたカレーパンを置き慌てふためいた。
「か、亀田さん！人が見てるよ」
「いいのよ。昨日ずっと考えてて……必死だったにしろ香織ちゃんに嫌がらせをしたのは間違いだったって思ったの。今更って思うか

もしれないけど……ごめん」
「亀田さん……」
すっと顔を上げた亀田さんの顔は気まずそうに、目線を下げていた。
「昨日、この人に無理やり連れられて池口くんと話したのよ」
ちらっと私を見たあと、すぐさま視線を下げた。どうやらこの人というのは私のことらしい。
「正直、何を話そうか迷ったわ。二人っきりになったことなんてなかったし……だから、いっそのこと自分の気持ちを伝えようかと思った」
香織も何も言わず亀田さんを見つめている。亀田さんは、下げていた目線を戻しふっと笑った。
「だけどね、気づいたのよ。池口くんは香織ちゃんしか見ていないって。すごく大事に思ってるんだってね……。それにそんな池口くんを見てたら、それでいいかなぁって思えてきて……。悔しいけど、池口くんが一緒にいて楽しい人が香織ちゃんならそれでもいい。池口くんの幸せを壊してまで自分が幸せになりたくないもの」
そう言うと、持ってきていたペットボトルを開け一口飲んだ。長く息を吐くと、にやりと笑った。
「だけど、だからって安心しないでよね。池口くんがフリーになったら、今度は私が告白するから」
香織はふふっと笑いながら、笑顔で答えた。
「わかった。絶対告白させないんだから」
なにか曇りが晴れたかのように、二人の間に笑顔が戻っていた。二人がようやく友達となったような、そんな風に見えた。そんな二人を行き交う男子どもは、相変わらずちらちらと見ながら通り過ぎていく。しかし、二人はそんな視線など全く気にしていない。
「……待ってよ、私には謝罪の言葉はないわけ？」
そう私が言葉にすると、亀田さんはじろりと私を見てきた。
「あんたには謝るっていう気が起きない。あんたが女の恋心を知ら

なかったからそんな風になったのよ」
「はぁ？何よそれ」
すると、口の端を持ち上げにやりと笑った。
「だから、謝らない代わりに今度一緒に合コン連れてってあげるわよ。池口くんと会わしてくれたお礼も兼ねて、ね」
「ご、合コン？」
聞きなれないその言葉に思わず顔が引きつった。
「い、いいわよ連れて行かなくても……。私誘うよりも、いっつも一緒にいるあの二人を誘いなさいよ」
すると、笑っていた亀田さんの顔が急に真顔に変化した。その様子に思わず私と香織は首をかしげた。
「なによ、急に。やっぱりなんかあったの？」
「……あの二人は、香織ちゃんにもあんたにも謝らないわよ。さっきも二人を誘ったんだけど、自分たちには関係ないってさ。……だからもういいのよ」
その言葉聞き、あの二人の高笑いを思い出した。亀田さんが言っても謝る気がないということは、初めから謝るつもりがなかったのだろう。呆れてため息が出た。
「亀田さん。二人と仲直りする間、もしお昼一人になっちゃうなら私たちと一緒に食べない？……ね、いいでしょ、らむ」
ぱっちりとした香織の目が私を見つめてきた。
「あぁうん。いいよ」
そう言い亀田さんの顔を見ると、目を見開き嬉しそうに笑っていた。しかしそんな亀田さんに対し、私はにやりと笑いながら続けて言った。
「ただし、私の目の前ではぶりっ子演じない、っていう条件付きでね」
そう言うと香織がふふと笑った。一方亀田さんは明るい表情から一変、口の端を上げつつ鼻で笑った。
「ふん。あんたの目の前でぶりっ子演じて、なんの得になるってい

うのよ。それより、あんた連れて本当に合コン行くから」
「……」
「男なんてごまんといるのよ。いつまでもうじうじしてらんないわ」
本当に連れて行く気らしい。亀田さんは一気にペットボトルを飲み干した。が、私は合コンなど行く心の余裕がなかった。
香織が小さな声で「あっ」と言うと、私を見てきた。
「そういえば、相談ってなに？」
ぼーっとテーブルを眺めていると、いきなり香織に話しかけられた。思わずはっと正気に戻った。
その様子を見た香織が不審そうに首をかしげた。
「……なんか今日のらむ、暗いよ？ぼーっとしてるし、ため息漏らしてるし」
「あら、何、あんたすでに恋の相手でもいたの？」
にやにやとしながら、亀田さんが身体を乗り出してきた。亀田さんの言葉に香織までも、目の輝きが増したような気がした。
「……違うよ」
「じゃあ相談って何？」
少し間を空けた。きっとそのままを言うと笑われるに決まっている。夢幻郷のことは伏せ、あくまで現実に例えて話すことにした。
「あのね、実は最近知り合った人がいてさ。毎日、会ってたんだ」
二人は目をきらきらさせながら、私の言うことに耳を傾けている。
「毎日会うものだから、いつの間にかそれが当たり前になってたの。一緒にいてもいやじゃなかったし。だけど、突然今までの言葉は嘘だって言われて……」
「え？なにそれ」
香織が驚いた顔した。しかし、構わず続けた。
「私もわけがわからなくてさ。おまけに、もう会えないって……。それだけで結構きつかったのに、今度は……遠い場所に行かなきゃいけないことがわかって……」
輝かせていた二人の顔は、いつの間にか暗い表情になっていた。

時人の言葉が再び蘇ってきた。死んでしまっている、いまだに信じられない。その言葉をどう受け止めればいいのか自分ではわからなかった。自分でも、どうしてここまでショックを受けているのかわからない。夢幻郷でいつも一緒にいた時人。それだけだと思っていた。なのに、この感情はなんなのだろう。

「どうしてその人は嘘ついてたって言ったの？」

「……私の信用を裏切りたくなかったって」

「もう会えないっていうのは？」

「……私と会うと、そいつがつらくなるんだって」

すると、亀田さんが大きくため息をついた。

「あんたはその人のことどう思ってるのよ。その人はあんたに告白でもしたの？」

「し、してないよ！それに……私自身そいつのことどう思ってるのかわからないし」

そう言うと、イライラしたように亀田さんが頭を掻いた。

「あー鈍感、超鈍感！それ、理由は知らないけどあんたのことかばってんのよ」

「か、かばう？なんで？」

意味がわからず、ただ亀田さんの顔を見た。そんな私を見て、また大きくため息をついた。

「はぁ……そんなの決まってるじゃない！あんたのことが好きなのよ！」

思いも寄らぬ言葉に、ただ呆然とした。隣にいる香織は、亀田さんの言葉にうなづいている。

「だよねぇ。信用を裏切りたくないとか会うとつらくなるとか……普通そんなこと言わないと思うよ」

「ちょ、ちょっとまってよ。……そんな、好きとか……私、困るんだけど……」

思わず頭を抱える。

――時人が……私を好き？嘘でしょ……。私はただ、夢幻郷に一人

だった時人が寂しいから言ってるものだとばかり……。
すると、チャイムが鳴り響いた。次の授業の五分前には鳴るようになっていた。食堂の周りにいた人たちも、慌てた様子で教室へと走っていく。
「あ、予鈴だよ！亀田さん、らむ教室へ帰らなきゃ」
亀田さんと香織がそれぞれ残骸をゴミ箱へ捨てて、席を立った。私も焦点が合わないまま席を立つ。すると、香織が一言言った。
「らむ、その人のこと嫌いなの？好きなの？……らむってはっきりしないと気がすまないタイプでしょ？きっと、わかっているんだけど気づかないフリをしているだけじゃないかな」
「香織……」
私たちは教室まで走っていった。走ったおかげでなんとか間に合った。しかし、私は授業が始まっても上の空だった。
気づいていないフリをしているのか、ずっと自問をした。それでもわからない。時人も私のことをどう思っているのか、亀田さんが言ったことはあくまで予想だ。しかし、考え直してみるとそうかもしれないと思えてきた。ただ、そう思うと余計に胸が苦しくなった。

あっという間に時は過ぎ、気づくと一日が何事もなく終わり家に帰っていた。心配していた嫌がらせもなかった。が、それは同時に夢幻郷との別れを意味している。ベッドに仰向けに寝転がり、香織と亀田さんの言葉を思い出した。
時人が私を好きだとしたら……その気持ちを隠して私と別れようとしている。きっとそれは自分が死んでしまっているからだ。が、死んでしまっているというのがどうしても信じられない。いや……信じられないのではなく、信じたくないのだ。
――どうして信じたくないんだろう……この気持ちが恋だから？時人のことが好きだから？
胸がドキドキした。が、そう思えば思うほど悲しくなる。自然に涙が溢れてくる。

――ううん……違うよ。時人は夢にしかいないんだよ……もう会えないんだよ……死んじゃってるかもしれないんだよ。そんなの……つらいだけだ。

必死に自分の思いを封じ込めながら、いつの間にか眠りについた。

最後かもしれない夢幻郷へと誘われる。

【現】２６．封じた気持ち（後書き）

お読みいただきましてありがとうございます。

まだ執筆していないので、正しくは言えませんがあと3，４話で物語が完結できるのではないかと思っています。

拙い文章ではありますが、最後までお付き合いのほどよろしくお願いいたします。

【夢】27．来夢の選択

気づくと暗い部屋にいた。夢幻郷だと確認し、立っているベッドの横にそのまま足を抱えて座り込んだ。

どうしようもなく憂うつだった。寝ながら考えてしまったのが原因なのか、胸がひどく重く苦しい。そっと胸に手を当てても、鼓動は治まる気配はない。時人が死んでしまっているという事実は信じがたかった。

ふと、左手にはめている白い腕輪が目に入った。していることさえ時々忘れてしまう。だがそれは確かに、時人からもらってから夢幻郷へ来るたびに私の左腕に存在していた。

「来夢さん」

腕輪を眺めていると、窓のほうから声が聞こえた。立ち上がり、窓へと歩み寄る。

「時人……」

最近では珍しく窓枠に腕を乗せて待っていた。時人は私を見ると安堵の表情を見せ、そのまま窓枠をまたぎ部屋の中へと入ってきた。

「窓から見ても姿が見えなかったもので、いらっしゃっていないのかと思いました」

ほっと胸をなでおろしている。しかし、私はまともに時人の顔が見れなかった。そんな様子に気づいたのか、時人が大きく息を吐く。

「……昨日は突然変なことを言ってしまって申し訳ありませんでした。来夢さんでも混乱しますよね」

「じゃああれは嘘だったの！」

顔を上げ時人の顔をじっと見つめた。しかし、時人は悲しげに首を横に振った。

「いいえ。私が死んでしまっているのは本当です」

まっすぐ見つめる時人。その視線から逃げたいがために、私は背中を向けベッドに向かおうとした。が、すぐに時人に腕を掴まれた。

思いのほか時人の握力が強く、動くことができない。諦めて力を抜くと、時人もわかったらしく掴む力をやわらげた。
「……信じられないのはわかります。ですが本当なんです」
「目の前にいるのに死んでいるって言われても信じられないよ！」
私が叫ぶと少し沈黙が流れた。私は時人に背中を向けたまま、時人がしゃべりだすのを待った。痛いぐらいの無音が耳を圧迫する。
するといきなり、時人が私の腕を引っ張った。突然のことで時人の方に身体が向くと、時人は窓に向かって歩いている。
「ちょ、ちょっと！何するのよ」
時人は窓枠に足を掛けると、こちらに振り向いた。
「今から私に会わせます」
私は意味が分からず呆然とした。しかし、時人は構わず私の腕を掴んだまま窓から出た。
前出たときは雲があった。今回もあると思ったがその雲がない。代わりに真下には地面が見えた。思わず目を閉じた。
「来夢さん今から上空へ行きます。……大丈夫ですよ、その腕輪と私が掴んでいる限り落ちませんから」
落ち着いた時人の声にゆっくりと目を開けると、確かに落ちる気配がない。身体が軽い感じがした。左手首につけている腕輪がかすかに温かいような気がする。すると時人は掴んでいた私の腕を離すとパッとすぐさま私の手のひらを握った。
「では、行きましょう」
私に微笑むと、そのまま上空を見つめ、まっすぐと上に飛び始めた。
どんどん建物よりも上昇していく。ちらりと下を見ると、家が小さく見えた。あまりの高さに思わず時人の手を強く握る。時人を見ると、空を見据えたまま黙って真面目な顔をしていた。
上昇していくと雲が近くなってきた。しかし、この雲もふんわりとしたようには見えずなにかコンクリートが浮かんでいるかのように見えた。時人はその雲を避けて通ると、その雲の上に足をつけた。

私も同時に雲の上に乗る。やはり足場はコンクリートのように固い。かなり大きな雲のようで、広い雲の地上が広がっている。ただ、真正面の遠くになにか白い光が見えた。私がその一点を見据えていると、時人が一歩踏み出した。

「もうすぐですよ」

私は手を引かれるまま、時人と一緒に歩み出した。

少しぼこぼことした道が続く。歩く最中、時人は一言もしゃべらない。私も時人に対してしゃべることができなかった。黙々と歩き、遠くにあった白い光がだんだんと近づいてくる。近づくにつれ、その白い光は半球のような形をしていることがわかり、その半球である理由が何か台の上で光っているせいということもわかった。

そして、その台の前についた。黒い台の上に白く輝く光の半球が乗っている。その半球の中には仰向けの状態で人が倒れていた。

「これが私です」

時人はその人物を見つめながらそう言った。私の手を掴んだまま離そうとしない。その横顔を見ても何を考えているのかはわからない。驚く表情もせず、ただ黙って見つめていた。

私は一歩前に踏み出した。その白い光の中、ゆっくりとその人物の顔を覗き見た。

目を閉じて眠っている、ように見えた。短く逆立った髪は黒く、目を閉じていても分かるきりっとした目と整った顔。病院で着るようなガウンを身につけ、手はお腹の上で祈るように合わさっている。着ているものが違えど、その人物は紛れもなく時人だった。

「この人が……時人？なんで？どうしてこんなところにいるのよ……」

呆然とその横たわっている時人を見ていると、隣にいる時人が落ち着いた声でしゃべりだした。

「……住人になると現実の私は自動的にこの黒い台の上に現れます。ここは現実での変化に左右されることがありません。どんなに現実が変化しようとも、現実での最後の姿はこうして保存されているの

です」
今にも起き上がりそうなほど、寝ているように見える。
「そして、この周りで光っている白い光は住人の証です。この白い光からこの腕輪と指輪が作り出されるのです」
ちらりとその時人が身につけている腕輪と指輪を見た。確かに同じように白い光と一緒に光っている。
「特に、この右手につけている指輪は重要で、この指輪を次の住人に渡すことによって住人が入れ替わります。そして、指輪と腕輪を失った前住人は夢幻郷の束縛から解放されます」
「指輪……束縛……？」
首をかしげると、その様子を見た時人が右手を白い光の中に入れ自分自身の身体に触れた。
「あ！」
自分自身に触れるということは、現実の世界に戻るということである。それは体験済みだからわかっている。しかし、時人は触れたままだったが一向に消える気配がない。そのまま自分から手を離すと私を見た。
「住人である限り、現実に戻りたくても戻れないんですよ」
弱く微笑んでいた。その顔はあまりにも寂しそうで、何か我慢しているような耐えているような表情だった。その顔は一瞬で、すぐまた私から視線を逸らしじっと己自身を見ていた。泣くわけでもなく、怒るわけでもなく、ただ黙って見つめている。つないでいる手も、力なく私の手を触っているような感覚だった。私は思わずその手をぎゅっと握った。それに反応した時人は少し驚いたような顔で私の顔を覗いてきた。
「……驚かれましたか」
私は顔を伏せたまま思いっきり首を横に振った。
「……ところで、来夢さんの嫌がらせはなくなりましたか？」
すぐには返答できなかったが、軽くうなづいて見せた。
「よかったですね、本当によかった。これでようやく来夢さんとの

約束を果たせました。……といっても私はほとんど何もしていないんですけどね」
ふふ、と時人が笑う声が聞こえた。それでも顔を上げることができない。
「最後に私のことを言うことができましたし……そろそろお別れの時間です」
私は顔を上げなかった。顔を伏せたまま、頭の上から時人の声を聞いている。どうにかしないといけない、頭の中で必死になって考えていた。
「目の前にいる通り、私は自分自身の身体に帰ることもできず、もうこの夢幻郷の住人となっています。それは私自身が望んだことですし、もうどうしようもできません。こんな私に無理やり付き合ってもらった来夢さんには大変申し訳ないと思っています。本当に……早く気づけばよかったと後悔しています。私にとってこの夢幻郷は、私の暮らしそのものですが、来夢さんにとってこの夢幻郷はただの夢なんですよね。この数日間、変な体験をさせてしまってすいませんでした。どうか早く忘れて、現実での生活を楽しんでくださいね」
時人の明るい口調が胸を苦しくさせた。何か言わなければいけない。目を強く閉じ、自分の気持ちに向き合った。
――あんたは時人に何を言いたいの！来夢、今しかないのよ！
決心して、私は勢いよく顔を上げた。顔を上げると時人が優しく微笑んでいた。
「現実の生活を楽しむことなんてできない！」
時人の視線から逃げず、見つめたまま強い口調で叫んだ。時人は小さな声で「えっ？」というと驚いた顔をした。私は構うことなく、握っている時人の左手を離しその手首についている腕輪を取ろうとした。
「ちょ、ちょっと来夢さん！何をしているんですか？」
驚いた時人は、私の肩を掴んできた。それでも私はやめなかった。

両手で腕輪を取ろうとしたものの、ぴったりとはまっているのかなかなか取れない。そこに肩を掴んでいる右手の白く輝く指輪が目に入った。標的をそちらへと移し、その指輪を時人からはずそうとした。片方の手で時人の手首を掴み、もう片方の手で指輪を握り取ろうとする。

「来夢さん！」

悪戦苦闘していると、時人が私の手を振り払い両肩を掴んできた。真正面に驚いた顔をした時人がいる。

「一体いきなりどうしたんですか？」

「……その腕輪と指輪を取れば住人じゃなくなるんでしょ？だから取ろうとしたのよ」

目線を逸らすことなく言うと、時人は一瞬目を見開き驚いていたがすぐにため息を漏らした。

「来夢さん、この腕輪と指輪は私の意思がなければはずれません。どうして取ろうとしたんですか？」

「あんたが……時人があんまり寂しそうな顔から……。せめて住人をやめさせてあげようって思った」

すると一変、時人は険しい表情となった。

「住人をやめさせる？私は寂しいとは一言も言っていませんよ。それとも、来夢さんは私にさっさと死ねとでも言っているんですか？」

私は黙って時人を見た。徐々に時人の口調が強くなっていく。

「私は三十年も前に死んでいるんですよ？住人をやめて、そこに寝ている私に触れるということは死を意味しているんですよ？それをわかって来夢さんはそんなことをしようとしたんですか！」

私は思いっきり力を入れ、肩を掴む時人の腕を振り払った。

「わかってるわよ！信じたくないけど、時人はもう死んでるんでしょ？その上、こんな暗い世界に一人っきりなんて寂しすぎるよ！時人は言ってないかもしれないけど、表情が寂しいって言ってるの！」

はっとした表情になり、みるみる時人の険しい顔が緩くなってくる。

「私をこの世界に引き入れたのも、その寂しさに耐えられなくなったからなんでしょ？」
「そ、それは……」
時人は答えあぐねているように、視線を泳がしている。
「私は……時人が言ったように現実に生きている人間だよ。そんな私が時人のためにできることは、その苦しさを取ってあげることしかないの！私がいなくなったら、また時人は一人っきりになっちゃうんだよ？それなのに……時人のこと忘れて現実を楽しむなんて……できるはずない！」
私は叫んだ勢いそのままに、台の上の光に包まれている時人を見た。
「来夢さん？」
その様子を察したのか、怪訝そうに時人が私を見つめている。私はそんな時人をちらりと見て、すぐさまその台の上の光を見つめた。
「その腕輪と指輪が取れないんだったら、私も無理やり住人になればいいんだ」
「……何をしようとしているんですか？」
感じたのか、時人が私の手を掴もうとした。しかし、私はそれよりも早く光の中に眠る時人に向かって手を伸ばす。
「私もこの光から腕輪と指輪をもらう！」
「なっ！だ、駄目です！」
私が左手を伸ばし光に包まれた時人に触れたのと、時人が私の右手を握ったのが同時だった気がする。

寝ている時人に触れた瞬間、目の前が真っ暗になった。目の前に見えた眠るように倒れている時人の姿も、一瞬にして消えた。
――私はどうなってしまったのだろう。……あぁ自分以外の人間に触れるなって時人が言ってたっけ。
触れた左手さえも見えない。まるで初めて夢幻郷へ来たときと同じ環境だった。何も見えない。自分がここにいるのかさえわからな

い。
――けど、あの時よりは怖くない。私は自分でこの方法を選んだんだもん。
暗闇に身をゆだねていると、じんわりと右手が温まってくるような感覚になった。右手が温まってくるのと同時に、左手首につけていた腕輪もそこにいるんだと訴えるように熱を帯びてきた。
――どうして？
そのつけていた腕輪が淡く白く光る。そして、右手も淡く光る。右手が温かくなった理由。その淡い光によってその答えが照らされた。
「来夢さん……」
私の右手を優しく包んでいる時人がいた。私の顔を確認するとほっとした表情をし、優しく微笑んだ。
真っ暗で何も見えない空間の中、私と時人だけがいた。

【夢】２８．ありがとう

私の右手を時人が包み込むようにギュッと握り締めている。どれぐらいの広さなのかもわからない暗闇の中、ほっとした表情の時人の顔だけがぼんやりと見える。

「……時人？なんで……ここに」

「よかった……本当に、無事でよかった」

ほっとしている時人から目を離し、周りを見渡せば黒一面で何もない。呆然と眺めていると自分の存在さえ消えてしまいそうだ。しだいに頭がぼーっとしてきて、眠気に近いものに襲われる。目を開けているのか閉じているのかさえわからない。何も考えられなくなってきて、このまま暗闇に身を任せたいという衝動に駆られた。

そう思った時、時人が強く右手を握り締めてきた。

「来夢さん！意識をはっきりさせてください！」

びくっとして視線を時人にゆっくりと移した。眉間に力を入れ、険しい顔している。目が合うとより強く右手を握ってきた。

「目を閉じてはいけません！永久に現実の世界に帰られなくなりますよ！」

「もう……帰られなくなってもいいよ。私……このまま眠りたい気分なんだ」

「駄目です！いいですか、よく聞いてください！私は本来自分自身の身体に戻れない身というのは先ほど説明しました。しかし私は今この場にいます。それは、吸い込まれてしまいそうになった来夢さんを離さなかったからです。ですがおそらく、来夢さんから手を離してしまったら、私は即夢幻郷へと戻ってしまうでしょう。そして来夢さんはこの暗闇の中で一生目覚めることのない眠りについてしまい、永久にここから出られなくなるんです！来夢さん、意識を私に集中させてください！絶対に寝てはいけません！」

そう言うと時人は私を両手で抱き寄せ、きょろきょろと周りを見

渡している。頬に当たる胸板は思ったよりもたくましい。真っ暗な暗闇しか見えなかった視界が、抱き寄せられたことによって淡い光に包まれる。石のように重くなるまぶたを必死に開け、時人の顔を見上げた。

「私が絶対に助けます！……ここは私の意識の中、必ずどこかに出口があるはずです！」

まるで言い聞かせるように、必死の形相で何も見えない暗闇をあちこち睨みつけている。腕にも力がこもり、私をギュッと抱き寄せた。そんな時人の行動が無駄になっては申し訳ないと思い、眠気に耐える。目を開けるという意識をしないと、自然にまぶたが閉じてしまいそうだ。時人が言ったように、意識を時人に集中させた。

「ありがとう。……ごめんね、私、最後の最後まで時人に頼りっぱなしだ……」

「……どうして私の身体に触ったんですか？危険だということは前に言ったはずです。それに住人になろうなんて……一人しか駄目だと言いましたよ」

顔こそこちらを向かないが、声の具合から怒っているようだ。前に進んでいるのか、時人の短い白髪が風になびくようにゆらゆらと揺れている。

「……だって、あのままもう時人に会えないなんて嫌だった。時人のこと忘れるなんて……寂しいよ」

「だから私は寂しくありませんって。心配してくれるのはありがたいのですが……」

「違う」

はっきりとした言葉で、時人の言葉をさえぎった。いきなり言ったためなのか、少し驚いた表情をした時人は視線をこちらに向ける。

その時人の目を見つめつつ、本当の気持ちを確かめるためそっと自分の胸に手を当ててみた。……見つめるだけで鼓動が早くなっていく。

さっき私は、時人が寂しそうな顔をしていると言った。それは本

当だった。だけど、それだけじゃない。仮に、この胸の鼓動がなくなってしまうと考えると、答えは簡単だった。
「私が……寂しいのよ」
ようやく気がついた。この胸の苦しみ。難しいことではなかったのだ。
時人が寂しいからといって、もう夢幻郷に来ることができなくなるからといって、何かしらの理由を無理やり作り誤魔化していた。
時人と私の住む世界の違いからという理由で、気づかないフリをしていた。気づいてはいけないと思っていた。そうしないと辛い。
辛いことには変わりはない。だけど、辛いからと言って自分の気持ちを誤魔化すことのほうがもっと辛い。寂しいという言葉に偽りはない。
「ら、来夢さんが……寂しい？」
困惑した表情で時人が歯切れの悪い言葉を言っている。
改めて思い返すと、こんな言葉を面と向かっていったのは初めてかもしれない。困惑するのは当然だと思った。もっと困らせるような言葉を言ってやろうかと思ったがやめた。これ以上時人の気持ちを知ることが辛い。だから、別の話を振った。
「……時人は、私がいなくなった夢幻郷を見てホッとでもするの？」
「え……あ、いや。……で、でも、確かにあちこち動かなくてもいいのでホッとするかもしれませんね」
「ふん……失礼なやつ」
緊張していた時人の顔がようやくほぐれた。それを見た私の心臓はまた早く鳴り始めた。もしかすると、この鼓動が時人にも伝わっているのかもしれない。だけど伝わってもこれ以上は進まないだろう。時人もわかっているはずだ。だからこそ私を夢幻郷から追い出そうとしている。
すると、なびいていた時人の髪が止まった。
「上に……うっすらと薄明かりが見えます」
見上げる時人に釣られて、私も見上げてみた。真っ黒な空間に、

うっすらと灰色の点が見える。薄明かりと言えるのかはわからないが、確かにそこだけ周りと違って見えた。近づいて行っているのか、時人の髪が再びなびく。
「もしかしたら、あそこから出られるのかもしれません」
無音の暗闇の中、私と時人だけがいる。点だった灰色が少しずつ穴へと変化していく様を見ながらそう思った。あの穴に着く時間までが私と時人に残された時間なのだ。
「来夢さん、眠ってはいけませんよ」
時人が見上げていた顔をこちらへと向ける。
「大丈夫です。もうすぐですから」
にこっと笑顔を見せると、再び顔を上へと向けた。
その『もうすぐ』ということ言葉が、私の胸をちくりと刺さった。
「……時人」
「はい、なんでしょうか」
「私を……夢幻郷に呼んで、後悔してない？」
「後悔……ですか？どうして」
不思議そうに見る時人を見ながら、夢幻郷でやったことを思い出していく。遠い昔のようで長い時間のようで、眠気に襲われているせいのなのかついさっきまでのように思い出される。
「いきなり私の目の前に現れて、その次の日にはいきなり犯人探しの手伝いをしろって頼んで……。亀田さんの家に一緒に行って、調べたよね。それで次の日には、元気がなかった私を励ましてくれるためにキャッチボールしたよね。……あの時の時人下手だったね」
「……生きていた時ずっと寝ていたもので、あまりやったことがなかったんです。どうしたんですか、いきなり……」
「やったことなかったのかぁ。……そのあとは私とのおしゃべりにも付き合ってくれたでしょ。あと遊園地に押しかけて、いきなり不機嫌になって嘘のことを言ってきたよね」
時人の言葉、顔が鮮明に思い出される。
なびいていた時人の髪が止まると、不思議そうな顔をして時人が

私の顔を見てきた。どうやら止まったらしい。
「来夢さん、どうして今そんなことを？」
そんな時人の問いかけを無視して、再び思い出す。
時人の瞳がじっと私を捉える。時人は確かにここにいる。夢だろうが、私を抱き寄せ見つめている。
「会って話したかったのに二日間時人は現れてくれなくて、なのに辛くて泣いていたらひょっこり現れて……。喧嘩になりそうになっても、時人は私の味方だって言ってくれて……私にはもう嘘をつきたくないと言ってくれて……嫌がらせがなくなったって私が言ったら、よかったって言ってくれて……」
時人はきっと後悔している。
時人は一緒に行動してくれた内面からも私を励ましてくれた。しかし、私が近づけば近づくほど時人の判断が鈍ってしまっていた。
「私じゃなかったら……図々しくない人だったら……時人は苦しんでなかったよね」
ふと亀田さんのことが過ぎる。気持ちを伝えられず私を恨んでいた。周りを取り巻く環境が違えど、少し似ている気がする。
「私と……会わなければよかったね」
口に出すとズキッと胸が痛んだ。
私じゃなく、もっと別の人だったら時人も住人から解放されていたのかもしれない。時人に頼りすぎたばかりに、甘えすぎたばかりに、やりづらくなってしまった。私がいくら住人を解放してあげたいと思っても、こんな風に結局助けてもらっている。何もしてあげられない。時間がないのに私は眠気と戦っている始末。
――あんなに優しい言葉をかけてもらったのに、手伝ってもらったのに私は……。
すると、時人が再びギュッと私を抱き寄せてきた。
「私は来夢さんが夢幻郷に来てくださったことに、後悔などしていません。むしろ感謝しています」
はっきりとした口調で時人は言った。

「今おっしゃったことは、私一人では経験できなかったことです。それを来夢さんが教えてくれたんです。夢に逃げた私に、来夢さんは現実での素晴らしさを話してくれた。現実で会えるなら話し相手になると言ってくれた。その言葉がどんなに嬉しかったことか。……来夢さんは、一人ではわからなかったことを教えてくれたんですよ」

微笑むと、再び時人の髪がなびく。後ろの遠くに見える穴も少しずつだが大きくなっていく。

すると時人が突然抱きしめてきた。顔が時人の肩に乗り、私の頭に手が添えられる。身体から直接時人の鼓動が伝わってきた。

「会わなければよかったなんて……そんなこと言わないでください。わかりますか、私の心臓はこんなにも動いている。来夢さんと会うたびにひどくなっていったんですよ」

そのまま時人は黙りこみ、しばらく抱きしめたまま動かなかった。私もゆっくりと時人の背中に手を回した。温かい。時人の鼓動なのか、自分の鼓動なのかわからないがドキドキとする。ずっと、このまま一緒にいられたらいいと思った。

「……来夢さんといると、死んでいるはずなのに生きているような感覚になれたんです。だけど……それは間違いです。私の勝手で来夢さんをこの世界に縛り付けることはできません」

そう言うと、ゆっくりと肩を持ち体を離した。

「ですから……私は来夢さんを夢幻郷に来れないようにします」

髪の揺らぎが止まった。ふと、見上げてみると点にしか見えなかった灰色が、人が一人通れるほどの穴になっている。

「……その穴から出ればきっと夢幻郷へ戻ることができます。ですが、身体になにかしらの影響があるかもしれません」

時人は申し訳なさそうに、顔を背けた。

「なんで時人が……そんな顔しなきゃいけないのよ。私が触ったからいけないのよ……時人が気にすることじゃないよ」

「……なんとなくその影響について、予想できているんです」

「え……そうなの？」
時人は心配しなくていいとでも言うように、微笑みながら首を横に振った。
「……夢から覚めると思えば大丈夫です」
「そう……」
傷だらけになろうとも覚悟はできている。どうなるのかと詳しく聞いたところで、どうこうできるわけでもない。時人が大丈夫と言うならその言葉を信じたいと思った。
時人は私から視線をはずすと、自分の予想している影響でも考えているのか悔しそうな顔をしている。私は肩に手を乗せている時人の手に、そっと手を重ねた。
「そんな顔しないで。最後ぐらい……笑ってよ」
そんなことを言いながら、自分がうまく笑えているのか不安だった。時人は私の顔を見ると、笑ってくれた。
「……そうですね。あ、そうだ。来夢さんのその腕輪……譲っていただけませんか？」
「え……これ？」
それは前に時人からもらった白い腕輪だった。私が左手首から腕輪をはずし、時人の右の手のひらに置いた。それを見つめながら、時人が言った。
「大事にしますね」
「……何、それを私だと思ってくれるわけ？」
半分冗談で言ってみた。ところが、そう言われた時人は真面目な顔つきでこちらを見た。
「そうです。これさえあれば、私は一人きりではないと思えそうですから」
優しい顔だった。何よりも好きだった。いつからなのか、どうしてなのか、自分でさえわからない。
時人は私の左手を自分の右手の上に乗せ、腕輪と一緒に上から包み込んだ。

「今までありがとう」
包み込んでいる時人の手を温かく感じる。何も見えない暗闇だからこそ、時人の気持ちが温もりが痛いほど伝わって来る。
この言葉になんと返せばいいのだろう。伝えたいと思うのに言葉がうまく出てこない。
「時人、私……私……」
必死に言葉を探しているうちに涙が溢れてくる。
「来夢さん」
そう時人が言って、私の言葉を妨げた。時人の落ち着いた声が私の胸に響き渡る。
「今まで来夢さんにもらった言葉や力が、私を強くさせています。……これからは私と来夢さんがこんな風に会うことはないでしょう。ですが、互いに消えてしまうわけではありません。私はこの夢幻郷に、来夢さんは現実に戻るだけです」
目の前が霞む。ただ涙が流れていく。
「……私はいつでも夢幻郷にいます。来夢さんが辛いときや悲しいときでも、私は見守っています。それをどうか忘れないでください。……もし、夢を忘れてしまってもいつか思い出すかもしれません。ですが、それだけで十分です。深追いしないで、現実を見つめてください」
「夢を……忘れる？思い出す？」
一瞬時人の表情が再び曇ったように見えた。しかし、時人は私の言葉を気にせず再び微笑んだ。
「夢は夢幻郷に繋がっています。そして私はその夢幻郷にいる。目を閉じれば、夢の入り口。そして夢幻郷への扉」
時人は私の両手を強く握ると、再び上昇し始め灰色の穴に向かって一直線に進んでいく。
「来夢さんが夢を見れば、私は来夢さんに会えます。こんな風に面と向かっては無理ですが、また会えるんです。目を閉じれば会えます。……いつかまた会いましょうね」

そう笑い顔見せた時人の顔が最後だったと思う。
「時人……ありがとう」
灰色の穴に二人で入った瞬間、私の記憶は消えた。両手に残る感触と胸の高鳴りだけを残して。

【夢】２８．ありがとう（後書き）

更新が遅れてしまい申し訳ございませんでした……。
エピローグを入れてあと二話でこの物語は終了です。もう書き終えましたので、明日には完結させようと思っています。
期待にそえられる内容となっているのか不安ですが、お楽しみに。

【現】29．始まり

長い、長い夢をずっと見ていたような気がする。しかし、それを思い出すことができなかった。

いつものと変わらない日常が流れていく。朝練に行き、授業を受け、新しく加わった亀田さんと香織との昼休憩があり、また夕方はクラブに熱中する。不満などなかった。昼休憩は、亀田さんが加わったためなのか、それとも香織が池口と付き合い始めたせいなのか、恋の話が多くなった。不快とは思わなかったが、それを聞くと何か後ろめたさを感じていた。

そんなある日の昼休憩の時間、亀田さんが突然話を切り出した。

「前に言ってた合コンの話、やるから今度の日曜日予定空けておきなさいよ」

そう言った亀田さんの顔はにやにやとしている。私はご飯を運んでいた箸を思わず止めた。

「はぁ？合コン？本当にやるつもりなの！」

「当たり前でしょ。忘れたとは言わせないわよ。これは私の厚意なのよ、素直に従いなさい？」

見下された、とまではいかないが、ふんと鼻で笑うと再びパンを食べ始めた。あまりの強引さに呆気に取られてしまった。

「でもさ、亀田さん。前、らむが相談してたじゃない。それを無視しちゃらむがかわいそうだよ。それに合コンって……相手はどんな人たちなの？」

「近くに男子高があるでしょ？あそこのやつらとよ。何、香織ちゃんも来たいわけ？」

「いやいやいや！そんなわけないよ！……男子高って下馬高校（したばこうこう）だよね。そんなところにも伝手があるんだぁ」

「ふふ、私をあまりなめないでくれる？」

香織は感心した様子で感嘆の声を出している。亀田さんは残っていたパンを食べ終わると、持ってきたビニール袋にゴミを入れながら私を見てきた。
「……どうなのよ。あんた行きたいの？嫌なら無理には行かせないわよ。ってか本当に、前言ってた人とは今どうなのよ。あんた何にも言わないんだから」
「あ、私も気になるなぁ。あの後どうなったの？」
熱い二人の視線が私へと集まる。その二人を見つつ口を開くが、何を言えばいいのか困ってしまった。
「た、確かに前相談したけど……思い出せないんだ」
「思い出せない？」
と二人同時に言葉を言った。二人とも驚いた表情をし、互いに首をかしげ合っている。
「ま、まぁ……もういいんだあれは。だから、せっかくの亀田さんのご厚意だし合コン行くよ。亀田さんの化けの皮を剥ぐのも楽しそうだしね」
そう言うと、亀田さんがムッとした顔をした。隣にいる香織もくすくすと笑っている。
自分がこの二人に相談したことは間違いない。しかし、今、どうしてあんなことを言ってしまったのか、誰に対しての言葉だったのかが思い出せないのだ。
ものすごく悩んでいたと思う。しかし、その対象が誰なのかがわからない。何か大事なことを思い出せそうで、思い出せないもどかしさ。
きっと時間が解決させてくれる、そう思い合コンに行くことに決めた。

日曜日になり、待ち合わせ場所であるママレードへと向かった。ママレードは初めて亀田さんを連れて行って以来だった。
着いてドアを開くと、いつものように乾いたような鐘の音が鳴り

響く。店内にはカウンターに一人、座っているだけだった。
「いらっしゃい」
花柄のエプロンに、今日は白いバンダナをつけたあいさんがカウンター越しから声をかけてくれた。私はそのままカウンターの椅子に腰掛けた。
「すいません、今日は待ち合わせしてるんです」
「あらそうなの。全然構わないわよ。外は暑いものねぇ。……あ、お水でも飲む？」
「あ、じゃあいただきます」
カウンターの後ろを向くあいさんの背中を見つめながら、ふと横にある写真立てが目に入った。
――あの写真に写っている人……どこかで見たことがある……。
見覚えのある男子だった。その人の顔を見つめると、あの高鳴りが蘇ってくる。忘れている何かが胸をちくちくと刺してくる。
「あいさん。すいません、その写真立てを……もう一度見せてもらえませんか？」
「え？……あぁ。あなた前にもそう言ってたわねぇ。もう一度見たいの？」
動揺が抑えきれず、忙しく頷いた。あいさんは氷の入ったコップを私の目の前に置くと、写真立てを私の前に差し出してきた。
「はい。……本当にこの子懐かしいわねぇ。……あら？」
じっと写真に写る青年を見つめた。どこかで、どこかで見た覚えがある。必死になってなかなか出てこないものを思い出そうとした。
「ちょっとあなた！」
叫んだあいさんに驚き、思わず顔を上げた。しかし、あいさんは私ではなく一つ席を空けて座っていた男子に向かって言っていた。
あいさんは驚いた顔をしていた。そのあいさんに釣られて私も横を見た。
座っていても分かる背の高さ。短髪でつんつんとした頭に、あまり焼けていないが逞しい腕。その横顔は、遠目からでも分かるはっ

きりとした目鼻立ちだった。見た瞬間、思わず息を呑んだ。
「この写真に写ってる人そっくりじゃない！この人と何か関係ある人？」
「え……？俺ですか？」
聞いたことのあるような声色だった。その男子がゆっくりと私の方を見た。目と目が合うと、その人も驚いた表情をした。
真正面から見た顔でも、やはりどこかで見覚えのある顔だった。
自分でもわかるほど心臓が激しく動いている。
その男子の目に釘付けとなる。忘れていたものを思い出せそうで、それを必死に探している気分だった。
「……あら、二人とも知り合いだったの？」
見ると、私と男子の間にいたあいさんが不思議そうな顔をして首をかしげていた。その声にはっとなり、ようやく視線をはずした。
「あ、い、いえ。……写真ありがとうございました」
誤魔化すように笑顔を作り、写真立てをあいさんに手渡した。
受け取ったあいさんは、写真立てとその男子を見比べながら「似てるわねぇ」とつぶやきながら、再びカウンターの後ろを向いた。
「あの、どこかで会いませんでした？」
動揺が治まりきっていないところに突然声をかけられた。
驚き横を見るとその男子はずっと私を見ていたらしく、じっと見つめてくる。なぜか恥ずかしくなり顔を俯かせると、その男子は空いていた私の隣の席に移動してきた。
「すいません、突然変なこと言ってしまって。なんか見覚えがあるんですよね……。あ、思い出した……夢だ」
「ゆ、夢？」
拍子抜けした声を出すと、その男子はふふっと笑い出した。その笑顔も見覚えがある。
「……信じてくれないと思うけど、本当なんだ。すっごい切ない夢だったように思う。そんな夢にあなたそっくりの人が出てきたんだ。……なんだろ、初対面のはずなのにずっと前から知ってる気がする」

すると、照れくさそうに頭を掻きながらその男子は頬を赤く染める。
「あー恥ずかしい！なんかナンパしてるみたいだ。はは、ごめん変なこと言って……」
知らない人のはずだ。なのに、なぜこんなにも安心できるのだろう。近くにいるだけなのに、こんなにもドキドキするんだろう。
「……私も、あなたと同じように、前から知ってる気がするんだ」
「え？」
「これって……一目惚れってやつかな？」
思わず口から出てしまった。しかし、その男子は目を細め嬉しそうに笑った。
「本当？俺もそうかもしんない」
笑い合う私たちに対して、あいさんが小さく咳払いをした。

少し話をして二人で店を出た。話を聞くと、実はその男子も合コンへ行く予定だった下馬生だったらしい。私は亀田さんに電話をし合コンの断りをした。
「すっごい偶然だな。……あ、そうだ。今さらなんだけど、名前は？」
「来夢。木元来夢っていうの」
「来夢……。すごいな、夢に出てきた人の名前まで一緒だ」
「え？」
「いいや、なんでもない。……あ、ごめん、俺の名前はね……」
その日から、私と彼の関係が始まる。

忘れていた何かが、私と彼を結びつけたのだろうか。次第に後ろめたさもなくなってきた。
しかし家に帰って寝る間際になると、落ち着かない。何かを思い出せそうになる。必死に考えていると、ふと言葉が過ぎった。
窓だ。

――せめて窓を閉じないで。
そんなことを言われてたような、言われていないような。閉じてしまったらいけないような気がした。
――また逢いましょう。
また一つ思い出す。窓を全開にする。そこから眺める風景は、普段と変わらない夜のネオンに着飾れた街だった。
これでいい。
安心してベッドに入った。目を閉じて夢へと誘われる。
夢は決まって、誰かが私を見守ってくれていた。顔は見えないが優しい微笑みを浮かべて。

【エピローグ】

暗い世界、無音の空間。一人佇むが、前とは違う。腕に白い腕輪がある。

その腕輪にそっと手を当てると、かすかに温かさを感じた。一人じゃないと思える。そしてそのままある場所へと向かった。

行った場所はある高校生が眠っている部屋だった。目の前に寝ている男。それはようやく探し当てた人物だった。

「生まれ変わりさん」

そう言っては見るものの目覚めるはずもない。だが、夢を覗いてみたり外見を見る限りでは間違いなかった。おかしな気分になったが、それだけ時間も過ぎているということだろう。あってもおかしくないことだった。

その男のおでこにそっと手を置いた。

どれだけの時間が過ぎているのか知る由もない。たが、世界は静かに変化し続けている。

それでも足はいつものように、あの家へと向かっていた。開いているはずの窓へ向かって。

いつか開いていた窓も閉じるだろう。でもそれは喜ばしいことだ。閉じる日が来ても覚悟はできている。またそっと腕輪に触れた。

行ってみると、窓が開いていた。ほっと思いつつも窓へと近づく。そして、目覚めることはないが音を立てずに忍び込んだ。

部屋のベッドの上を見るとすやすやと眠っている。前まで話していたのが嘘のようだ。その顔を見ると一人では感じることのできない淡い感情が胸を締め付ける。

「また逢えましたね」

暗い空間のはずなのに、何も感じられない世界のはずなのに、この部屋にいるだけで温かい気持ちになれる。
「……生まれ変わりさんに、出逢うことができましたか？」
その寝顔に尋ねてみる。当然だが答えは返ってこない。
それでいい。
誰かと出会い、もしかしたら恋に落ちるかもしれない。その相手が生まれ変わりならば……なお良い。
それに、私にはこの腕輪がある。腕からその腕輪をはずし手に持った。
腕輪を見つめると、自然に顔が浮かんだ。さまざまな顔を見てきた。どれも鮮明で消えることはない。
現実でどれぐらいの時が過ぎているのかわからない。そう思っていても、まだ自分が一番近い存在だと願っている。
……やはり私は自分勝手な人間だ。
生まれ変わりにしろ私ではない。
だが純粋に幸せを願っている。だからこそ今、目の前で眠っている。

一緒にいた時、少しでも私の気持ちをわかってくれただろうか。
「……好きだったんですよ。知ってました？」
そう言っても聞こえるはずもない。

悔しいので、腕輪にそっとキスをした。

【エピローグ】（後書き）

長いお付き合いありがとうございました！作者大感激でございます……。

力不足故に、内容がぐだぐだになってしまいました。誤字脱字もあると思います。内容自体に不満があるかもしれません。

それでも！

ここまでお読みになってくださった方、時間を割いていただいてありがとうございます、こんな作品に少しでも興味を持っていただいて本当に感謝いたします。

最後どう締めようかと迷っていましたが、無事に完結できたのは読者様のおかげだと思っています。

お読みいただきまして、ありがとうございました！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0953e/

目を閉じればあなたに逢える

2010年10月8日14時19分発行